

難読地名の読みと由来

日本国内版

九州・沖縄地方編



上総の国いちはらの歴史を知る会

日本国内の地名は、有史以来に付いたものや、地域の統廃合などの都合で命名された地名があります。そしてその地名は素直に読める地名と、読めない地名があります。ここでは難読地名を都道府県ごとに選び、その読み方と由来を調べてみました。

福岡県



NO	地 名	読 み 方	由 来
1	鹿喰	かじき	北九州市・由来は、一般には「鹿が草木を食い荒らした場所」や「鹿がよく集まり草を食べた場所」を意味する地名と思われる。
2	猿喰	さるはみ	北九州市・由来は、昔この地で大きな猿が田畑の作物を食い荒らしたという伝承に由来する説と、アイヌ語の起源説がある。

3	ニタ松	ふたまつ	北九州市・由来は、一般的には、二本の目立つ松があったか、二つの松原か松林があった地域と思われる。
4	馬寄	まいそう	北九州市・由来は、古くは「馬をつなぎ休ませた場所」や「馬を集めた場所」を意味する語に由来すると思われ、門司区周辺の旧村名「馬寄村」などに残る歴史的地名です。
5	和布刈	めかり	北九州市・由来は、「和布（わかめ）を刈り取る」という意味の言葉と、古くから海でワカメを刈り取って神に供える和布刈神事を行って来た和布刈神社に由来する地名です。
6	門司	もじ	北九州市・由来は、大化2年（646年）に現在の和布刈神社付近に設けられた関所「門司関（もじのせき）」に由来し、「門（関所のある場所）を意味する地名が定着したもの。」
7	蜆住	あますみ	北九州市・由来は、海辺で漁労に従事した「海人（あま）」＝蜆（あま）が住んだ場所を意味する地名と思われる。
8	修多羅	すたら	北九州市・由来は、古くは「首多羅」や「首多良」などと書かれた地名が変化したもので、古語の「首（かしら/先端）」と地形を表す語が結びついた地名と思われる。仏教用語の「修多羅（経の意）」との関係も指摘される説もあるが、確定説ではありません。
9	脇田	わいた	北九州市・由来は、山間の谷間に位置する地形から「別れた田」や「谷あいの田」を意味する古語「ワキ（脇・分）」と「田」が結び付いた地名と考えられ、谷筋に開かれた田んぼの集落を表す地名。
10	到津	いとうづ	北九州市・由来は、「船が川をさかのぼって津（港）に到る場所であった事から「到津」「津に到る」と呼ばれるようになったと説が広く知られている。この由来は到津八幡神社の縁起などに記され、古くからの水運の要地であった歴史を反映したものとされている。
11	鋳物師町	いもじまち	北九州市・由来は、江戸時代に小倉城下で鋳物師（鍋釜や鐘などの金属鋳物職人）が集住していた事に由来する町名。細川忠興が小倉城を築いた際、紫川沿いに点在していた鋳物師を現在の地域に集められたと伝えられている。
12	江南町	えなみちょう	北九州市・由来は、はっきりしませんが、「江（川）より南側の土地」を意味する一般的な「江南」という地名の用法から、近くの河川の南側」に位置する知育名として付けられた可能性が高い。
13	許斐町	このみまち	北九州市・由来は、古く宗像」地方にあった地名「許斐（このみ）」及び、そこを本拠とした武士の許斐氏の名に由来する地名です。
14	菜園場	さえんば	北九州市・由来は、細川氏の時代にこの地で野菜を作らせた「御菜園場」があった事に由来する。板櫃川左岸の愛宕山東麓に位置し、細川氏ゆかりの菜園場窯跡なども残っている。
15	日明	ひあがり	北九州市・由来は、もとの村名「干上村（ひあがりむら）」に由来し、干潟が干上るような地形や景観を表した地名が短縮されたものと思われる。古くは紫川河口の低湿地帯にあった地域。
16	合馬	おうま	北九州市・由来は、古くは「青馬」や「大馬」などと書かれ、山合

			いの谷に開けた集落で、馬の放牧や利用や谷あいの地形に由来する地名と思われる。
17	長行	おさゆき	北九州市・由来は、中世に見られる「能行（のうぎょう）村」という古い村名が時代と共に転化し、近世以降「長行」と表記されるようになったと思われる。
18	頂吉越	かぐめごし	北九州市・由来は、鱒淵ダムの建設で水没した旧頂吉集落の一部で「頂吉」という古い地名（及びそこにあった大岩や信仰）に由来し山間の谷を越えた場所を示す小字として名付けられたと思われる。「頂（かぐめ）」＝神が降りる岩や高所、「吉（よし）」＝良い土地という解釈が一般的です。
19	企救丘	きくがおか	北九州市・由来は、古代から中世にかけて豊前国に置かれていた「企救郡（きくぐん）」の名を受け継いだ地名で、この旧企救郡域の丘陵地にあることから「企救＋丘」として名付けられた。
20	朽網	くさみ	北九州市・由来は、「草が生い茂る湿地や入り江が、海水や川の作用で朽ちる・崩れるような低湿地であった地形を表す古い地名要素が由来とされ、古くは「久佐美」や「久左美」などとも表記もある。
21	徳力	とくりき	北九州市・由来は、古くは徳力村と呼ばれた地域に由来し、「徳のある力」や「恵み深い土地」といった意味合いを持つとされる古い地名です。中世から近世には成立していた歴史ある地名です。
22	母原	もはら	北九州市・由来は、「午（うま）の刻（正午）を過ぎて通ると山の神の祟りに遭う」とされた「禍原（まがはら）」が転じた地名と伝えられる。現在も集落名として残っている。
23	守恒	もりつね	北九州市・由来は、もとは「森津根」と書かれた森林地帯を指す古い地名が変化したもので、紫川東岸の丘陵に広がる森の「端や根元」を意味する地名と思われる。
24	金辺峠	きべとうげ	北九州市・由来は、もともとは「木辺」書かれたが、「金辺」と変えられたものの、読み方は昔のまま「きべ」と読まれている。
25	荒生田	あろうだ	北九州市・由来は、「荒れた田」や「荒地の田」の意味する古い地形語に由来する可能性が高いと思われる。周辺の古地名や姓の分布からも、開墾前の荒地地を示す地名とみる説が有力です。
26	穴生	あのお	北九州市・由来は、「穴の多い地形」や「洞穴のある場所」を意味する古い地名に由来するとされ、湿地や窪地の多い土地柄を表した地名と思われる。
27	永犬丸	えいのまる	北九州市・由来は、洞海湾の入り江を行き来した船の名「永犬丸」に由来する説と、中世の名主「恵犬丸（えいのまる）氏」の名田が地名かしたとする説がある。
28	京良城町	きょうらぎまち	北九州市・由来は、元来「教良木」であって「清い木」の意味をいう。すなわち霊木のある地で、その木を神明のよるところとして祭祀をい因んだところという。
29	洞南町	くきなみまち	北九州市・由来は、洞海湾の「洞（くき）」とその南側に位置するこ

			とを示す「南」を合わせたものとされ、洞海湾南岸の町の地名。
30	皇后崎	こうがさき	北九州市・由来は、神巧皇后が洞海で船をつなぎ止めた所だといひ帆柱山で伐った帆柱をここで立てたともいわれる。
31	上津役	こうじゃく	北九州市・由来は、古代の駅家「夜久の駅（やくのえきや）」に由来し、「夜久」が「役」に転じ、さらに上津や下津に分かれた結果生まれた地名と思われる。現在は上上津役や下上津役などの地名として残り、古代交通路と中世の上津役郷の歴史を今に伝えている。
32	河桃町	こうとうまち	北九州市・由来については不明。
33	木屋瀬	こやのせ	北九州市・由来は、寺院再興のための用材を集めた「木屋」がこの地に置かれた事に由来するとされ、遠賀川河畔の港町や宿場町として発達した歴史も、この名に深く結びついた。
34	幸神	さいのかみ	北九州市・由来は、道祖神や塞ノ神を意味する「幸神（さいのかみ）信仰に由来する地名とされ、昭和期に造成された住宅地の町名として採用された。
35	陣原	じんのはら	北九州市・由来は、長崎街道沿いにあった宿場の「本陣」や軍勢の陣が置かれた場所に由来し、「陣の原（はら）」が転じた地名。
36	野面	のぶ	北九州市・由来は、「野原一面」や「野の広がる土地」といった意味を持つ語（野面＝んもづら）に由来し、広い野や原野状の地形を表した地名と思われる。
37	唐原	とうのはら	福岡市・由来は、村内にあった「唐原塚（とうのはるづか）」という塚（古い墓や墳丘）に由来する地名とされ、「唐原村」の村名から現在の町名と受け継がれたと思われる。
38	馬出	まいだし	福岡市・由来は、筥崎宮（はこざきぐう）の行事に使う馬をこの地で調教し、そこから「馬を出した」事に由来する地名とされた。中世には「筥崎馬出」や「馬出町分」とも記され、筥崎宮門前町として発展した。－
39	御供所町	ごくしょまち	福岡市・由来は、中世以来この地に多くの寺院が集まり、寺で仏前の供え物をそろえる「御供所（ごくしょ）置かれた事に由来する地名です。現在も聖福寺や東長寺などの寺院が密集している。
40	雀居	ささい	福岡市・由来は、御笠川右岸の低地に営まれた古い集落「雀居（ささい）に、神社や祭祀に関わる「御（お）」を冠したものと思われる。雀居遺跡など古代の集落跡に由来する地名と思われる。
41	対馬小路	つましょうじ	福岡市・由来は、豊臣秀吉の博多復興の際に海辺に置かれた対馬藩（宗宇治）の蔵屋敷に由来し、博多津中の七小路の一つとして名付けられた地名という。
42	席田	むしろだ	福岡市・由来は、古代の郡名「席田郡（むしろだぐん）及び荘園名「席田庄」に由来し、条里制がしかれた水田地帯を指した古い地名が現在まで残ったものと思われる。
43	立花寺	りゅうげじ	福岡市・由来は、かつてこの地にあった古寺「龍華寺（りゅうげじ）に由来し、その寺名が転訛して「立花寺」と表記されるように

			なったという。
4 4	警固	けご	福岡市・由来は、古代に鴻臚館近くに置かれた太宰府の防衛施設「博多警固所」があった事に由来され、万葉集など古い史料にもその名が見える地名です。現在の警固た天神一帯にあった警固所や、ここに祀られた警固神社の存在が、地名として受け継がれた。
4 5	日佐	おさ	福岡市・由来は、10世紀成立の「和名類聚抄」に見える筑前国那珂郡「日佐郷（おさごう）」に由来し、中世以降続く古い郷名が現在の地名として残ったもの。漢字も「日佐」や「日佐」などと表記が変化している。
4 6	警弥郷	けやごう	福岡市・由来は、明治20年に那珂郡上警固村と弥永村が合併して出来た「警弥村（けやむら）」の名を引き継ぎ、「警固」と「弥永」を合わせた合成地名が変化したもの。
4 7	壱岐	いき	福岡市・由来は、古くは「ユキノシマ（往きの島）」などと呼ばれ、朝鮮半島と本州を結ぶ「往来の島」を意味する」とする説が有力です。他に、「神の斎き居（い）」や「城や岬を表すキ」など複数の語源説がある。
4 8	小呂島	おろのしま	福岡市・由来は、神話に登場する大蛇「おろち」ではないかとも伝わるが、ほかに「オロ」には「少し」や「小さい」という意味もあるとしている。
4 9	柑子岳	こうしだけ	福岡市・由来は、山に自生していた柑子（こうじ/小型のミカン類）に由来し、柑子の多い山として「柑子岳」と呼ばれるようになったと思われる。
5 0	周船寺	すせんじ	福岡市・由来は、奈良時代の太宰府政庁のころ、この一帯に官船を管理する役所「主船司（しゅせんし）」が置かれた事に由来し、「主船寺」が「周船寺」と表記が変化したとする説が有力です。
5 1	女原	みょうばる	福岡市・由来は、「女（め）の神を祀る原」など女性神や巫女に関わる聖地的な「女原」が語源とされる説が有力です。
5 2	高祖	たかす	福岡市・由来は、背後にそびえる高祖山の名に由来し、「高い山のふもとの集落」を意味する山名起源の地名と思われる。中世には、高祖城や高祖神社が置かれ、この山を中心に地域名として定着した。
5 3	別府	べふ	福岡市・由来は、荘園時代に国司から特別な免符（別符）を与えられた区域名が「別府」と表記されるようになったことに由来する。元は「別符」や「別勅符田」などと書かれた特別区画の呼び名が、地名として定着したもの。
5 4	入部	いるべ	福岡市・由来は、中世文書に見える荘園名「入部庄」に由来し、「国司や地頭などの支配者が新たに入部（にゅうぶ＝領内に入る）した土地を意味する地名が転じたものと思われる。
5 5	早良	さわら	福岡市・由来は、古くは「佐波羅」や「佐原」などと書かれ、室見川流域の湿地や原野を指すふるいちめいが変化したものとされ、奈良～平安期には郡名「早良郡」として成立し、のちの早原町や早良

			区の名称へ受け継がれたと思われる。
56	椎原	しいば	福岡市・由来は、周辺に自生していた「椎（しい）の木」が多い原野や山地であったことから「椎原（しいばる）」と呼ばれるようになったと思われ、椎原川などの地名にも受け継がれている。
57	四箇	しか	福岡市・由来は、古くは「志加」や「志賀」などと書かれた地名が転じたとされ、四つの谷や四つの集落を意味する説や、古代の氏族名「志加（しか）」に由来する説もあるが通説で確定していない。
58	西新	にしじん	福岡市・由来は、江戸時代に今川付近が「西町」と呼ばれたのに対し、その西側一帯を「新西町」と呼んだ事が転じて成立した地名。
59	野芥	のけ	福岡市・由来は、一帯にススキなどの「芥（あくた＝雑草や屑草）」が生い茂る野原だったことから「野の芥」が「野芥」と呼ばれるようになったとする説が有力。
60	百道	ももち	福岡市・由来は、かつて干潟だったこの一帯で人々の足跡が縦横に交差した様子から「多くの道＝百の道」で「百道」と呼ばれるようになった、という説が一般的です。
61	櫟野	いちの	大牟田市・由来は、櫟（いちい・くにぎ）などの木が多く生えていた野（原野）に由来する地名。
62	御幸返	おこがえり	大牟田市・由来は、天皇や貴人の「御幸（行幸）」がこの地で引き返した、あるいはここまで来て折り返した事に由来する地名と解釈されるのが一般的。
63	教楽来	きょうらぎ	大牟田市・由来は、菅原道真が太宰府に左遷される途中にこの地を訪ねた際、里人が喜んで道を教えたことから「教え楽しむ」や「教え楽しんで来た」という意味で呼ばれるようになったと伝えられる説と、「清ら木（きょうらぎ）」が転じたとする説が有力です。
64	歴木	くぬぎ	大牟田市・由来は、「歴木（くぬぎ）」という木の名に由来し、この木が多く生えていた土地を指した事から生まれた地名と思われる。
65	久福木	くぶき	大牟田市・由来は、「久しく福がある木（地）」という端祥的な意味を持つ説と、古い氏族名や人名（久福木（くぶき））に由来する説があり、中世以来の集落名と思われる。
66	四ヶ	しか	大牟田市・由来は、もともと複数の小村や場所が四つ集まった事を示す地名で、「四つの村（場所）」を意味する由来とされている。
67	早米来町	ぞうめきまち	大牟田市・由来は、景行天皇巡狩の時、村人が刈り入れた稲束をいち早く天皇の御坐に献じたという故事によるものという。また、川の音と海岸の音から「ゾウメキ」と言われるようになり、後に「早米来」という漢字が当てられたという説もある。
68	怒縄田	ぬなわだ	大牟田市・由来については不明。
69	駛馬町	はやめまち	大牟田市・由来は、筑後川沿いのこの地が古くから馬の飼育や調教、馬の通行が盛んな場所であったことから、「馬が駆ける・走る」という意味を持つ漢字「駛」と「馬」を用いて名付けられた地名。
70	相川	あいごう	久留米市・由来は、一般的には「あい（間）＋かわ（川）」＝川に挟

			まれた土地や川の合流・交差部を表す地形由来の地名と思われる。
71	朝帰	あさがえり	久留米市・由来ははっきりしませんが、「朝に帰る人が多かった」や「合戦後に兵が朝に帰還した」などの俗説がある。
72	上川原	かみごうら	久留米市・由来は、一般的には「川の上流側（上手）の河原」を意味する地名です。
73	上津荒木	こうだらき	久留米市・由来は、「荒木村の東側（上手）に位置する地域」を意味する地名であり、その川沿いの低地や河川敷が「河原」と呼ばれてきたと思われる。
74	紅桃林	ことばやし	久留米市・由来は、南北朝時代に征西將軍宮・懐良親王を奉じた菊池氏の陣所が置かれた地で、その古い河原名などに「残ったもの」と思われる。
75	下川原	しもごうら	久留米市・由来は、一般的には「川の下流側にある川原（河原）の土地」を意味する地形的由来と思われる。
76	太郎原町	たろうばるまち	久留米市・由来は、中世文書に見える「大良原（だいらばる）」などの表記が変化し、「太郎原（たろうばる）」となったと思われ、個人名に由来する史実はない。
77	田主丸町	たぬしまるまち	久留米市・由来は、古くは「田主丸庄」と呼ばれた荘園名に由来し、荘園の支配者＝田の主（田主）と、地形を表す「丸（湾曲した土地）」が合わさった地名とされる説が有力です。
78	野伏間	のぶすま	久留米市・由来は、古くは「光勝寺村」と呼ばれた地域の一部で、野に伏すような低地や谷間の地形を表す語に由来する地名と思われ、周辺の川沿いの低地の地形と結びついた地名。
79	原古賀町	はらんこがまち	久留米市・由来は、中世にこの地にあったとされる「春野長者屋敷」の跡に由来すると伝えられる。近世には「原野古賀町」とも書かれ、柳川へ向かう街道沿いの町として発達した。
80	殖木	ふえき	久留米市・由来は、古くから植木の生産や植林が盛んだった土地柄を示す「殖木」が転じたとされる説が有力です。
81	益生田	ますだお	久留米市・由来ははっきりしませんが、「益（利益や豊かさ）が生じる田（田地）」という意味合いを持つ字義解釈が有力と思われる。
82	耳納	みのう	久留米市・由来は、山の形が人の耳を伏せて納めたように見えることから「耳納」と書くようになったとされ、古くは「水縄」や「水納」とも記され見ず野多い山地を意味したと思われる。
83	麦生	むぎお	久留米市・由来は、一般に「麦が生えている場所や麦畑のある土地」を意味する古語「麦生（むぎふ）」に由来すると思われる。
84	鹿狩	ろっかり	久留米市・由来は、古くは、「鹿を狩る場所」を意味する語に由来すると思われが、鹿の生息や狩猟と関わる地名というのが通説です。
85	三潅町	みづままち	久留米市・由来は、古くは「水沼（みぬま）の県」と呼ばれた地域に由来し、筑後川下流の沼皿鉢や水辺の多い地形を表す古い地名「水沼（みぬま）」が転訛して「三潅（みづま）」となったとする説が有力です。古代からの郡名「三潅郷」としても持ち入れられ

86	赤地	あかじ	直方市・由来は、古代の屯倉明「我鹿屯倉（あかみやけ）」に由来し「赤い土地」ではなく「我鹿（あか）」という古い地名要素が転訛したものとされる。
87	打向	うつむき	直方市・由来ははっきりしませんが、波や流れがぶつかる対岸や岬の向きなど、地形的特徴から生まれた地名と思われる。
88	御館町	おたてまち	直方市・由来は、一般には「御館」は館跡や城館に由来する地名であった例が多く、かつての館（領主屋敷）にもちなむ地名であったと思われる。
89	鴨生田	かもおだ	直方市・由来は、「鴨が多く生息した湿地や田んぼ」を意味する「鴨田（かもだ）」系の地名が転訛し、「鴨生（かもお）+田」と結びついた複合地名です。
90	感田	かんだ	直方市・由来は、中世の荘園名「感田庄」に由来し、遠賀川右岸一帯の荘園名がそのまま村名や大字名として残った地名と思われる。字義は「感じる田」や「神田」など諸説ありますが、確定した通説ではありません。
91	黍田池	きびたいけ	直方市・由来は、黍（キビ＝雑穀）」と「田」（田んぼ）」に由来する一般的な農耕地名と推測される。
92	神正町	しんせいまち	直方市・由来については不明です。
93	新入	しんにゅう	直方市・由来は、中世の郷名「新入郷」に由来し、新しく開かれた土地を示す「新」と、川の入り江や入り組んだ地形を表す「入」が組み合わさった地名と解釈されたもの。
94	知古	ちこ	直方市・由来は、古くは「知古村」と呼ばれた地域で、筑豊炭田開発以前からの集落名がそのまま残った地名であり、語源ははっきりしませんが「古い土地や古い集落」を意味する古語や地形名に由来すると思われる。
95	百目木	どうめき	直方市・由来は、「どうどうと流れる水の音」や「瀬音」を表す水辺の地名であるという説が有力です。
96	頓野	とんの	直方市・由来は、中世の郷名「頓野郷」に由来し、遠賀川右岸一帯を指した古い地名が現在の頓野や上頓野に残ったもの。
97	直方	のうがた	直方市・由来は、延宝3年（1675年）に東蓮寺藩から直方藩に解明された。改名するに当たり、儒学者貝原益軒の兄で、当時本藩である福岡藩から出向いていた貝原元端が「直方」と命名した。命名の由来は、地形的な特徴から「遠浅の干潟がまっすぐ広がっていた」という事にちなむ地名という。
98	羽高	はだか	直方市・由来ははっきりしませんが、鶏が羽根を広げたような高台か「端の高台」から付いた地名ではないかと推測される。
99	別田	べった	直方市・由来ははっきりしませんが、現状では「別れた田んぼ」や「区別された田」など、字義からの推定にとどまる。
100	六ヶ岳	むつがだけ	直方市・由来は、古くは「六嶽（むつがだけ）」と呼ばれた山岳信仰の対象で、周辺の六嶽神社や「六（むつ）ヶ岳」という表記に由来

			すると思われる。
101	行定	ゆきさだ	直方市・由来については不明。
102	行常	ゆきつね	直方市・由来については不明。
103	柞の木	ゆすのき	直方市・由来は、周辺に自生していた「柞（くぎ）」の大木・群生に由来する自然地名と思われる。
104	伊岐須	いぎす	飯塚市・由来は、中世に「壺岐須」とも書かれた古い地名に由来し、人名の「伊規須」姓の発祥地ともされ、周辺の「伊岐須川」などと共に古くからの地名と思われる。
	小正	おばさ	飯塚市・由来は、古く「小正村（おばさむら）」に由来し、現在の地名や姓「小正」にもつながると思われる。由来については諸説ありますが、字義から推測するに「小」は「小さな谷や個人まりした土地や谷・集落」などを表し、「正」は「まっすぐ」や「中心」や「正しい位置」を表す漢字で、道筋や基準点を示す地名に使われる
106	穎田	かいた	飯塚市・由来は、古代の「粥田（かいた）郷や粥田庄」の名が変化したものと思われ、「粥（かゆ）の田」＝良田を意味する地名に由来すると思われる。
107	鹿毛馬	かけのうま	飯塚市・由来は、古くはこの地にあった馬の牧から鹿毛（茶色の毛色）の良馬が多く出た事に由来すると思われる。鹿毛馬川沿いの馬蹄形の丘陵に築かれた鹿毛馬籠石周辺の地名として伝わっている
108	上・下・三緒	みお	飯塚市・由来は、中世文書に見られる嘉麻郡三緒郷・三緒村に由来し、遠賀川右岸一帯を指した古い郷名が近世以降も継承されたものと思われる。
109	柏の森	かやのもり	飯塚市・由来は、「カシワ（かや）」などの木が生い茂る森を意味する自然地形に由来する地名と思われる。
110	建花寺	けんげいじ	飯塚市・由来は、中世文献に見える「建花寺村」（建華寺村）という村名がそのまま現在の地名になったもので、近くを流れる建花寺川と同地にあった寺院名に由来すると思われる。
111	菰田	こもだ	飯塚市・由来は、かつての「薦田（こもだ）村」に由来し、「薦（こも）＝マコモなど水辺の草を指し、その生える田んぼを表す意味から生まれた地名と思われる。のちに「薦」が「菰」の字に変わった
112	目尾	しゃかのお	飯塚市・由来は、律令制下の地方官職「目（さかん）」の役人が、尾根状の地形に住んでいた事から「目尾」と呼ばれるようになったという伝承が由来と思われる。
113	津原	つはら	飯塚市・川の津（船着き場や渡し場）に広がる原野や台地を意味する地形語由来と思われる。筑前国穂波郡津原など中世以来の村名として記録されてきた地名が近世以降も残ったもの。
114	鷹羽	たかは	田川地区・由来は、「田川（たがわ）」という地名の語源になったとされる古い呼称で、鷹の羽のような川筋や地形のイメージから生まれたとする説があります。
115	猪位金	いいかね	田川市・由来は、古くは「井西氏ヶ根」や「椎金」などと書かれ、山

			林に多い猪（または椎の木）と、鉱物資源や価値のある土地を示す「金（かね）」が結び付いた「山の恵み豊かな土地」を表す地名と思われる。
116	伊加利	いかり	田川市・由来は、中世文書に「伊賀利」や「伊加利」などと記される古い地名で、鎌倉時代には「伊賀利庄」として現れる事から、この荘園名・村名が現在の地名に受け継がれていたと思われる。
117	位登	いとう	田川市・由来は、中世の荘園名「位登庄（いとのしょう）」や郷名「位登郷」に由来し、豊前国にあった古い地名がそのまま残ったものと思われる。
118	猪国	いのこく	田川市・由来は、伝承では「昔、村に猪折と士折という族が住民を困らせていた。これを聞いた日本武尊がこれらの族を捕らえて処刑したという。猪折の鼻を埋めた所を「猪之鼻」、膝を埋めた所を「猪膝」、尻を埋めた所を「猪尻」という言い伝えがある。
119	角銅原	かくどうばる	田川市・由来は、「角銅（かくどう）一族が住んだ原野に由来する地名と思われる。
120	岩屋	ごうや	田川市・由来は、「岩の洞窟や岩陰（岩屋）」の地形に由来し、信仰の対象となった岩や岩窟にちなむ地名と思われる。特に、朝倉郡東峰村宝珠山の岩屋神社などは、「社殿背後の岩窟と「宝珠石」と呼ばれる巨岩が地名や神社名が地名の由来とされている。
121	黄金ヶ丘	こがねがおか	田川市・由来は、周辺の川名が「黄金川」や川で採れる川茸（大欣川だけで採れる高価な食材）にちなみ「黄金のように価値ある川や土地」である事をイメージして付けられた新しい住宅地名。
122	糲	ほしい	田川市・由来は、古くは、豊前国香春車両の一部として登録される集落名で「糲＝ほしい（干し飯）に由来すると思われる説が有力
123	御祓	みそぎ	田川市・由来は、福岡県内では「御禊（ごけい/みそぎ）」に由来する地名はないが、「御禊は本来天皇が行う「みそぎ」の儀式を敬って行う言葉です。石川県に「御禊町」という地名があり。
124	見立	みたて	田川市・由来は、江戸時代に福岡藩が武家屋敷を選定や査定をした「御見立て」に由来し、藩主側の「お上による選定地」という意味から地名化したもの。
125	糲井	もみい	田川市・由来は、「糲（＝脱穀前の米）」と「井（い＝湧き水や井戸）」を合わせ、「糲を洗うや浸す井戸（湧き水）のある場所」を意味したと思われる説が有力です。
126	弓削田	ゆげた	田川市・由来は、古代に官職「弓削部（ゆげべ）」に関わる人々が開いた田地に由来する地名と思われる。鎌倉時代にはすでに「弓削田庄」として史料に見える。「弓削」は古代に弓を作る品部を指す。
127	芳ヶ谷	よしがたに	田川市・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると「芳」は「かぐわしい・良いにおい」「優れて良い」をもつ漢字で、「谷」は谷地形や谷あい」の集落を察すので「良い香りがする谷」という自然描写的な地名と思われる。

128	若咲	わかさ	田川市・由来ははっきりしませんが、「若咲神社」に関係か。
129	鬼童町	おんどうまち	柳川市・由来は、中世以来の小路名や村名「鬼童小路」や「鬼童村」に由来し、武家屋敷地に接した町場を示す町場の一画を示す歴史的地名で、鬼や子供に関する伝承名ではなく、古い地名がそのまま町名化したと思われる。
130	金納	かんの・きんのう	柳川市・由来は、筑後国三潴郡金納村に由来し、江戸時代には南金納村と一体だったが藩領分割後「金納村」になった。
131	棚町	たのまち	柳川市・由来は、矢部川流域の集落で、川沿いの条理地割（棚上の田地）に由来する地名。
132	セツ家	ななつや	柳川市・由来は、「七軒ほどの家が集まってできた集落」など、家の数に由来する地名とおもわれる。
133	新村	みむら	柳川市・由来は、一般的に「新しく出来た村や新しく成立した集落」を意味した地名と思われる。
134	上辺春	かみへばる	八女市・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると、「集落から見て上手側の縁にある原野」という地形由来に地名と思われる。
135	左手上	さんじゃき	八女市・由来ははっきりしませんが、「寺に向かって、左手上にある集落」という説がある。
136	日向神	ひゅうがかみ	八女市・由来は、天照大神の孫の瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）が御前崎岳を経てこの地に降り立ち「日向の国から神を迎えに来た場所」とされた事から「日向神」と呼ばれるようになったという。
137	上原々	うえはらばら	筑後市・由来ははっきりしませんが、古い小字名の誤記や略記、あるいは地元だけの呼び名と思われる。
138	常用	つねもち	筑後市・由来については不明。
	紅粉屋	べにや	大川市・由来は、江戸時代に柳河藩の御用商人であった後藤氏（屋号「紅粉屋」が開いた神殿に由来し、その屋号が地名となった。
140	天生田	おもうだ	行橋市・由来は、中世の荘園名「天生田庄」及びその後の村名「天生田村」に由来し、「天から授かった田」や「天が生み出した田」という意味合いを持つ地名と思われる。
141	長木	おさぎ	行橋市・由来は、古くは「長木村（長木村）」と呼ばれ、「長い木や長く伸びた木の多い土地」を意味する地形や植生に由来する地名と思われる。
142	御清水池	おしょうずいけ	行橋市・由来は、一般には「殿さまなどが用いた清らかな湧水」を意味し、城主や領主の御用水や名水として敬称の「御」を付けた地名から来たと思われる。
143	沓尾	くつお	行橋市・由来は、海岸近くの低湿地に「沓（くつ）のように湾入した地形を「沓」と呼んだ事から、「沓のような入り江（尾）」を意味する地形由来の地名と思われる。
145	新田原	しんでんばる にゅうたばる	行橋市・由来は、明治期以降にこの地が新しく開墾された田畑や原野であった事から「新しい田の原＝新田原」と呼ばれるようになったとされる地名。

146	神田町	しんでんまち	行橋市・由来ははっきりしませんが、神社に属する田（神田＝神社の祭事費用を賄う田）に由来すると思われる。
147	鋤迫	すきさこ	行橋市・由来は、山裾の小さな谷状地形「迫（さこ）に、農具の「（鋤すき）を当てた地名で、鋤で開いた谷あいの耕地や斜面を表したものである。
148	千仏	せんぶつ	行橋市・由来は、近くにある国指定天然記念物「千仏鍾乳洞（せんぶつしょうにゅうどう）」と、無数の仏を意味する仏教語「千仏」に由来すると思われる。鍾乳洞内の奇岩や石柱が多くの仏像に見立てられた事から、この名が付いたという。
149	高来	たかく	行橋市・由来は、古代の京都（みやこ）郡「高来郷」の名を受け継いだ地名とされ、周辺一帯の古い郷名や遺称と思われる。
150	辰上	たつがみ	行橋市・由来は、字義から推測すると「辰の方角（東南側）の上手」や「辰年や辰の日に関わる上手の地」などを連想した地名か。
151	津積	つつみ	行橋市・由来は、川や海の船着き場を意味する「津」と物資が集まることを示す「積」が合わさり、「荷物が集積する港や津のある場所」という意味を持つ地名と思われる。
52	津熊	つのくま	行橋市・由来は、中世荘園名「津隈庄（つのくましょう）」に由来し、川の船着き場を意味する「津」や、川の曲がりや入り江を指す「隈（熊）」を合わせた「川の入り組んだ津（港）」という地形由来の地名と思われる。
153	都留	つる	行橋市・由来は、古くは「津留」や「豆留」などと書かれた港」や水辺由来の地名が」転訛したと見られ、水運や海・川の「つくろ」（港）に関係する地名と思われる。
154	寺畔	てらなわて	行橋市・由来は、「寺の端（寺のほとりやてらのそば）」という意味から生じた地名」と考えられ、近くの寺院に由来する名称とみられる
155	中津熊	なかつくま	行橋市・由来ははっきりしませんが、「中津」は川の「中流域や谷の中ほどを指す意味があり、「熊」は山裾の窪地や谷間を洗わす古語の「隈や熊」に由来する地名が九州には多く見られる。
156 +	長狭	ながお	行橋市・由来は不明ですが、景行天皇が筑紫を巡行して周防灘沿岸の反対勢力を滅ぼしたのちに「豊前国長狭県」に来て行宮を建てたという記録がある。
157	入覚	にゅうがく	行橋市・由来は、旧「入覚村」に由来する地名で、平尾台南麓に囲まれた集落として、中世～近世に成立したと思われる。由来は不明
158	延永	のぶなが	行橋市・由来は、古代の大規模な名田「得永名（とくながみょう）」や中世の荘園「延永荘」に由来し、その中心地として発達した集落名が現在の地名となった。
159	真菰	まこも	行橋市・由来は、水辺に群生する稲科植物「真菰」が多く生えていた土地を指した事が由来と思われる。真菰は古くから食用や神事に利用され、水田や湿地の地名や姓の語源となっている。
160	門樋町	もんぴまち	行橋市・由来は、一般的に「水を通すための樋（とい）を備えた水

			門（門樋）に由来し、河川や用水路の水利施設があった場所を示す地名と思われる。
161	矢留	やどみ	行橋市・由来は、川沿いの低地で洪水時に流木や矢のような漂流物が「留まる」場所を意味する地形由来の地名と思われる。また、矢のようにまっすぐな堤や水路が集まり「留まる」場所とする解釈もある。
162	流末	りゅうまつ	行橋市・由来は、「水流や河川などの末端部分」を指す語です。
163	宇島	うのしま	豊前市・由来は、古くは「鵜島」と書かれ、海辺に多くいた水鳥の「鵜（う）」と、海に突き出した地形の「嶋」が合わさった「鵜の島」が語源とされ、それが「宇島」と表記されるようになった。
164	鬼木	おんのき	豊前市・由来は、古くは「オニギ」とも読み「芋（からむし）を煮る木」＝繊維植物の河口に関わる場所を表す地名が転じた可能性が高いと思われる。
165	皆毛	かいも	豊前市・由来は、古くは「上毛（こうげ）」郡と書いて「かみつけ」（かみげ）」と読んだ古代地名が変化した「上毛（こうげ）」に由来し、その一部の小字として「皆毛」の字が当てられたという。
166	求菩提	くぼて	豊前市・由来は、仏教語の「菩薩（さとり）を求める」という意味の語から生まれ、修験道の霊山・求菩提山とその門前集落を指す名称として定着したとされる。
167	松江	しょうえ	豊前市・由来は、松の多い海辺の入江状の地形を表す「松の生える江（入江）」に由来する地名とされ、これが地区名・駅名「豊前松江」に受け継がれたと思われる。
168	清水町	しょうず	豊前市・由来は、一般的には「清水」という地名は湧水や清らかな川に由来する地名が多く、アイヌ語起源地域では「明るく清らかな川」を意味する語として用いられる。
169	垣生	はぶ	中間市・由来は、古代の「埴生（はぶ）郷」に由来し、「埴（はに＝粘土質の土）」が多い土地を意味する地名が変化したものと思われる。
170	大板井	おいたい	小郡市・由来は、平安時代の「和名抄」に見える御原郡「板井郷」の名が後に拡大し・細分され「大板井」「小板井」として残った地名であり、「板井」という古い郷名に由来すると思われる。
171	ニタ	ふた	小郡市・由来は、一般的には「二つの田（にた）」＝二枚の水田や二つの田んぼがある土地を表す地形由来の地名と思われる。
172	愛獄山	おたけざん	筑紫野市・由来については不明。」
173	原田	はるだ	筑紫野市・由来は、「原（平らな広い土地）」と「田（田んぼ）」という地形語から生まれた地名で、平坦な原野に開かれた田を意味する地名と思われる。
174	山家	やまえ	筑紫野市・由来は、古くから山に囲まれた集落や宿場であったことから「山のふもとの家（集落）」を意味する名称が定着したものと思われる。江戸期には、長崎街道の宿場「山家宿」として広く知られる

			ようになった。
175	立明寺	りゅうみょうじ	筑紫野市・由来は不明です。
176	白水	しろうず	春日市・由来は、日照りでも枯れない清泉「白水の井」に由来し、「白く澄んだ湧き水のある場所」を意味すると思われる。
177	須玖	すぐ	春日市・由来は、古くからの集落名「須玖村」として中世以前から続く地名で、弥生時代の須玖遺跡や須玖岡本遺跡が連なる古い土地の地名とです。
178	牛頭	うしくび	大野城市・由来は、「牛が首を伸ばしたような形の長くて低い山」に由来するという説が有力。他に、朝鮮の牛頭山から来た渡来人の地名が転訛したという説もある。
179	乙金	おとがね	大野城市・由来は、戦国期にこの地で「乙」という名の武将が金を隠したという伝承から「乙金（おとがね）」と呼ばれるようになったという説が広く紹介されている。
180	雑餉隈	ざっしょうのくま	大野城市・由来は、太宰府に仕えた役人「雑掌（ざっしょう）」が住んだ場所、または人をもてなす酒食（雑餉（ざっしょう））を供した場所が、奥まった土地＝「隈」にあった事に由来する。
181	大穂	おおぶ	宗像市・由来は、「穂（ほ）＝稲穂や穀物の穂を意味し、豊かな実りの多い土地を表す語に「大」が付いた「大きな穂や豊穰の穂」を意味する地名と思われる。
182	上八	こうじょう	宗像市・由来は、もとは「上入」と書いて「カウジュ」と呼んでいたものを「上八」と誤って書かれるようになったという説があり、元々「不入の地」という意味から「上入」と書いていた。
183	神湊	こうのかみ	宗像市・由来は、宗像神社の外港として神に仕える港「神の湊」であった事に由来する。宗像大社と玄界灘を結ぶ信仰と海上交通の拠点として発達した地名。
184	許斐山	このみやま	宗像市・由来は、「許斐（このみ）」とは、中世に宗像大宮司家の一族がこの地に築いた「許斐館」や山城・許斐岳城と、その一族の姓「許斐氏」に由来する地名と思われる。
185	多禮	たれ	宗像市・由来は、中世文書に「太礼」や「多礼」などと記された古い村名「多礼村」に由来し、語源ははっきりしませんが諸説あり、古い氏族や祭礼・祈りに関わる言葉に由来すると思われる。
186	宗像	むなかた	宗像市・由来は、宗像三女神を祀った事に由来する説と、干潟や沼皿鉢の地形を表す古語に由来する説が代表的な由来。古くは「牟奈加多」や「宗形」「胸肩」などと書かれ、海人の一族や宗像氏と宗像大社の信仰と深く結びついて発達した地名。
187	通古賀	とうのこが	太宰府市・由来は、太宰府政庁に通じる古い道筋と、古い地名「古賀（こが）」が結び付いたものとされ、周辺の寺院や社の古道に由来する複数の説がある。
188	鹿部	ししぶ	古賀市・由来は、古くは「ししぶ」と表記され、鹿部山や鹿部田淵遺跡など一帯の地名として続いて来たが、確実な語源は不明。

189	米多比	ねたび	古賀市・由来は、古くは筑前国柏谷郡米多比村と呼ばれた地域名で古い郷名に由来すると思われる。漢字の「米」「多」「比」それぞれの意味から直接説明出来る確定説はなく、古語や古い地形名が当て字化されたものと思われる。
190	在自	あらじ	福津市・由来については不明ですが、「荒地・有自・在司・荒司とも書かれていた。
191	手光	てびか	福津市・由来は、観音様の手から出る光から付けられた地名。
192	奴山	にやま	福津市・由来は、「古代の「奴国（なこく）」との関連を指摘する説と、古墳群にちなむ古い小字名が残ったという説があるが、どちらも確定的な説ではない。
193	生家	ゆくえ おうけ	福津市・由来は、源義経の側室とされる「静御前」がこの地で義経の子を生み育てたという伝承から、「子を産んだ家＝生家」と呼ばれるようになったという説がある。
194	有弥の里	ゆみのさと	福津市・由来は、開発時や施設整備時に創作的に作られた地名。
195	鹿狩	かがり ろっかり	うきは市・古くは、「鹿を狩る場所」を意味する語に由来すると思われる。鹿の生息や狩猟と関わる地名とみるのが通説。
196	注連原	しめばる	うきは市・由来は、一般的には、「注連（しめ＝神絆を示す縄）」と「原（はら＝原野）」を合わせ、「神聖な境界や祭祀と関わる原野」を意味する地名と思われる。
197	千年	ちとせ	うきは市・由来は、古くは「千年続く」や「長く栄える」といった吉祥の意味を込め名付けられたと思われる。「千年」の由来は地域ごとに異なり、文献で明確に説明されていない。
198	美住	びじゅう	うきは市・由来については不明。
199	持木	もてぎ	うきは市・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると、「木を持つ・保つ」や、古くからの大木や社領林など、特別に保護された木があった場所と思われる。
200	金生	かのう	宮若市・由来は推測ですが、「金の産出」や「金色に見える地形や水、「吉祥語としての金が生まれる」など、一般的な語源が考えられる地名。
201	靡山	なびきやま	宮若市・由来ははっきりしませんが、漢字や周辺の山名から「なびく（風になびく）」という語感に由来すると思われる。
202	縁山畑	へりやまはた	宮若市・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると「山間野縁（へり）にある山畑」という地形由来の地名と思われる。
203	稲築斎田	いなつきさいた	嘉麻市・由来の「稲築」は神巧皇后が稲束を築いて雑穀多という伝承に由来し、「斎田」は神に捧げるために清められた田を意味する地名と思われる。
204	猪之鼻	いのはな	嘉麻市・由来は、一般的に「猪が多く出た山の鼻（突き出た尾根や岬状の地形）」に由来する地名と思われる。
205	漆生	うるしお	嘉麻市・由来は、古くは荘園名「漆生荘」に由来し、周辺で漆の木が多く産した土地を意味すると思われる。中世には「宇佐弥勒寺漆

			生荘」と記録され、現在の地名に継承されている。
206	鴨生	かもお	嘉麻市・由来は、一般に「鴨が多く生息する湿地や水辺の土地」などの自然環境を表す地名。
207	荷原	いないばる	朝倉市・由来は、「荷を負って通山道や峠筋に開けた原野（はる）」を意味する説が有力です。
208	烏集院	うすのいん	朝倉市・由来は、古くは「烏集院村」と書かれ、中世～近世にかけての荘園・院領に由来する地名と思われる。ただし、「烏が集まる院」という字義での地名の由来を示す史料は確認できない。
209	久喜宮	くぐみや	朝倉市・由来は、筑後川沿いの日田街道の宿場町と、その氏神（日吉神社）を中心に発達した集落に由来する。神社名「久喜宮」そのものの語源には諸説あるが、定説は確認できない。
210	古毛	こも	朝倉市・由来は、中世以来の古い集落名「古毛（こも）」が音変化したものとみられ、「古い・昔の」を表す「古」と、毛野（けの）系地名や山野を示す語が結び付いた古い地名要素と思われる。
211	寒水	そうず	朝倉市・由来は、生活用水として使われた清らかな湧き水「ソーリ（清い水）」に由来し、「寒」の字は後から当てられたと表記されている。
212	多々連	ただれ	朝倉市・由来は、「多々良（たたら）」と同源とみられ、鉄生産や川沿いの地形を表す語が転訛した地名と思われる。
213	杷木	はき	朝倉市・由来は、古代の駅家「杷木駅」や郷名「杷木郷」に遡る古い地名で、「はき」という古い地名表記（杷伎・杷木）が後に現在の漢字「杷木」として定着したと思われる。
214	麻底良山	までらやま	朝倉市・由来は、古くは「朝氏良（まてら）」と書き、天照大神（あまてらすおおみかみ）の名な略称に由来するとする説が有力で、山頂に天照大神一族を祀る式内社の麻底良布神社があった事と結びつけて説明されている
215	来春	らいは	朝倉市・由来は、一般に「来年の春」という意味の漢語表現で「来」は「これから来る時期」、「春」は四季の春を指す。
216	古僧都山	こそじやま	みやま市・由来は、山頂に築かれた女山神籠石の守護にあたった僧侶（僧都級の高僧）にちなみ「古い僧都の山」という意味で呼ばれるようになったと思われる。
217	瀬高町文廣	せたかちょう あやひろ	みやま市・由来については不明。
218	瀬高町山門	せたかちょう やまと	みやま市・由来は、古代からの郡名「山門郡（やまとぐん）」に由来し、瀬高町はその郡域に属した事から行政名として用いられた。
219	高田町濃施	たかだまちのせ	みやま市・由来は、中世以来の「東濃施村」「西濃施村」に由来する古い村名で、「濃い・豊かなものを施す（行き渡らせる）」という意味合いを持つ地名と思われる。
220	加布羅	かふら	糸島市・由来は、古くは「加夫良」「加布良」などと書かれた地名が転訛したもので、川沿いの低地（かぶるやかぶら＝水をかぶる土

			地)を指すとする説が有力。
221	芥屋大門	けやのおおと	糸島市・由来は、集落名「芥屋(けや)」と、洞窟を意味する「大門(おおと)」が合わさり、「芥屋集落にある大きな洞門(海食洞)」を指す呼び名になったという。
222	上鑑子	じょうかんす	糸島市・由来は、弥生時代後期の大規模集落である「上鑑子遺跡」に由来し、古くからの集落名や小字名がそのまま地名として残ったものと思われる。
223	銭瓶塚	ぜにがめづか	糸島市・由来は、古墳から銭を入れた土器(銭瓶)が多数出土した事から、その土器を埋めた塚として「銭瓶塚」と呼ばれるようになったと思われる。
224	高祖作出	たかすつくんで	糸島市・由来は、糸島市と福岡市の境にある高祖山と、その山に鎮座すると高祖神社に由来する地名で、山名や社名が周辺の郷や村・集落名として広がったものと思われる。
225	十坊山	とんぼやま	糸島市・由来は、奈良時代に「清賀上人が開いた久安寺の属坊が十坊あった事に由来するという説があるが、他にかつて十軒の山寺があったという伝承もある。
226	松末	ますえ	糸島市・由来は、「松の木が生い茂る山の末端(すそ)」を意味する地形由来の地名とされる説が有力で、古くからの集落名として伝わっている地名。
227	楠風台	みなかぜだい	糸島市・由来は、新しく付けられた地名で、「楠の木が風にそよぐ台地(高台)」という地形と植生をイメージして名付けられた地名
228	南面里	なめり	那珂川市・由来は、「村が高地にあり、南に面している土地」である事から名付けられたという。
229	頭巾山	とっきんやま	糟屋郡・由来は、山頂部の丸い稜線が僧侶や山伏の頭巾(頭にかぶる布)に似ている事から、その形状に由来して着いた地名。
230	篠栗	ささぐり	糟屋郡・由来は、竹の一種である「篠(ささ)」が多く生い茂る谷間や山麓の土地を指した事から、「篠の多い栗林」または「篠の茂る山麓」という意味の地名が成立したと思われる。
231	勢門	せと	糟屋郡・由来は、古くは「勢門郷(せとごう)」と呼ばれ、山間の谷口や川の狭まった場所＝「瀬戸(せと)」を意味する地形語に由来すると思われる。
232	萩尾	はぎのう	糟屋郡・由来は、萩の生える尾根状の地形(丘や尾根＝尾)を表す自然地名とされ、「萩の尾根(はぎのお)」が語源と思われる。
233	志免	しめ	糟屋郡・由来は、宇佐八幡宮の大祭の際に貼られた「しめ縄(注連縄)」を作った・張った場所(志免城戸)に由来し、この一帯を「しめ」と呼ぶようになったという説がある。
234	新生	あらお	糟屋郡・由来については不明、
235	上府・下府	かみのふ しものふ	糟屋郡・由来は、神宮浦や上府村・下府村などが明治22年に合併して出来た旧新宮村を構成した一村で、海岸近くの「下府」に対して内陸側・上手側の集落を「上府」という。

236	夜白	ゆうす	糟屋郡・由来は、古くは湿地や入り江状の低地を指す語に由来すると思われ、「夜白から三代にかけて湿泥地が入り込んでいた地形」を表した地名とされる。
237	駕与丁	かよいちょう	糟屋郡・由来は、古代の官人「駕輿丁（かよちょう）」に由来し、その人々に与えられた田地や集団（駕輿丁坐）があった事から生まれた地名と思われる。
238	酒殿	さかど	糟屋郡・由来は、古くからの朝廷や神社に供えられる酒を造り納めた「御酒殿（みきどの）」という施設があった事に由来する。安楽寺（東大寺）の荘園「酒殿荘」として酒造や年貢米の集積地となり、その名が村名や地名として定着した。
239	柚須	ゆす	糟屋郡・由来は、中世に見られる「油須（ゆす）村」が転訛した地名とされ、「油（あぶら）を参した土地」を意味する古い地名が、後に現在の「柚須」の字に改められたと思われる。
240	遠賀	おんが	遠賀郡・由来は、古代に「岡（おか）」と書かれた「岡県・岡水門」などの地名があり、その「岡」が時代と共に「遠賀（おんが）」と表記・読まれるようになったとする説が有力です。遠賀川や遠賀郡・遠賀町などの名称も、この古い「岡」系の地名と河口周辺の地形に由来すると思われる。
241	杣	えぶり・いり	遠賀郡・由来は、「水を堰き止めたり流れを制御するための木製の堰や樋門（といもん）などの施設や、その出入口（入り口）に由来する地名と思われる。
242	内浦	うつら	遠賀郡・由来は、山間の谷筋から海へと続く「内側の浦（入り江）」を意味する地形由来の地名と思われ、町内の大字名や河川名（内浦谷川）にも残る古い地名。
243	虫生津	むしょうづ	遠賀郡・由来は、古くは「玉虫津」と呼ばれた地名が転訛したもので、神巧皇后がこの地で宝玉を磨かせた伝承や泥海だった頃に夜光の玉が見つかったという伝説に由来する。
244	南良津	ならづ	鞍手郡・由来は、古い村名の「南良津村」に由来するが、字義から推測するに「川の南側にある良い津（船着き場）」といった意味をもつ地名と思われる。
245	新北	にぎた	鞍手郡・由来は、中世文書に見える村名「新北村（にぎたむら）」を受け継いだ歴史的地名であり、「新しい北側の土地」という意味合いを持つと思われる。
246	新延	にのぶ	新延郡・由来は、「新しい開発地が山麓から平地に延びた」や「既存の「延」地名を新しい区画」などを示す開発由来の地名と思われる
247	桂川	けいせん	嘉穂郡・由来は、町の中央を流れた川がかつて「桂川」と呼ばれていた事に由来する。この川の名を明治22年の町村合併時に新しい村名として採用されたもの。
248	寿命	じゅめい	嘉穂郡・由来は、昔、偉いお坊さんが色々あった後にこの地で「ああ、寿命が延びた」と喜んだのが由来という言い伝えがある。

249	土師	はじ・はぜ	嘉穂郡・由来は、古代の土器や埴輪づくりに従事した土師氏（はじうじ）という氏族、あるいはその職能集団が住み着いたことに由来すると思われる。特にこの地域の土師などは、出雲地方から来住した土師氏にちなむという。
250	四三嶋	しそじま	朝倉郡・由来は、古くは「三嶋（みしま）」と呼ばれた地に「四三」という字を当てられた難読地名で、数字は地形や条里・区画などに由来すると思われる。
251	高上	たこえ	朝倉郡・由来は、「高い場所や高台の上にある土地」という地形的特徴を表す「高」と「上」が結び付いたものが語源と考えられ、高台状の地形に由来する地名。
252	甲条	こうちょう	三井郡・由来は、中世にこの地に築かれた甲条城の名にちなみ、その城名が村名や字名として受け継がれた。
253	高樋	たかえ	三井郡・由来は、もとは「タカフ」と呼ばれ、「樋」の草書体が「高え」と読めると斉明天皇が行ったという伝承から現在の読みと表記となった地名という。
254	守部	もるべ	三井郡・由来は、中世の荘園「守部庄（もりべのしょう）」及びその中心集落「守部村」に由来し、荘園領主や在地武士の支配地名がそのまま近世以降の村名または大字名として継承されたと思われる。
255	大莞	おおい・おおげ	三瀬郡・由来は、イグサ（藺草）を示す語に由来し、かつて一帯がイグサ栽培の盛んな湿地帯だったことを示す地名です。
256	小椎尾	こじお	八女郡・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると「小さな椎（シイ）の木のある尾根（山の端）」を意味する地形や植生由来の地名と思われる。
257	岩原	いわら	田川郡・由来は、一般的には「岩の多い土地の原野」を意味する地形由来の地名と思われる。
258	大内原	おおてばる	田川郡・由来は、一般的には「大きな屋敷や内側の土地」を意味する「大内」と、平坦な土地を指す「原」が合わさり、「大きな屋敷のある原野」や「大きな集落の広い原」を指す地名と思われる。
259	香春	かわら	田川郡・由来は、もともと「川原」を意味する古い地名が変化し、万葉集や豊前国風土記に見える「加波流」「鹿春」などの表記を経て現在の「香春」の字が当てられたという。
260	金辺峠	きべとうげ	田川郡・由来は、「金」や周辺の採銅所や金辺川などの地名から、古くは金属資源【銅など】に関わる山間の境界峠を示す地名と思われるが確定的な語源は不明。
261	花古屋	けごや	田川郡・由来ははっきりしませんが、字義から推測し「景観や古い家並みに由来する地名と思われる。
262	紫竹原	しつくばる	田川郡・由来は、「紫竹」という竹の名と「原」が合わさった地名で、紫色を帯びた竹が生えていた原野を指す地名と思われる。
263	仲哀峠	ちゅうあいとうげ	田川郡・由来は、日本書紀などに登場する仲哀天皇が熊襲征伐の際にこの峠を通過したという伝承に由来される地名。

264	長光	ながみつ	田川郡・この地に由来する「長光」の姓などと結びつきつつ、古くは「長く伸びた土地形状」や「長門（ながと）由来の移住者名」に関係する地名と思われる。
265	豊産	ほうさん	田川郡・由来は、古代の律令国名「豊前国（とよのくに）」に由来し「豊かな土地」や「実り多い国」を意味する「豊」と、「山口側の「長門国」との対比で付けられたという地名。
266	勾金	まがりかね	田川郡・由来は、古代に銅（あかがね＝金属）を産した地域で、宇佐神宮領荘園「勾金庄」に由来し、「曲がった谷や川筋」などの地形と銅（あかがね）を意味する語が結び付いた地名と思われる。
267	湯無田	ゆむた	田川郡・由来は、一般に「湯（温泉や湧き水）」と「牟田（湿地や沼地・田に適した低地）」が結び付いた「湯の湧く湿地や田」のような意味を持つ地名と解釈される。
268	伊原	いばる	田川郡・由来は、古くは「いはら」と読まれ、添田村の西側山麓に広がる集落を指す地名で、岩場の多い地形（岩原）に由来する説が有力とされる。
268	大藪	おおぶち	田川郡・由来は、一帯に広がっていた大粉ヤブ（雑木林や藪地）を指す地形語から生まれた地名と思われる。
269	大瀬子	おぜこ	田川郡・由来については不明。
270	岳滅鬼山	がくめきやま	田川郡・由来は、「岳（山）に棲む鬼を滅ぼした」という伝承に由来するとされ、修験道の英彦山信仰と結びついた「鬼退治」のイメージを反映した名称と解釈されることが多い。
271	上仏来山	かんぶくざん	田川郡・由来は、仏教的な霊山としての性格（修験道の山や山城跡）から「仏が来る山」「仏の来臨を仰ぐ山」といった信仰に由来する名称と思われる。
272	久木	くぎ	田川郡・由来は、「久しく生えた木の多い野」や「柊（ヒイラギ）などの特定の木が繁茂した野」を意味する地名と思われる。
273	見地	けんじ	田川郡・由来は、山の斜面などから周囲を「見渡す場所」や見晴らしの良い土地」という意味から生まれたと思われ、地形的な特徴を表す地名と思われる。
274	駒啼	こまねき	田川郡・由来は、一般的には「駒＝馬」と「啼（鳴く）」を合わせ、「馬がいなき鳴いた場所」など馬に関する地形や伝承に由来する地名と思われる。
275	猿掛	さるかき	田川郡・由来ははっきりしませんが、字義から推測するに「猿が掛ける（ぶら下がる）崖や岩」などの地形や、猿に関する伝承に由来する可能性がある地名。
276	神田	じんて	田川郡・由来は、一般に神社に属する田んぼ＝神田（神の田）に由来すると思われ、伊勢神宮などに奉納する稲を作った御神田（みとしろ）から転じたという説が有力です。
277	中元寺	ちゅうがんじ	田川郡・由来は、諏訪神社の移転に伴って行われた「中元神事（中元のみに祭礼）」に由来し、その祭礼を行った場所を指す地名です。

278	道角	どうかく	田川郡・由来は、県道沿いの交差点名や「角」「四ツ角」などの通称に使われる一般名詞としての「角」が、道が交わる「かど」「分岐点」を意味する事に由来すると思われる。
279	英彦山	ひこさん	田川郡・由来は、伊勢神宮の御子神・天忍穗耳命を祀る「日の子の山＝日子山（ひこさん）」が起源で、江戸時代に霊元法皇から「英」の字を賜り「英彦山」と改められたという。
280	烏尾峠	からすおとうげ	田川郡・由来は、神武天皇一行が一羽の烏に導かれ悪天候の中でも無事に峠を越えられたという伝承に由来し、「烏（鳥）の尾にちなむ地名」とされている。この時に、道案内をした烏を足が3本の「八咫の烏（ヤタのカラス）」と言われている。
281	貴船	きふね	田川郡・由来は、多くの場合その地にある（またはあった）貴船神社の社名に由来し、その神社名は水神を祀る「貴い船（黄船）」の伝承や、水の神を祀る信仰に結びついている。
282	真岡	しんおか	田川郡・由来は、地名学上は、「真岡」本来「舞丘」（まいおか）が「もうか」となり、後に「真岡」と表記されるようになったとする説が有力です。「舞丘」説とは、「鶴が舞い降りた丘」という説がある。
283	鼠ヶ池	ねずがいけ	田川郡・由来は、近世に成立した村名「鼠ヶ池村」に湯対するが、名称の語源（鼠や池のどちらにちなむかなど）については、明確な説が示されていない。
284	稗田	ひえだ	田川郡・由来は、稗（ひえ）を作った田や畑に由来する生産地名で、「稗を作る田（畑）」が稗田になったと思われる。
285	七十石	ひちじっこく	田川郡・由来は、古代の行政区画である「筑前国」の別名で、「七十余りの小さなクニ（豪族の支配地）が統合された国」という意味から生まれた呼称と思われる。
286	水落谷	みぞうてだに	田川郡・由来は、谷筋に水が落ち集まる低湿地や水の多い谷地形を表す「水落」と「谷」が組み合わさった自然由来の地名。
287	宮床	みやとこ	田川郡・由来は、一般的には「宮（神社や社殿）」と「床（社殿のある場所や平坦地）」を合わせ、「神社の建つ場所」や「社殿のある平地」を意味する地名と思われる。
288	宮山	みやま	田川郡・由来は、近世に布田村へ移された「八王社（現在の宮山神社）」を中心とする「神社のある山（宮のある山）」に由来する地名とみなされるのが有力な説です。
289	安宅	あたか	田川郡・由来は、急斜面の山裾に張り付くような集落立地から「崖や険しい所」を意味する古語に由来する地名と思われる。また、多くの崖地や海食崖など急峻な地形と結びついている地名。
290	安真木	あまぎ	田川郡・由来は推測ですが、字義から「穏やかな森や木の多い場所」と云うようなイメージの地名と思われる。
290	猪尻	いじり	田川郡・由来は、一般的には「猪（いのしし）の多い場所」＋「尻（端や突き出た所）」という地形や動物名に由来する地名

291	大海	おおみ	田川郡・由来は、一般的には「大きな海」や「広い海」を意味する語から生じた地名と思われる。ただし福岡県の「大海」については古い港名や入り江名など、具体的な由来があると思われる。
292	上原	かんばる	田川郡・油袋は、一般的に歯「低地より一段高い場所に広がる原（はら＝平坦地）」を意味する地形由来の地名と思われる。
293	小倉ノ畔	こぐらのて	田川郡・由来は、紫川西岸の小高い丘（小さな倉＝クラ状の台地）に築かれた城と城下町に由来する地名で、そこにある畔（あぜ）という地名。
294	飛渡瀬	とびわたりせ	田川郡・由来は、昔この地峡は小さな瀬戸で、江田島と能美島とは別の島でしたが、潮流で土砂が堆積したため村民が海底をさらったがそのごも土砂の堆積が進み、両島間は飛石設けて往来することになった事から、「飛渡瀬」と呼ばれるようになった。
295	筒丸	どうまる	田川郡・由来などの地名起源は不明ですが、同地に多い「筒丸性」や「～丸」という九州特有の地名語尾との関連が推測される。
296	八熊	やくま	田川郡・由来は、古からの小字名で、近くの「八熊遺跡や八熊製鉄遺跡」にちなみ、製鉄関連の集落や地名よして中世以前から続くと思われる。一般的な語源として「八」は数の多さや神聖さ、「熊」は山や森・神格を表す語として地形と信仰を結び付けた地名。の神
297	安高	あだか	田川郡・由来は、定説はありませんが、宗像郡に中世から近世にかけて存在した「安高（あだか）」という地名や在地領主名に由来する可能性があると思われる。
298	今任原	いまとうばる	田川郡・由来は、中世以来の荘園名「今任（いまとう）」と原野を意味する「原」が結び付いた地名で、上今任村とした今任村など旧村名を卑屈井田地名と思われる。
299	大任	おおとう	田川郡・由来は、古い地名「鷹羽（たかば/田川）」の「鷹」の雄姿を「大」の字に見立てて図案化した町章の趣旨と、上田川地域の中心としての役割を担う「大きな任（にん）＝大任」を意味する説がある。
300	小林	おばやし	田川郡・由来は、「小さな林（こばやし）」という地形をそのまま表した地名と考えられ、周辺に小規模な林が点在した土地を指した自然地名と思われる。
301	幸神町	こうしんまち	田川郡・由来は、「幸神（さいのかみ）」という道祖神や賽の神信仰（旅の安全や村境を守る神）に由来すると思われ、近くの「幸の神の湧水」などの地名とも結び付いている。
302	根床	ねどこ	田川郡・由来ははっきりしませんが、現状では「山の根元の平坦地」や「崩れやすい斜面の根元」など地形に由来する語感から推測にとどまり確証はない。
303	犢牛岳	こっといだけ	田川郡・由来は、山麓の集落名「特牛（とっこい）」に由来し、この特牛は牛の子（子牛）を意味する古い言い方（犢（とっこい）に通じるとされる。牛に関わる地形や牧畜伝承から付いた地名。

304	油須原	ゆすばる	田川郡・由来は、「根メリカのある土地が広がる原野と思われる。
305	上野	あがの	田川郡・由来は、多くが川や山や台地の（上手（かみて））を意味する「上の原野」に由来するとされ、特定地区では古代の語名や自社名と結びついて成立したと思われる。
306	伊方	いかた・イガタ	田川郡・由来は、中世の荘園名「伊方庄」に由来し、その名残として近世以降も上伊方や下伊方などの地名が続いたと思われる。
307	市津	いっち	田川郡・由来は、中世にこの地を本拠地とした在地武士「市津氏」に由来し、その氏名と同じ呼び名が地名として定着した。
308	飯土井	いどい	田川郡・由来は、昔、天照大神のお告げにより神社の東北に掘った井戸から湧いた清水と、その周辺の土が赤飯の様な色であったことから「飯土井」と呼ぶようになったという伝承が由来という。
309	入分	いりぶ・いるべ	田川郡・由来は、中世の荘園名「入分庄（いりぶしょう）」に由来し、国司や荘官など支配者がその支配地に「入り部（いりぶ）」＝赴任・入部する事に関する語から生じた地名と思われる。
310	久六	きゅうろく	田川郡・由来は、開拓者の「久六」という人物に由来すると思われる。他の地域においても同様の地名の由来が存在する。
311	神崎	こうざき	田川郡・由来は、神社や神への信仰と関わる「神の岬や神の先（みさき）」を語源とする説が有力で、「神が鎮まる岬や突き出た地形」に由来する信仰地名とも考えられている説もある。
312	新門	しんかど	田川郡・由来は、「門（かど）」は九州の門割制度に由来し、一戸や屋敷を表す。「新門」とは新しく興した屋敷にちなむ地名・苗字。
313	鋤水田	すいきだ	田川郡・由来は確定できませんが、「鋤で開いた水田や開墾地を意味する語構成からの推定に留まる地名。
314	常福	つねふく	田川郡・由来ははっきりしませんが、字義から推測するに「常に福がある土地」や「絶えざる幸福がある土地」といった吉祥語と思われる。また、地域内に「常福寺」という名称の寺院があり、曲的な地域名とした使われたとも考えられる。
315	中古門	なかふるもん	田川郡・由来は、中世の地名「古物（ふるもの）が転訛し、さらに「古門（ふるもん）」など経て現在の「中古門」と表記されるようになったと思われる。「古物」はこの地域一帯を指す荘園名で、現在の「古門」がその遺称地とされる。
316	野地原	のじはら	田川郡・由来ははっきりしませんが、一般的には「野＝野原や耕地」「地＝土地」原＝平坦な原野」を表し、「野地原」は「開けた土地に」広がる原」を意味する自然地形由来の地名と思われる。
317	日王山	ひのうざん	田川郡・由来は、かつて山中に鎮座していた日王神社に由来し、太陽（天照系）信仰と結びついた社名が山名となったものと思われる
318	平和台	ひらわだい	田川郡・由来は、福岡城跡地の高台を指し、その地名は「兵どもの夢の跡をスポーツによる平和の台にする」という発想から、戦後の国体時に名付けられた地名。
319	弁城	べんじょう	田川郡・由来は、平清盛の子の重衡がこの地に築いたと伝わる「弁

			天城（べんてんじょう）」に由来し、城と共に祀られた守護神の弁財天の名から「弁城」となったという。
320	崖ノ下	ほきのはな	田川郡・由来は、一般に「崖の下に位置する集落や土地」という、地形そのものを表した忌日的地名で、特定の人物や事件に由来するものではない。
321	南木	みなぎ	田川郡・由来は、「南向きの斜面や南側の土地」うを意味する地名。
322	見六	みろく	田川郡・由来は、はっきりしませんが、「仏教語」の弥勒（みろく）に由来する説や、条里制や区画名からの転訛などの説がある。
323	京都	みやこ	京都郡・由来は、古くは「この地に天皇が一時滞在したため「みやこ（都）」と呼ばれ、それが「京都（みやこ）郡」という地名になったという伝承がある。
324	小波瀬	おばせ	京都郡・由来は、小波瀬川流域の集落を指す古い地名。
325	苅田	かんだ	京都郡・由来は、古くは「刈り取った田」や「開墾した田」を意味する語に由来するとされ、奈良時代の「和名抄」に「豊前国京都郡苅田郷」と見える古い地名。他に、「坂上苅田麻呂」との関係伝える説もある。
326	堤	ひさげ	京都郡・由来は、かつてこの地に築かれた大きな堤防（ため池の堤）があった事に由来する地名です。
327	皆見	あざみ	京都郡・由来は、近くを流れる祓川が浅い川で、「浅見川」と呼ばれた事から「朝見」さらに転じて「皆見」と表記されるようになったという説が代表的です。他に「アザ(崖)+ミ(辺)で「崖崩れの地」を意味するという地形由来の説もある。
328	鐙畑	あぶみはた	京都郡・由来は、馬具の鐙（あぶみ）」と農耕地の「畑」を合わせた地名で、山間の農村で馬の利用や地形に由来する地名とする説が有力です。
329	犀川	さいかわ	京都郡・由来は、地域内を流れる犀川の川名に由来し、その川名は古くからの呼称であるものの、具体的な命名理由は明確ではない。
330	末江	すえ	京都郡・由来は、古くは「末江村」と称された地域で、川の下流や末端部に位置する事から「川の末の入り江（江）」を意味する地形由来の地名と思われる。
331	長川	ながわ	京都郡・由来は、一般的に「長く流れる川」や「流路の長い川」など、川の形状や規模を表す説明的地名と思われる。
332	幸子	こいじ	築上郡・由来は、古くは「こうじ」と読まれ。山国川左岸の平坦地に位置する集落名として、中世以来の小字・村名がまとまって成立したもので、特定の人物名（幸子）に由来するものではない。
333	楡生	にりょう	築上郡・由来は、「楡（にれ）の木が多く生えていた土地に由来する地名と思われる。
334	別府	びょう	築上郡・由来は、多くの温泉や湧水が「別（わか）れ出るや分かれ湧く」場所を意味し、「別府＝別の湯の湧く所」や「湯の出る浜（辺の府）などと解釈されるのが一般的な由来。

335	安雲	あくも	築上郡・由来は、鎌倉時代にはすでに見える古い地名で、当地発生の姓「安雲（あくも）」の由来にもなっている。
336	上毛	こうげ	築上郡・由来は、古代の郡名「上毛郡（こうげぐん）」に由来し、さらにさかのぼると豊前国の「上三毛郡（かみみけぐん）」に由来する歴史的な地名です。。
337	尻高	しだか	築上郡・由来は、「地形が次第に高くなっている土地の様子から名付けられた」とする説が有力です。「尻（端・下手）」＋「高（高くなる）」という地形由来の地名と思われる。
338	唐原	とうばる	築上郡・由来は、村内にあった「唐原塚」と呼ばれる塚（古い墓や塚状地形）に由来して地名となったと思われる。なお、「唐」の字を中国由来とみる説もある。
339	櫟原	いちぎばる	築上郡・由来は、クヌギ（櫟）の木が多く生えていた「原野」を意味する地名と思われ、「櫟＝クヌギ」と「原＝原野」という一般的な地名語から成ると解釈できる。
340	越路	こいじ	築上郡・由来は、中世文書に「築城郡越地村」と見える古い村名が近世以降「越路」と表記されるようになったもので、「越（こす）」「路（みち）」から「峠や坂を超える道筋」を意味したと思われる
341	寒田	さわた	築上郡・由来は、「寒い田」ではなく古い読みは「さむた」が転じた地名で、豊前の豪族・城井氏の本拠地周辺の谷地を指す、歴史的地名と思われる。
342	築城	ついき	築上郡・由来は、古代の郡名「築城郡（ついきぐん）」や中世の荘園名「築城庄」に由来し、「城を築いた土地」＝防御拠点としての城郭形成にちなむ地名と思われる。



太宰府天満宮

佐賀県



NO	地 名	読み方	由 来
1	飯盛	いさがい	佐賀市・由来は、「飯を盛ったような形の山（丘）」に由来する地形と思われ、伊万里市川内の飯盛集落で、周囲の小丘陵の姿にちなむ地名とされる。
2	海路端	うちばた	佐賀市・由来は、古い道筋の形状や周辺の地形や土地利用や信仰対象（道祖神など）に由来すると思われる。具体的には、「中折」や「快樂」「道祖元町」などがあり、行き止まりの道や曲がりくねった道、な

			ど道祖神信仰と深く結びついている。
3	合瀬	おおせ	佐賀市・由来は、嘉瀬川流域で川筋が合流する「瀬（浅瀬）」の地形に由来する地名と思われ、その地名から「合瀬」の姓も生まれたという。江戸期の村絵図にも「合瀬村」が見え、古くから川と集落の位置関係を示す名称として使われていた。
4	大財	おおたから	佐賀市・由来は、佐賀藩の城下町外延部に形成された町場で、豊かな商業や物流で「大きな財（たから）」を産む地域だったことから、その繁栄を表す地名とされる説が有力です。
5	咄分	おとなぶん	佐賀市・由来は、決まった定説はないが、戦国期以来「咄（おとな）」と呼ばれた代官の上役を意味する語と、年貢の割り当てる「分（ぶん）」が結び付いた「役人支配の割当地」を示す地名と解釈される説が有力です。
6	金立	きんりゅう	佐賀市・由来は、金立山に鎮座する金立神社とその丸李神である秦の徐福伝説に由来するとされ、古くは徐福が上陸し「金立山」に拠点を築いたことから山名や地名が生まれたと伝えられたという。
7	神野	こうの	佐賀市・由来は、佐賀藩10代藩主の鍋島直正の別邸「神野のお茶屋」とその庭園（現在の神野公園）に由来し、この周辺一帯が地名として定着したものと思われる。
8	巨勢町	こせまち	佐賀市・由来は、古代の郷名「巨勢郷（こせごう）」に由来し、古代豪族巨勢氏（紀氏系）にちなむ地名がそのまま現在の町名として残った
9	道祖元町	さやのもとまち	佐賀市・長崎街道沿いの「道祖神のある場所（道の神の社）の元（起点）」にあった町筋であることから、「道祖元」と呼ばれるようになったと思われる。江戸期には、城下西端の宿場や町場として栄えた地域。
10	三本櫨	さんぼんがしわ	佐賀市・由来は、「三本の櫨（かしわ）の木があった場所」由来すると思われ、「櫨」はブナ科のカシワの古い表記で、三本の樹木を目印とした地名と思われる。
11	鰯江	しくつえ	佐賀市・由来は、有明海沿岸の入江（江）に鰯（ボラ）が多く集まる浅瀬や潟を指した地形名が地名化したものと思われる。
12	修理田	しゅりた	佐賀市・由来は、中世荘園管理に関する役職名「修理職（しゅりしょく）」と水田を意味する「田」が結び付き、「修理職に関係する田」＝修理田となったという。
13	精町	しらげまち	佐賀市・由来は、米の精（白米）を扱う商人や精米業が集まった町筋であったことから、その職能に由来して「精町」と呼ばれるようになったと思われる。
14	芭木	ちゃのき	佐賀市・由来は、古いクスノキの大木を倒したところ、その木が川を越えて東へ渡るほどであったことから「いかしめくおごそかな木＝厳木」と呼ばれたという伝承に由来する。
15	道免	どうめ	佐賀市・中世の年貢を免除された田地（免田）に由来し、「道沿いの免田」＝道に接した年貢免除地を意味する地名と思われる。現在でも東免田・西免田などの小字名として残り、九州に多い地名の一つ。

16	尼寺	にいじ	佐賀市・由来は、古代の国分尼寺（こくぶんにじ）に由来する地名で、国分尼寺跡周辺の集落として残った地名。
17	八反原	はったばる	佐賀市・由来は、一説に「八反分の広さの原野（畑地）を意味する地名と思われる。
18	八戸	やえ	佐賀市・由来は、中世以来の村名「八戸村」に由来し、この村名から戦国期の在地領主・八戸氏の姓も生まれたという。ただし「八戸」という語そのものの成り立ち「八つの戸」など）については、確定した説はなく諸説がある。
19	杠	ゆずりは	佐賀市・由来は、肥後国神埼郡の杠山に由来し、地元に多かった杠一族と、横木・旗竿などを意味する「杠」という字義が結び付いて成立した地名と思われる。
20	与賀町	よかまち	佐賀市・由来は、中世の荘園「与賀荘」とその中心にあった与賀神社と与賀城に由来し、「与賀荘の町場として発展した区域を指す行政地名として明治14年に成立した名称」とされる。
21	米納津	よのづ	佐賀市・由来は、有明海沿岸の港町として発達した集落で、「米」などの物資を「納める」港＝船着き場（津）という機能を反映した地名と考えられる。
22	厘外	りんげ	佐賀市・由来は、江戸時代に佐賀城下の城下町外縁部に位置した港町「厘外津（りんがつ）」に由来し、城下の境界＝外側を意味する呼称が地名として残ったものと思われる。
23	上ヶ倉	あげくら	唐津市・由来ははっきりしませんが、字義で推測すると「下手側に集落に対して、上手側に位置する倉のある場所」と思われる地名。
24	簀木	うつぼぎ	唐津市・由来は、竹かご状の武具「鞆（うつぼ）」を表す漢字「簀（うつぼ）」と「木」が結び付いた地名です。
25	枝去木	えざるき	唐津市・由来については不明です。
26	相賀	おうか	唐津市・由来は、古くは杵島郡の村名で、川沿いの低地に開けた集落を指し、「お互いに入り組んだ入り江や入江の多い場所」を意味する語に由来すると思われる。
27	水主町	かこまち	唐津市・由来は、唐津藩の御用水夫（船乗り）である「水主（かこ）衆」が集住した町であった事に由来する地名とされる。港町や城下町に共通する典型的な「水主町」の由来です。
28	神集島	かしまじま	唐津市・由来は、神巧皇后が三韓征伐の際に八百万の神々をこの島に集めて戦勝と航海安全を祈願したという伝承に由来するとされ、「神集島」の永生まれたという。
29	厳木町	きゅうらぎまち	唐津市・由来は、古くは「きゅうらぎ」と読まれ、中世以来の郷村名に由来し、その語源については「険しい木立の多い地形」や「古い大木（楠）の伝承」に結びつけるなど諸説があるという。
30	切木	きりご	唐津市・由来は、語源は不明ですが、中世以降の集落で川と谷に囲まれた山間の子村として記録される。
31	納所	のうさ	唐津市・由来は、国府に納めた米や貢物を収納した倉庫（納所＝納め

			る所) が置かれていた場所に由来する地名。
3 2	半田	はだ	唐津市・由来は、中世に「坂田(さかた)」と呼ばれた地名が時代と共に「はんだ」と読まれるようになり、後に「半田」の字が当てられたとする説が有力です。
3 3	原	はる	唐津市・由来は、多くの場合「平らで開けた土地や原野」を意味し、古くは山裾の台地や河岸段丘の平坦地を指した事が由来と思われる。
3 4	ニタ子	ふたご	唐津市・由来は、戦国末期にこの地で双子が生まれたという伝承と、また沖合に二つに並んだ岩礁がある地形に由来する説もある。
3 5	万賀里川	まがりかわ	唐津市・由来は、川が大きく曲がりくねる地形から「曲がり川」から「万賀里川」と表記が変化したとみられる地名です。
3 6	馬渡島	まだらしま	唐津市・由来は、「大陸から最初に馬が渡ってきた島」すなわち「馬が渡る島」に由来する説がある。古くは「斑島(まだらしま)」と書かれ、馬渡氏の土着伝説に基づき「馬渡島」と改められたとする系図伝承もある。
3 7	見借	みるかし	唐津市・由来は、古くは「見留加志庄(みるかししょう)」などと書かれ、「肥前国風土記」の賀周里や「延期式」の賀周駅に否定される古い交通の要地に由来する地名であり、往来を見張り・見届ける場所を意味した地名と思われる。
3 8	神辺町	こうのまえ	鳥栖市・由来には諸説あり、古くは「神辺村と呼ばれた地域で、肥前国基肄郡の「神辺庄」などに由来し、「神に関わる土地(神戸・神奈備)」と川のほとりの地形的特徴が重なって成立した地名と思われる。
3 9	幸津町	さいつまち	鳥栖市・由来は、中世文書に見える荘園名「幸津庄・幸津新庄」に由来し、「鎌倉時代にはすでに成立していた古い地名であり、朝日山東麓の段丘上に開けた荘園・村落を指す地名がそのまま現在の地名となったと思われる。
4 0	本鳥栖町	ほんとすまち	鳥栖市・由来は、奈良時代の「肥前風土記」に見える「鳥栖(鳥のすみか)」の中心地とされ、古くは鳥を飼いならした「鳥屋」があった事に由来する地名と思われる。
4 1	筋原	あざみばる	多久市・由来は、「筋(あざみやいばら)」などトゲのある低木やつる草が多く生えた原野を意味する地名と思われる。
4 2	納所	のうそ	多久市・由来は、国府に納めた米や貢物を収納した倉庫(納所=納める所)が置かれている場所に由来する地名。
4 3	笠椎	かさじ	伊万里市・由来は、江戸時に「笠士居(かさしい)」と呼ばれた武士集団の居住地名が転じたものとされ、地形や植物名ではなく人の呼称に由来する珍しい地名例と思われる。
4 4	堤川	さげのかわ	伊万里市・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると「堤(つつみ)=川の堤防や土手に由来する一般名詞から付いた地名。
4 5	水留	つづみ	伊万里市・由来は、洪水がたびたび起こり水が溜まりやすい低地であった事から、「水が留まる土地」という意味で名付けられた地名。
4 6	八谷搦	はちやがらみ	伊万里市・由来は、江戸時代に干拓事業を指揮した八谷喜兵衛の名と

			干拓堤防を意味する「搦（からみ）」に由来する地名という。
47	古川	ふるこ	伊万里市・由来は、かつての川筋（旧河道）の跡にできた集落や土地である事から名付けられたと思われる。多くの場合、近くを流れる川が流路を変え、その「古い川」の跡を指して「古川」と呼ぶ例が各地で多く見られる。
48	馬刀潟	まてがた	伊万里市・由来は、二枚貝の「マテガイ（馬刀貝）」が多く生息した潟地形に由来する地名と思われ、干潟や浅い入江だった土地の自然環境を反映した「名称」と思われる。
49	鳥海	とのみ	武雄市・由来は、「鳥が集まる海や入り江」を意味する古い地名に由来すると思われ、海や水辺に面した土地で鳥の多い場所を指した地名が転じたものとされる。
50	道免	どうめ	小城市・由来は、中世の年貢を免除された田地（免田（めんでん））に由来し、「道沿いの免田」＝道に接した年貢免除地を意味する地名。
51	真崎	まさき	嬉野市・由来は、鹿島川河口近くの干拓地が海に向かって袋状に突き出した「岬（さき）」状の地形であった事から「マサキ/マサキの岬」と呼ばれたのが転訛した地名と思われる。
52	的	いくわ	神崎市・由来は、古くは「勅使田（ちよくしてん）」が置かれた神崎荘の一画で、朝廷ゆかりの田地に由来する地名とされる説が有力です。
53	脊振町	せふりまち	神崎市・由来は、町の北橋にそびえる背振山の名に由来し、「背骨のように連なる山並み（山の脊）」を表す山名から転じたものとされる。背振山名の細かな由来には、龍馬が背びれを振ったという伝承など複数の説があり、どれもこの山を中心とした地形や信仰に根差している。
54	本告牟田	もとおりむた	神崎市・本由来は、「本告」が「本居＝元の集落」で「牟田」が湿地や沼地を意味し、「古くからある集落の前の湿地（田）」を指す地名。
55	駅ヶ里	やきがり	神崎市・由来については不明。
56	鹿路	ろくろ	神崎市・由来は、鹿の通い道や足跡が多かった事、または銅（あかがね）などの鉱産資源に由来する地名と思われる。
57	石動	いしなり	神崎郡・由来は、鎮西山の狼煙台や城の石垣を築くためにこの地の石を運び出し、石が「無い」土地になった事から「いしない」と呼ばれ、それが転じて「石動」という表記になったという。
58	目達原	めたばる	神崎郡・由来は、古代にこの地を支配した豪族の米た（めた）氏の領地「米多の原」が転じた地名とされ、古くは米多郡や米多の原として知られた地域に由来する。
59	三養基郡	みやきぐん	三養基郡・由来は、明治29年（1896年）に旧三根郡と養父郡及び基肄郡が合併した際、その郡名から一文字ずつ取って合成地名が造られた。各郡名事態にも古代からの由来がある地域。
60	黒目牛	くろめうじ	三養基郡・由来は、かつてこの地にあった「黒目牛寺（くろめうしてら）」という寺院名に由来し、寺が亡くなった後も寺の名がそのまま地名として残ったものとされる。
61	道瀬	ずうせ	三養基郡・由来は字義から推測するに、「川を渡る道が通る瀬」や「街

			道沿いの渡し場や浅瀬を意味する地名である可能性が高いと思われる
62	千栗	ちくり	三養基郡・由来は、「一夜にして千本の栗が芽を出した」という伝説に由来し、「千の栗」に因んで当て字された地名とされる。
63	東寒水	ひがししょうず	三養基郡・由来は、背振山地を源とする寒水川（しょうずがわ）沿いの集落で、「寒水村（しょうずむら）」という古い村名と、清く冷たい湧き水を意味する「寒水（しょうず）」に由来する地名と思われる。
64	寄人	よりうと	東松浦郡・由来は、中世にこの地へ移り住んだ人々を「寄人」と呼んだ事に由来するとされ、周辺の「牟田（むたより）」など同様に、他所からの寄り集まった人々の居住地を示す地名と思われている。
65	座川内	そそろがわち	東松浦郡・由来は、「急に崩れ落ちる」という意味を持つ「ざ（座）」と「川沿いの低地」を表す「河内（かわち）」が合わさり、「崩れやすい川沿いの土地」を意味する地名と思われる。
66	外津	ほかわづ	東松浦郡・由来は、「外れ」を意味する「はか（はずれ）」と、入り江の港を表す「わづ（はず）＋津」が合わさり「入り江のはずれにある港や浦」を指す地名とされる。」
67	黒川	くろごう	西松浦郡・由来は、川の水が黒く見えた事や、炭や鉄など黒い産物に由来する「黒い川」を意味する地形名が元になったと思われる。
68	福母	ふくも	杵島郡・由来は、「福をもたらす母なる土地」という意味合いを込めた近世以降の美称地名と思われる。
69	咄搦	おとながらみ	杵島郡・由来は、干潟や低湿地に潮が「搦む（入り込む）」地形を表す「搦（からみ）」に、人名や家名とされる「咄（おと）」が結び付いた複合地名と思われる。
70	築切	ついきり	杵島群・由来は、干拓造成の際に築かれた堤防や土手を「築」と呼びその線で区切られた区域を示す「切」と組み合わせた、干拓や区画に由来する地名と思われる。
71	廿治	はたち	杵島郡・由来は、近世の村名「廿路（はたち）」に由来し、その一部に新たに開かれた新田や集落として「廿治新村」などの地名が派生したものと思われる。なお、廿路・廿治の廿が「二十」を表すことから二十番目の道や筋」や「二十の区画」のど数に由来する可能性も指摘されている。
72	辺田	へた	杵島郡・由来は、「辺りの田（へた・へんだ）」＝集落や縁辺部にある田んぼを指す地形や土地利用由来の地名と思われ、そこから姓「辺田」も生じたとみられる。
73	廻里津	めぐりつ	杵島郡・由来は、有明海沿岸の入り江や海岸線が湾曲し「めぐる里の津（港）」であった事から。「廻る里の津」から「廻里津」と表記されるようになったという。
74	馬洗	もうらい	杵島郡・由来は、近くを流れる馬洗川と、その川で馬を洗った場所に由来する地名と思われる。



佐賀県の吉野ヶ里歴史公園・弥生時代の大規模な環濠集落跡

長崎県



NO	地 名	読み方	由 来
1	相生町	あいおいちょう	長崎市・由来は、「相生＝お互いに生き立つや調和して栄える」という吉祥語から取られたと思われ、明治以降の市街地整備で縁起の良い町名として付けられたもの。「相生」は、二本の木が根を同じくして共に育つ姿を現す語で、そこから「夫婦和合」「共存共栄」「長寿・繁栄」の象徴とされる。
2	赤迫	あかさこ	長崎市・由来は、赤土が多く産する山あいの狭い地形（迫）＝山が迫る狭い場所」に由来し、「赤い土のある迫（さこ）」という意味から生まれた地名と思われる。
3	畝刈町	あぜかりまち	長崎市・由来は、棚田状の畝（うね）が連なる地形と、それを「刈る・開く」農耕行為に由来する地名と思われる。「長崎地名考」などでも古くからの内や畦（あぜ）に関わる地名として扱われている。
4	畦別当町	あぜべっとうまち	長崎市・由来は、「畔（あぜ）」は他の境界や土手を示す漢字で、田畑の区切りや水路沿いを示す語で、「別当」は中世以降の寺社や荘園の管理者・長官的な役職名の語です。このため、一般的に「他の畔付近に、寺社や荘園などの管理する別当職のゆかりの土地があった事による地名と思われる。
5	畦町	あぜまち	長崎市・由来は、一般には田畑に「畦（あぜ）」に由来し、「畦のある土地の集落」を意味する地名と思われる。
6	彼浜	あちばま	長崎市・由来は、「あち（彼＝向こう側）」と「浜」が結びつき、「向こう側の浜」を意味する古い方言的表現が転じたものと思われる。
7	網場町	あみばまち	長崎市・由来は、「網を原漁場（あみば）を意味する語に由来し、沿岸の漁業地としての性格から生まれた地名と思われる。
8	飯香浦町	いかのうらまち	長崎市・由来は、神巧皇后が三韓征伐から帰途に炊かせた飯の香りが浦まで漂ったという伝承に由来し、「飯の香りの浦」が「飯香浦」と呼ばれるようになったという。
9	井上	いかみ	長崎市・由来は、「井戸の上」ではなく、古くは「伊上」や「伊神」などと書かれた地名が転訛したものと思われ、近くの海岸地形や古い集落名に由来する説が有力です。
10	以下宿町	いかやどまち	長崎市・由来は、「イカ（以下）」という小字の集落名」と「宿（やど）＝宿・宿屋」が結びついたものと思われる。長崎街道沿いの宿場的機能を持つ集落名に由来する可能性が高い。
11	磯道町	いそみちまち	長崎市・由来は、「磯（海岸の岩場）」と「道（通りや街道）」を合わせた「海岸沿いの道や岬へ向かう道」を意味する地形由来の地名と思われる。長崎港周辺の岬や御崎道などの歴史的会道路関わる可能性が高いと推測できる。
12	岩瀬道町	いわせみちまち	長崎市・由来は、「岩橋と呼ばれた海岸や磯場と、その前面を通る「道」（街道や通り）」を合わせた地形や交通由来の名称と思われる。
13	現川町	げんかわまち	長崎市・由来は、川の名「現川」に由来し、その川名は「うつつ（現実）」の語感から「水が澄んでいてはっきり見える川」などを意味する

			地名と思われる。
14	江里町	えりまち	長崎市・由来は、「江」（入り江や河口付近の水面）と「里」（集落や土地）を合わせた「入り江近くの集落」という地形由来の地名です。
15	大籠町	おおごもりまち	長崎市・由来は、「新しく開かれた新開地であること」または「人が大いに引き籠った場所である事」に由来する二つの説がある。
16	音無町	おとなしまち	長崎市・由来は、近くを流れる岩屋川が「音もなく静かに流れる川」であった事、あるいは鉄道のカーブで列車の接近音が聞こえにくかった事から「音無」と呼ばれるようになったという説などがある。
17	尾上町	おのうえまち	長崎市・由来は、長崎港に突き出した岬状の地形に「尾」の上部に位置する事から、「尾の上（おのうえ）」と呼ばれた地形由来の名称が定着したものと思われる。
18	風頭町	かざがしらまち	長崎市・由来は、東から吹く風が山の「頭」に吹き抜けて町へ下つて来る事から名付いたと思われる。江戸期の地名考証書にその由来が記され、春の風の名所として知られた。
19	鹿尾町	しかおまち	長崎市・由来は諸説あり、草原を意味する古語「かの」が長音化した「かのお」とする説と、新しく開いた田畑を指す「加納」が転じたとする説があるが、いずれも確定的な説ではない。
20	木鉢町	きばちまち	長崎市・由来は、近隣の神ノ島や女神・高鍋島など神巧皇后ゆかりの地名と関連された地名ですが、決定的な語源説はない。
21	琴海尾戸町	きんかいおどまち	長崎市・由来ははっきりしませんが、古くは牧場として利用された半島部の地形や入り江の「奥まった場所（尾）」を示す地形語に由来すると思われる。
22	琴海形上町	きんかいかたがみまち	長崎市・由来は、大村湾北部の入江である形上湾の地形が「湾の形が際立って上に入り込んだ場所」を指す古い呼び名に由来すると思われる湾名から周辺集落名（旧形上・形上郷）へと広がった地名。
23	毛井首町	けいくびまち	長崎市・由来は、細くくびれた入江（浦）が人の首のように狭まった地形に由来するという説が有力で、「毛」は切り立った谷や「切（きり）」などが転じたとも思われる。
24	香焼町	こうやぎまち	長崎市・由来は、弘法大師空海がこの地の山で護摩を焚き、香の煙が立ち上ったという「香焼伝説」に由来するとされ、「香を焚き焼いた山＝香焼山」から地名が生まれたと言い伝えられる。
25	小江町	こえまち	長崎市・由来は、「小さな入り江（小さな湾）」を意味する地形由来の名称と思われ、小江川河口周辺の小さな湾状地形から生まれた地名。
26	国分町	こくぶまち	長崎市・由来は、この地域一帯に多く居住していた国分氏という一族（地方豪族）の名字に由来する。
27	小菅町	こすげまち	長崎市・由来は、戦国期に有力者「小菅清直（こすげきよなお）の名に由来し、その居住や支配地であった事から町名となったという。
28	小瀬戸町	こせどまち	長崎市・由来は、長崎港外側の海峡状の細い海「瀬戸」のうち、比較的小さな（＝小）瀬戸に面した場所である事から、「小さな瀬戸」を意味して名付けられたと思われる。

29	米山町	こめのやままち	長崎市・由来は、古くは、「米山（こめのやま）」とよばれた丘陵地や山の名にちなみ、米作や年貢米の集積と結びついた地形名が町名化したと思われる。
30	幸町	さいわいまち	長崎市・由来は、もともと通称として使われていた名称が大正期以降に正式な町名になったが、漢字「幸」の由来や命名の理由は不明。
31	出津	しつ	長崎市・由来は、海に突き出た洲（す）や港を意味する「出洲（でず）」が転訛した地名とされ、「船の出入りする津（港）が前面に張り出した場所」を表す説が有力です。キリシタン集落として知られる出津教会周辺一帯の地形と歴史を反映した地名です。
32	芒塚町	すすきづかまち	長崎市・由来は、俳人の向井去来が日見峠で詠んだ句「芒（すすき）に塚をうづめてなく蛭（こうろぎ）」に由来し、この句にちなみ「芒塚」と名付けられた。
33	多以良町	たいらまち	長崎市・由来は、もともと「平（たいら）」と書かれた地名であり、それが「多以良」や「多井良」などの表記を経て現在の漢字に定着したとみられ、周辺の「平地やなだらかな土地」を表す古い地名に由来。
34	田手原町	たでわらまち	長崎市・由来は、もともと「蓼原（たではら）」と書かれ、湿った丘陵地に自生していた「蓼（たで）」の多い原野を意味した名が、のちに当て字的に「田手原」と表記されるようになったと思われる。
35	千々町	ちじまち	長崎市・由来は、波が幾重にも打ち寄せる「ちぢ（千々）＝捕捉乱れるさま」を表し、海辺の地形や波の様子に由来する地名と思われる。確実な定説はなく、地域の自然景観から生まれた地名と思われる。
36	藤田尾町	とうだおまち	長崎市・由来は「藤の多い田の尾根（岬状の細長い地形）」を意味する地形＋植生由来の地名と思われる。
37	土井首町	どいのくびまち	長崎市・由来は複数あり、「土井」という人物の首を晒（さら）した場所、または土居（防御施設）の端＝首にあたる場所を指した事に由来する説有力です。
38	中小島	なかこしま	長崎市・由来は、かつてこの一帯は海岸で沖に小さな島が点在し、その「小島」の中ほどに位置した事から「中小島」と呼ばれるようになったという説が有力です。
39	滑石	なめし	長崎市・由来は、戦国時代末期にこの地を支配した「滑石氏（なめしし）」という武士の一族の名に由来し、その居館があった場所として「滑石」と呼ばれるようになったという。
40	南越町	なんごしまち	長崎市・由来は、「南越（なんごし）」という姓に由来するという説と「南の越（こす）場所＝南側の峠や坂を超える場所」うい意味する地形由来説があるが、確定的な説はない。
41	西海町	にしうみまち	長崎市・由来は、「西の海に面した地域」という地理的特徴を表す「西海」に由来し、その町であった事から「西海町」となったという。
42	西北町	にしきたまち	長崎市・由来は、長崎市から見て「西北（西北西より）」の方向に位置する新しい住宅地として名付けられた方向・位置に由来する地名。
43	西立神町	にしたてがみ	長崎市・由来は、近くの神ノ島や皇后島・女神・高鉾島など神巧皇后

		まち	ゆかりの地名が多い事から、これらと関係する「神（立つ神）に由来すると思われるが、厳密な由来は不明という。
4 4	西泊町	にしどまりまち	長崎市・由来は、長崎港口にあった船泊まりの内、戸町側の「東泊」に対する「西側の「泊地（船着き場）」を意味する事から「西泊」と呼ばれるようになったという。
4 5	野母崎 樺島町	のもざき かばしままち	長崎市・由来は、長崎港内の町「樺島町」が、野母崎の樺島出身者が埋め立て造成した町であった事から、その出身地の島名「樺島」に由来するとされ、元の島側も古くから「樺島」と呼ばれてきたことに基づく名称と思われる。
4 6	野母町	のぼまち	長崎市・由来は、「野の老母（ののはは）」がこの地を開いたという伝承から「野母」と名付けられたという説が有力です。
4 7	本河内	ほんごうち	長崎市・由来は、中島川上流の「川の奥（河内）」のうち、長崎の町場に最も近い「本（おも）なる河内＝中心となる谷筋の集落」を指した事に由来すると思われます。江戸期史料に「本河内村」と見え、近世以前から川沿い山間部の集落名として定着した。
4 8	向町	むかえまち	長崎市・由来は、食見川をはさんで本村側（向こう側）に位置する集落だった為「向郷」と呼ばれ、それが町名化して「向町」になったと思われる。
4 9	女の都	めのと	長崎市・由来は、日当たりの良い南向き斜面を「老婆の懐（ばばのつくら）」と呼んだ事から、この地も乳母（めのと）＝子育てする女性に例えて呼んだ、という説が有力です。他にも、古くから子育てや安産結び付けて語られる民間伝説的な説もある。
5 0	茂木町	もぎまち	長崎市・由来は、神巧皇后が朝鮮出兵から帰途にこの浦に立ち寄り、裳（も）を着替えた事から「裳着（もぎ）」と呼ばれるようになり、のちに読みやすく「茂木」の表記されるようになったと伝えられる。
5 1	本石灰町	もとしっくい まち	長崎市・由来は、近くの船着き場で油谷町の油精製に使う石灰を荷揚げし、石灰を扱う業者が多く住んだ事から「石灰町」と呼ばれ、それが「本石灰町」として残ったとされる地名。
5 2	茂里町	もりまち	長崎市・由来は、明治期にこの地一体の開発に尽力した豪商の森伊三次の姓「森」にちなみ、低湿地が「森の里」「森里」と呼ばれた事から「茂里」と表記されるようになったという。
5 3	梁川町	やながわまち	長崎市・「梁川」という地名は全国各地に見られる地名ですが、一般的には「梁（はり）＋川」から、川に架かる梁や橋や川沿いの地形にちなむ名称と開削される事が多い。
5 4	四杖町	よつえまち	長崎市・由来は、町域内にあった小字「四杖（よつえ）」に由来し、旧称「田舎郷」という素朴な名を避けて採用されたと思われる。江戸期は大村藩式見村のいちぶで、明治以降現在の町名となった。
5 5	炉粕町	ろかすまち	長崎市・由来は、キリスト教禁教以前にあった「セント・るかす会堂」前の「るかす通り」が転訛して「炉粕」になった説と、銀の精錬で出る不純物「留加須（るかす）」に由来する説が代表的です。

56	相浦町	あいうらまち	佐世保市・由来は、中世に「相神浦（あいこうのうら）」と呼ばれた港町・村落名が簡略化されて「相浦（あいのうら）」となったものという古くは南北朝期の史料に見え、相神浦村が現在の相浦町・上相浦町一帯へと続いている。
57	庵浦町	いおのうらまち	佐世保市・由来は、江戸期の村名「庵之浦（いおのうら）村」に由来し、「イオ（岩・磯）」＋「浦」（入り江）とみて「岩の多い入り江の村」を意味したと思われる。
58	宇久町飯良	うくまちいら	佐世保市・由来は、「飯（イイ）」と「浦（ウラ）」が転じた「イイラ」が語源とされ、良港や良い入り江を意味する地名と思われる。
59	鵜渡越町	うどごえまち	佐世保市・由来は、「鵜（う）」が渡って超えるような入り江や水辺の地形にちなむと思われる。
60	上原町	うわばるちょう	佐世保市・由来は、「原（はる/ばる）」と呼ばれる台地状の原野の上手側に位置する事から、「上の原＝上原」と呼ばれた地形由来の地名と思われる。
61	上町	うわまち	佐世保市・由来は、港の船着き場から見て一番「上手（かみて）」側にある通りだった事から「上町」と呼ばれるようになったとされる。初期の長崎港で海岸側から順に中町・上町と名付けたことが由来。
62	江迎町猪調	えむかえちょう いのつき	佐世保市・由来は、古くは「猪調村」と書かれ、猪（いのしし）に由来する語と、地域や土地を「調べる・ならす」意味を持つ語が結びついた地名と思われ、江迎川上流域の山間農村を指す歴史的地名です。
63	江迎町籠尾	えびらお	佐世保市・由来は、矢を入れる道具「籠（えびら）」と山の尾根を指す「尾」が合わさり、「籠のような形をした尾根（山の端）」を意味にする地形由来の名称と思われる。周辺の山地地形と中世以来の集落立地から、この解釈が有力です。
64	江迎町七腕	ななかい	佐世保市・由来については不明。
65	海瀬町	かいぜちょう	佐世保市・由来については不明。このような地名は長野県にはある。
66	鹿子前	しかまえ	佐世保市・由来は、「鹿」を神の使いとみなす信仰に由来する「鹿子（かこ/かし）」の語と、海に突き出た岬状の地形を示す「前（岬の先端部）」が結びついた地名と思われ、鹿にちなむ信仰的な呼称と海岸地形を反映した地名です。
67	上柚木町	かみゆきのまち	佐世保市・由来は、「柚（ユズ）」の木が多く生えていた土地に由来する地名と思われ、「上柚木」はその中で上流側や山側の区域を指す地名。
68	京坪町	きょうのつぼ ちょう	佐世保市・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると「京」は「都」や中心地を表す漢字で、「坪」は田畑や宅地などの区画を表す語ですので、「中心的な田地」や「区画整理された土地」といったイメージの地名と思われる。
69	潜木町	くぐるぎちょう	佐世保市・由来は、旧「潜木村（くぐりぎむら）」に由来し、「木が川や谷にせり出して潜るように見える木の多い地形」から付いた地名。

70	心野町	ここのちょう	佐世保市・由来については不明。
71	小佐々町	こさざちょう	佐世保市・由来は、南北朝時代にこの地を支配した武士の「小佐々氏」の姓に由来すると伝えられる。小佐々氏の一族が当地に来住して名乗ったとされ、その居住地名として定着した。
72	小佐々町 葛籠	こさざちょう つづら	佐世保市・由来は、古くからの小字名「葛籠・葛箒（つづら）」がそのまま残った者で、一般には「葛のツルが絡む籠（つづら）」を意味する語から転じた地名と思われる。
73	木場田町	こばたちょう	佐世保市・由来は、周辺にあった「木場（こば）」＝焼畑・木材置き場と、水田（田）に由来する複合地名と思われ、江戸期の小字「木場田」が近代に町名化したもの。
74	権常寺	ごんじょうじ	佐世保市・由来は、かつてこの地にあった寺院「権常寺」の名称に由来すると思われ、寺の所在した集落や町としてその名が残ったもの。
75	指方町	さしかたちょう	佐世保市・由来は、中世から見える「指方（さしかた）」という地名や城名に由来し、肥前国彼杵群江上村指方にあった「佐志方城」などの中世城館と周辺集落の名が近世以降も継承され、現在の地名となる
76	里美町	さとよしちょう	佐世保市・由来は、江戸時代から見える「里美」という古い地名に由来し、「里（村里）」と「美（うるわしい・よい）」を合わせた、景観や土地をほめる意味合いの地名と思われる。
77	塩浸町	しおしたし ちょう	佐世保市・由来は、海水や塩分を含む水が入り込み「塩に浸る」よおな低湿地や入り江」の地形に由来する地名と思われる。
78	鹿町町長串	しかまちちょう なぐし	佐世保市・由来は、朝鮮半島などに見られる「串（コツ/コス＝岬や突き出た地形）」に由来する地名要素「串」が、細長い山稜や岬状の地形に荒れられたものと思われ、「長い串状の山」を意味する地形由来の地名と思われる。
79	島瀬町	しまのせちょう	佐世保市・由来は、中世のこの地を領した「島瀬氏」という一族の名字に由来する説が有力です。
80	島地町	しまんじちょう	佐世保市・由来は、古くは「嶋地」と記されていますが、直接の由来は不明。「島のような地形」などを示す地名語源が推測に留まる。
81	下の原町	しものはるち ょう	佐世保市・由来は、「原（はら＝平坦地や原野）」のうち川下側や低い側に位置する区域を示す（下（しも））を組み合わせた、「上原」に対する位置関係を表す地名と思われる。
82	白南風町	しらはえちょう	佐世保市・由来は、夏の初めに南から吹く季節風（白南風（しらはえ））にちなみ、港町らしい風と海の情景を表した地名と思われる。
83	新替町	しんがえちょう	佐世保市・由来は、一般的には「新しく替えた土地や街並み」を意味する造成や区画替えが由来の可能性が高いと思われる。
84	新行江町	しんぎょうえ ちょう	佐世保市・由来は、「新しく開かれた行江（入江や川筋）の土地」という意味を持つと考えられ、「新」＋行（ぎょう/ゆき）」＋「江（え＝入江や川の意）」という地形や開発由来の合成地名と推定される。
85	世知原町	せちばるちょう	佐世保市・由来は、「セチ（狭いや陰しい谷）」や「セチ（境や関所）」などの古語に由来し、山合いの谷や境界の地形を表した地名です。

86	世知原町 筈瀬	せちばるち う やなせ	佐世保市・由来は、古くは、「やなせ」と読まれ、佐々川支流沿いの瀬（浅瀬）に儲けられた築（やな）＝魚を獲る仕掛けに由来する地名と思われる。
87	世知原町 矢櫃	せちばるち う やびつ	佐世保市・由来は、戦いで用いる矢を納める箱（矢の櫃）に由来する地名とみられ、周辺に中世の城館や陣域が多いことから、軍事や防備と関わる地形や施設にちなむ地名と思われる。
88	田原町	たばるち う	佐世保市・由来は、周辺一帯がもともと田畑（田んぼと畑）の広がった土地だったことから「田原（たはら／たわら）」と呼ばれるようになったという。田園地帯の地形や、土地利用を反映した地名と思われる。
89	知見寺町	ちけんじ ちう	佐世保市・由来は、かつて存在した「知見寺」と寺院に由来する地名で、寺の存在した村（知見寺村）が町名として敬称されたもの。
90	戸尾町	とのおち う	佐世保市・由来は、「戸尾（とのお）」という地形や地名に由来すると思われるが、はっきりとした定説は確認できない。
91	戸平田	とへだ	佐世保市・由来は、「戸（と＝入口や境）＋平（ひら＝平坦地）＋田（水田）」という一般的な地形語から成る地名と思われ、山地の出入り口付近に開かれた小さな平坦な田んぼを表す地名と解釈できる。
92	十文野町	ともんの ちう	佐世保市・由来は、年貢の単位「文」と関係する「十文の野（十文分の年貢を産する田野）」に由来する説が有力です。
93	早岐	はいき	佐世保市・由来は、大村湾と佐世保湾を結ぶ早岐瀬戸の潮流が速く「速来（はやき）」と呼ばれたことが転じた地名とされ、古くは奈良時代の「肥後国風土記」にも記録があると伝えられている。
94	南風崎町	はえのさ きち う	佐世保市・由来は、「ハエ（長く伸びるの意）＋「ノ」＋サキ（岬）」が語源とされ、なだらかに長く伸びた岬、または南風（この地方ではハエと呼ぶ）の吹く岬を表すという。いずれも地形や風向きに由来する地名で、複数の説がある。
95	原分町	はるぶん ちう	佐世保市・由来は、中世に大野地区の開拓が進み、荒れ地との境に祝詞神社を創建した際、その一帯を「原分」と呼んだ事に由来する。荒れ地と開拓地を分ける「原の分かれ目」という意味合いが込められた地名と思われる。
96	千尽町	ひづくし まち	佐世保市・由来は、「干潮時に海底が広く現れる浅海や干潟が広がる場所」であった地形的特徴を表した地名とみられ、「干（ひ）」と「尽（つくす）」を合わせ「潮が引ききる場所」という意味合いから生まれた地名と思われる。
97	母ヶ浦町	ほうがう らち う	佐世保市・由来は、「母ヶ浦（ほうがうら）」という古い村名や浦名を受け継いだもので、「母（老女）」にまつわる伝説を伴う浦（入江）を意味する地名と思われる。
98	保立町	ほたて ちう	佐世保市・由来については不明。
99	山川	やまご	佐世保市・由来は、一般的には、「山と川に挟まれた土地」や「山から流れ出る川沿いの土地」といった自然地形に由来する地名と思われる
100	山祇町	やまづみ ちう	佐世保市・由来ははっきりしませんが、一般的には「山の神（山祇

			神)を祀る社や山地の地形にちなむ地名と思われる。
101	柚木町	ゆのきちょう	佐世保市・由来は、「柚(ゆず)の木」が多く生えていた土地、あるいは目立つ一本の柚の木に由来すると思われる。
102	吉井町板樋	よしいちょう いたび	佐世保市・由来は、用水や谷水を通す「板で組んだ樋(とい)があった場所を指す地名と思われる。
103	吉井町踊瀬	よしいちょう おどりぜ	佐世保市・由来は、「瀬」(急流や浅瀬)に由来する地形名に、波や潮流が踊るように荒れる様子を重ねた比喩的な名称とみられる説が有力
104	吉井町下原	しもばる	佐世保市・由来は、一般的には「川や谷の下手側(しもて)にある原野や畑地」を意味する地形由来の地名と思われる。
105	吉井町春明	はるあけ	佐世保市・由来は、「春が明ける(春あけ)」という季節感を表す語から転じた地名とみられる。
106	万津町	よろづちょう	佐世保市・由来は、港町として多種多様な品物を扱う商人町であった事から「万(よろづ)の津(港)」=あらゆる船や荷が集まる港を意味して名付けられたと思われる。
107	御手水町	おちょうずまち	島原市・由来は、「天皇が戦勝ののち、この地の湧水で手を清めた」という伝承に由来し、手を洗い清める聖なる水=御手水(おちょうず)を意味する地名とされる。
108	崩山町	くえやままち	島原市・由来は、1792年(寛政4年)の「島原大變」で眉山が崩れ、「その土砂により一帯が埋没した事に由来する。
109	万	よろず	島原市・由来は、多くが「満ちる・たくさん」を意味し、湾や田畑が広く豊かな土地である事を表すのが一般的な由来と思われる。
110	諫早市	いさはやし	諫早市・由来は、鎌倉時代の文章に見える「伊佐早(いさはや)」が起源で、戦国期にこの地を治めた龍造寺氏が自らの姓を「諫早」を改めた事から現在の表記「諫早」が定着したという。
111	有喜町	うきまち	諫早市・由来は、中世文献に見える「宇木(うき)」という古い村名が変化したもので、「宇木」から「有喜」と表記が改められた事が現在の「有喜町」の由来と思われる。
112	栗面町	くれもまち	諫早市・由来は、「栗の木が多い山や斜面」などの地形や植生にちなむ一般的な地名形成からの推測にとどまる。
113	破籠井町	わりごいまち	諫早市・由来は、弁当を入れる入れ物「破籠(わりご)」に由来する説が有力で、長崎街道沿いの集落が旅人の弁当を包む「わりご」が多く用いられた事から名付けられたとされる。一方で、古くからの平家落人伝説など歴史的背景もあり、確定した定説ではなく伝承的な要素を含む。
114	小路口町	おぐろまち	大村市・由来は、城下町の武家地から外れた「城下の小さな道の出口(小路の口)」を意味する地形的な呼び名が地名化したものと思われる
115	放虎原	ほうこばる	大村市・由来は、虎を放つにふさわしい荒れた原野だったことが地名の由来で、キリスト教殉教地としても知られる。
116	的山大島	あづちおおしま	平戸市・由来は、「的山」は、港を見下ろす山の形が弓の的(あづち)に似ていた事から付いたとされる説が有力で、「大島」は周辺で最も大

			きな島である事に由来する。
117	紺屋町	こうやまち	平戸市・由来は、江戸初期にこの一帯に染物職人（紺屋）が多く住み営業していた事から「紺屋町」と呼ばれるようになったとされる。長崎では中島川沿いの外町造成の際に材木町や本紺屋町・袋町・酒屋町などと共に成立した町のひとつと位置付けられている。
118	度島	たくしま	平戸市・由来は、「たびしま」や「どしま」などの古い呼び名が転訛した可能性があるが、確実な由来は明らかでなく諸説あるという。
119	朶の原町	へごのはらちよう	平戸市・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると「朶（だ・えだ）」は漢字としては「枝先」や「垂れ下がるもの」、の意味があり。「朶の原＝枝が垂れた原（原野）」のような意味の地名か。
120	郭公尾	こっこうのお	松浦市・由来ははっきりしませんが、郭公（ホトトギス）という鳥名と「尾＝尾根や山の端」を組み合わせた「ホトギスのいる尾根」という自然地形・生態に由来する地名と思われる。
121	調川町	つきのかわちよう	松浦市・由来は、古代の税制「租庸調」のうち「調」として皮革などを納めた事に由来するという説が有力で、「調を納める川筋の地」から「調川（つきのかわ）」と呼ばれるようになったという。
122	滑栄	なべるばえ	松浦市・由来は、「滑栄」という地名は確認できないが、「滑石（なめし）」の誤記か略記である可能性が高い。「滑石」の名は、戦国末期～江戸初期にこの地を知行とした武将の名や、滑らかな石や鉱物山地などにちなむ説がある。
123	厳原町	いづはらまち	対馬市・由来は、古代に対馬国府が置かれた事から「国府（こう）」や「府内」と呼ばれた地域に由来し、「厳原（いづはら）」はこの国府所在地としての歴史を背景に成立した地名とされる。現在も対馬南部の行政・交通の中心地で、古くから城下町や港町として発展している。
124	舟志	しゅうし	対馬市・由来は、「舟止（ふなどまり）」が転じたものとされ、船が停泊する入り江や港を意味する地名と思われる。
125	豆酸	つつ	対馬市・由来は、古くは「ツツ」や「ツツウ」などと記され、港や入り江を意味する古語や古地名に由来すると思われ、対馬南端の良港を示す名称とみなされている。
126	印通寺	いんどうじ	壱岐市・由来は、神巧皇后が三韓出兵の時、逃亡を図った王に怒って投げた矢が、その王の胸を射抜いた事に由来する説と、衣通姫（いとおしひめ）社に関わるとも、自積山印通寺（いんどうじ）にちなむなど諸説の由来がある。
127	大左右	たいそう	壱岐市・由来は、「大きく左右に開けた地形」を表す古い地形語に由来すると思われるが、確定した説ではない。
128	大原	たいばる	壱岐市・由来は、一般的には「大きな原野や広い平坦地」を意味する地形語から生じた地名と思われる。
129	筒城	つつき	壱岐市・由来は、壱岐島のこの一帯にあった「筒城（つつき）村」及び白砂の浜「筒城浜」にちなみ、古くは「管城（つつき）」とも書かれた地名が転訛・表記変化史で現在の「筒城」となったと思われる。

130	半城	はんせい	壱岐市・由来は、半分の城」や「城の一部」を意味する説と、古い文献に見える「半成（はんせい）村」が転じたという説がある。
131	平人	ひろうと	壱岐市・由来は、「平らな門戸」や「平らな小口」のような意味を持つ地形由来の地名とされる説が有力ですが、古い文献が少なく、確定した説がなく諸説ある。
132	母ヶ浦	ほうがうら	壱岐市・由来は、古くは、「母ヶ浦村」と呼ばれ、女性（母）を祖とする伝承や、湾状の入り江（浦）の地形に由来すると思われる。江戸期文書に見える「母ヶ浦岡免」などの古い地奈形から発展した名称。
133	鐙瀬	あぶんせ	五島市・由来は、「鐙（あぶみ）のような形をした浅瀬」を意味する地形由来の地名とされる。福江島南部の溶岩海岸に広がる浅瀬の形状から名付けられたと思われる。
134	馬責馬場	うませんばば	五島市・由来は、江戸時代にこの一帯にあった馬の訓練や競馬などを行う「馬場」と、馬をつなぎ止めたり扱役した場所（馬を「責め使う」場）であった事に由来すると思われる。
135	岐宿町	きしくまち	五島市・由来は、もとは「鬼宿」と書かれ、豪族「鬼」氏の居住地に由来するとされ、江戸末期の大火を機に「鬼」を忌まわしみ「岐宿」の字に改めたと伝えられる。
136	魚津ヶ崎	ぎょうがさき	五島市・油袋は、湾口を守る細長い岬（崎）と、その内側の良好な漁場「魚津（魚の集まる入り江）」という地形や漁業条件に由来すると思われる。古くから遣唐使船の寄泊地として利用された安全な湾と、その入口に伸びる岬を表す地名です。
137	皆割石	みのろし	西海市・由来は、長崎名勝図絵には海岸の崖が崩れ落ちて割れて横の渡し場（志賀波止）を遮っているので「割石渡」と呼ばれると由来が記されている。
138	千々石町	ちじわちょう	雲仙市・由来は、「肥前国風土記」に記された断崖「比遅波（ひじは）」及びその近くの「土齒（ひじは）池」の名が時代と共に音変化して「ちぢわ」となり、のちに「千々石」の字が当てられたもの。
139	神代	こうじろ	雲仙市・由来は、中世の「神代郷」や鎌倉期の「髪白（かみしろ）庄」など古い地名を受け継いだもので、古来「神の時代や神の領地」と結び付けて理解されてきた地名とされる。
140	土黒	ひじくろ	雲仙市・由来は、土黒川流域で古くから砂鉄が豊富に算出し、川沿いの土も黒っぽかった事に由来すると思われる。中世文書にも「土クロ村」と見え、砂鉄産地としての性格を反映した自然地形由来の地名。
141	時津町	とぎつちょう	西彼杵郡・由来は、中世にこの地を支配した武士「時津氏」の名字に由来する説と、港町「時津浦」として発達した地名が現在の町名へと受け継がれたと思われる。
142	新谷郷	しんがえごう	東彼杵郡・由来は、「新しく開いた谷あいの耕地や集落」を意味する「新しい谷（新谷）」に、中世以来の行政や集落単位を表す「郷」が付いたものと思われる。
143	百津郷	ももつごう	東彼杵郡・由来は、推測ですが「入り江（港）が多い場所」や湾入り

			が連なる浜」など、海岸地形を表す地名と思われる。
144	小値賀町	おじかちょう	北松浦郡・由来は、景行天皇が遠くに見える島々を「近い島」と呼んだ伝承に由来し、「小近（おちか）」から「小値賀」に転じたとされる。古代には五島列島一帯が「値嘉島」「知訶島」と記され、小値賀島周辺がその「小近」にあたると説明されている。
145	佐々町	さざちょう	北松浦郡・由来は、竹野一種である笹が多く生い茂った土地を表す説と、川沿いの砂地を意味する「砂々（すなすな）」が転じ他という説など、複数の語源説があるが定説はない。
146	盲ヶ原	めくらがばる	北松浦郡・由来ははっきりしませんが、「盲」の字を含む古い地名には「見通しが悪い」や「道が分かりにくい」・「水の流れが地表から見えない」など、比喩的な意味で用いられる例が多い。
147	神田免	こうだめん	北松浦郡・由来は、由来は、神社や神への供え物に関わる「神の田んぼ」（神田）と、中世以来の行政・租税単位を表す「免」が合わさった名称と思われ、神に奉げる」田を含む区域を示す地名と思われる。
148	本田原免	ほんたばるめん	北松浦郡・由来は、「本（もと＝中心・元の）」と「田原（たはら）＝田の広がる原野を意味する地形由来の地名と思われる。
149	相河	あいこ	南松浦郡・由来は、「河が曲がりながら流れる様子」を表す古い語源（相＝あい・そう＋河＝川）に由来し、湾奥の入り江と小河川が合流する地形を反映した地名と思われる。
150	飯ノ瀬戸	いのせど	南松浦郡・由来は、「飯（イイ）」と呼ばれる集落名と海峡や水道を意味する「瀬戸」が合わさった地名で、集落の前に広がる瀬戸（海峡）を指した呼び名がそのまま定着したと思われる。
151	白魚	しろう	南松浦郡・由来は、中世にこの地を本拠とした在地武士「白魚（しろお）氏」の名字に由来する地名と思われる。
152	築地	ちじ	南松浦郡・由来は、海辺を埋め立てて造成した土地＝「築いた地」から生まれたとされる地名です。
153	漁生浦	りょうせうら	南松浦郡・由来は、「魚がよく獲れる浦」や「漁で生計を立てる浦」という意味合いから生まれたと思われ、古くから漁業を生業とする集落や入り江を砂州名称とされている。



長崎平和記念像



観光名所の眼鏡橋

熊本県



NO	地名	読み方	由来
1	出水	いずみ	熊本市・由来は、江戸時代に白川の水を引いた防火用水の水道が設けられた事から「出水」と呼ばれるようになったという。もともと湧水や用水路が多い土地柄で、水に由来する地名の一つ。
2	蔚山	うるさん	熊本市・由来は、文禄・慶長の役ののちに朝鮮の蔚山（うるさん）から連れて来られた人々を住ませたことに由来する地名。
3	九品寺	くほんじ	熊本市・由来は、もともと「下南原村」と呼ばれていた村が、村内にあった浄土宗寺院「九品寺（くほんじ）」の寺号に因んで「九品寺村」と改称された事に由来する。
4	神水	くわみず	熊本市・由来は、古くは湧水に恵まれたこの地が「神の水や美しい水」の湧く聖なる場所された事に由来すると思われる。現在も神水苑

			として知られ、熊本の水文化を象徴する地名です。
5	壺川	こせん	熊本市・由来は、江戸時代の熊本城下「寺原」周辺にあった「壺川（こせん）」という小河川に由来し、その川名が町名として残ったものと思われる。語源はいくつがあり、川の形状や水のたまり方を「壺」に見立てた比喩的な名とみる説が有力です。
6	杉塘	すぎども	熊本市・由来は、井芹川沿いの土手（塘）に杉の木が植えられていたことから、「杉が飢えられた土手（杉の塘）」を意味して名付けられた。
7	碩台	せきだい	熊本市・由来は、はっきりしませんが、字義から推測すると「碩」は「大きな台地」や「高く目立つ台地」という意味を連想する地名。
8	段山	だにやま	熊本市・由来は、熊本城下の西側に位置し、段状の地形をなす丘陵に由来する地名とされ、江戸期の城下町形成と共に町名として定着したと思われる。
9	渡鹿	とろく	熊本市・由来は諸説あり、「鳥鹿（とろか）」と呼ばれた地が転じた説と。「川の渡し場「渡わたり」と鹿の生息地が結びついた説があり、いずれも古い地名「渡鹿村」に由来すると思われる。
10	妙体寺	みょうたいじ	熊本市・由来は、この地にある日蓮宗寺院「妙体寺」の所在に由来し、明治3年（1880年）に町名として成立したとされる。江戸時代には武家屋敷地で町名がなく、明治になり寺院の名を取って命名されたという。
⑪	画図	えず	熊本市・由来は、江津湖周辺の地形を「絵図のように広がる入り江」と見立てたことから生まれたとされる地名で「江津（えづ）」が転じた説と、古くは「書園」と書かれたことから「絵図」に由来する説があると思われる。
12	烏ヶ江	からすがえ	熊本市・由来は、「烏（カラス）が多く集まる入り江や水辺」であった地形や景観に由来する地名と思われ、烏＋江（入り江・川辺）という一般的な地名構成と思われる。
13	藻器堀川	しょうけぼりがわ	熊本市・由来は、「藻器（しょうけ＝しおおけ）」という竹で編んだザル状の容器に由来し、「藻器を沈めるほど掘られた川・水路」という意味とされる。
14	新外	しんほか	熊本市・由来は、旧来の「外（ほか）」と呼ばれた村外れの地域を新たに開発・転入した「新田らしい外側の土地」という意味から生じたとする説が有力です。古い方言「ほか・はずれ」に由来する地名が変化したものと思われる。
15	沼山津	ぬやまづ	熊本市・由来は、「沼山」という湿地の林や野林を意味する語に、船着き場を表す「津」が付いたものと考えられ、「湿地帯の林のそばの船着き場」という地形を示す地名と思われる。
16	面木	おもものぎ	熊本市・由来は、古くからの村名「面木村」に由来し、地形や土地利用を表す語から生まれた地名と思われる。
17	柿原	かきばる	熊本市・由来は、古くは中世の荘園名や名田「柿原名」に由来し、周辺に柿の木が多い原野（柿の原）を指した地名が、そのまま地名とし

			て残ったものと思われる。
18	城山大塘	じょうざん おおども	熊本市・由来は、中世に熊本城の出城として築かれた上代城に由来する「城山」という丘陵地名と、湿地や堤防を意味する「大堤（大きな堤・水辺）」が合わさり、城を擁する丘とその麓の水辺地形を表した地名と思われる。
19	近津	ちこうづ	熊本市・由来ははっきりしませんが、現時点では古い神社名や「近い津（港や船着き場）」の呼称に由来する可能性があると思われる地名です。
20	野出	のいで	熊本市・由来は、「野に出た場所」や「野外に開けた土地」を意味する自然地名と思われる。
21	海路口	うじぐち	熊本市・由来は、海上交通の「海の道（航路）」が陸に着く入り口＝（港や渡し場出入口）を意味する地名と思われる。
22	碓江	かきのえ	熊本市・由来は、海辺の「カキ（牡蛎）」と入り江や川の（江）が結び付いた、解散資源と水辺地形を反映した地名と思われる。
23	莎崎	こうざき	熊本市・由来は、「莎」は香附子（こうびし）で、「海辺や河口近くに良く生える植物で、その植物が自生する事で地名になったという。
24	菰江	こものえ	熊本市・由来は、「菰（こも）」という水辺の草が多く生えた入り江や川辺を指す地形語に由来する可能性が高い。
25	護藤	ごんどう	熊本市・由来は、熊本県側の条里地名と関係する古い村名・小字名で条里制に由来する地割り（条里地名）から生じた地名と思われる。
26	志々水	しじみず	熊本市・由来は、「しし（いのしし）＋水（みず）」とされる説と「しじ（湧き出る）＋水」などに関わる古語に由来する説があり、いずれも湧水や湿地に多い土地柄を反映した地名と思われる。
27	沈目	しずめ	熊本市・由来は、番匠川の氾濫で水没しやすい低地であったことから「沈む目（場所）」を意味する呼び名が転じたものとされる説が有力です。文献上確定した通説はなく、古い方言や地形語に由来する。
28	銭塘	ぜにども	熊本市・由来は、中国浙江省の「銭塘（現在の杭州付近）」に由来する漢字表記が、個人名や屋号などを通じて局地的に使われたものか。
29	田尻	たのじり	熊本市・由来は、水田の端（田の尻）に位置する土地を指す呼び名がそのまま地名になったと思われる。谷や低地の奥まった場所、田の行き止まり付近を意味する地名と思われる。
30	南部	なべ	熊本市・由来ははっきりしませんが、熊本市南区南部地域の地名の由来としての「なべ」という説もあるが、定説ではない。
31	丹生宮	にうのみや	熊本市・由来は、古くから辰砂などの赤い鉱物（丹）が産出したことから「丹が生まれる土地」を意味して「丹生」と呼ばれ、その丹生地区に鎮座神社（丹生宮）にちなむ周辺の地名が「丹生宮」となった。
32	土鹿野	はしかの	熊本市・由来は、開村時に大きな鹿の像を土で作り地中に埋め、その上に天満宮を祀ったことから「土鹿野」と称したと伝える俗説が代表的な由来と思われる。

33	八分字	はふじ	熊本市・由来は、田地を八等分した区画や、村内の「八つの分（わかれ）」を示す地割りや行政区画に由来する地名と思われる。
34	平原	ひらばる	熊本市・由来は、一般に「平らで開けた原野や台地状の土地」を指す地形語から生じた地名と思われ、特定の人物名などに由来する説はない。大分県内には「平原」という地名は複数ある。
35	部田	へた	熊本市・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると「部+田」と意味は「部民に属する田」や「分担された田」などを示す可能性があると思われる。
36	廻江	まいのえ	熊本市・由来は、字義から推測説で「曲がりくねる川筋や湾の入り具」を表す地名と思われる。
37	良町	ややまち	熊本市・由来は、旧・良間村（ややまむら）と四才町村が合併した明治7年（1874年）に生まれた村名の「良町村」に由来し、その後の合併を経て現在の町名として残った地名。
38	鍙田	あぶみだ	熊本市・由来は、かつてこの一帯が「鞍の両脇の鍙まで埋まるほどの湿田だった事」に由来すると思われる。現在も遊水地や水田が残り、水と深く結びついている地名。
39	改寄	あらき	熊本市・由来は、もとの地名「怪所（かいしょ）」が「恐れ多い」とされて改められた事から「改寄」となったという言い伝えがある。
40	生野	ぐみの	熊本市・由来は、一般的には「生い茂る野」や「新しく開かれた野」など、自然地形や開墾に由来する地名と思われる。また、「播磨国風土記」には「神前（かんざき）郡の条に「生野」と見え、かつては当地に荒神があつて従来の人々を殺した為「死野」と称していたが品太天皇の命で「生野」と改めたという。
41	古閑	こが	熊本市・由来は、一般に「古い+閑（しずかなやひまな場所）」の意から、古くから人の手があまり入らない静かな土地や原野を指す地名と解釈されている。
42	陣内	じんない	熊本市・由来は、中世以降に武士の陣屋や城館の内側（陣の内）を指した呼び名で、城下町や集落の小字名として定着したもの。
43	大般若塚	だいはつか	熊本市・由来は、大般若経を納めたと伝わる塚（古い墓・供養塚）があった事に由来すると思われる。
44	滴水	たるみず	熊本市・由来は、崖面などから水が滴り落ちる湧水や湿地の景観を表す「滴水」に由来する地形系の地名と思われる。古くから湿った斜面や遊水地を指す語として「垂水・樽水・滴水」などの同系等の表記が使われており、その一つがこの地という。
45	投刀塚	なたつか	熊本市・由来は、合戦や武芸に関わる刀や槍などの武器を「投げ捨てた」「埋めた」場所として伝承される事から、「刀を投げた塚（丘）」を意味する地名とされている。
46	楡木	にれのき	熊本市・由来は、「ニレ（楡）の木が多く生えていた土地を示す自然地名が由来と思われ、近世には麻田村の一部として「楡ノ木」を記録されている地名が現在の町名として継承されている。

47	八景水谷	はけのみや	熊本市・「谷水が湧き出る場所を意味する古い地名「吐け（ハケ）」と江戸時代に細川綱利がこの地にお茶屋を設け八つの景色（八景）を詠んだ事が重なって生まれた名称とされる。
48	舞尾	もうの	熊本市・由来ははっきりしませんが、字義から「山や丘の尾根に関する地形由来」や「祭礼や舞いに関わる伝承由来などが連想される。
49	四方寄	よもぎ	熊本市・由来については不明。
50	三箇	さんが	熊本市・由来は、「三つの地区（あるいは三つの村や郷）が一つにまとまった土地」を意味する合成地名の可能性があるとされる。
51	海士江	あまがえ	八代市・由来は、海に関わる「海士（あま）」と入り江や川沿いを示す「江（え）」の組み合わせた地名と思われる。
52	女原	おなはら	八代市・由来は推測ですが、女性に関わる伝承や人物にちなむ説と、男原や女原のような対になる地名の片方という説が考えられる。
53	貝洲	かいず	八代市・由来は、かつてこの一帯が海に面した低湿地で「洲（す）」＝砂洲や洲浜のような地形であり、貝類が多く見られた事から「貝の多い洲」を意味して名付けられたと思われる地形由来の地名です。
	飯り坂	かえりざか	八代市・由来は、旧坂のため人や馬が途中で引き返した事から「帰る坂」や「引き返す坂」の意味で名付けられた地名です。
55	柿之生	かきのはえ	八代市・由来は、「柿の木が多く生えた土地」など柿の木に由来する可能性が高い地名と思われる。
56	砦原	かきはら	八代市・由来は、砂質の高洲で牡蠣殻（かきがら）の多い地域である事による地名の由来と思われる。
57	久多良木	きゅうたらぎ	八代市・由来は、中世文書に見える「多良木村（たらきむら）」に由来する古い地名で、鎌倉時代にはすでに相良氏の拠点として記録されている歴史的な地名です。語源は、「多くの良い木がある土地」です。
58	久連子	くれこ	八代市・由来は、平家落人伝説に基づき、壇之浦で敗れた平清盛らが各地を転々とした末に五家荘一帯へ落ち延び、その移住先の一つとして形成された山中の隠里である事に由来する地名。
59	枳之俣	くすのまた	八代市・由来は、字義から推測する「谷や川が分かれる俣の地形」と古い音写や当て字による可能性が高いと思われる。
60	梅檀	せんだん	八代市・由来は、香木として知られる樹木の「センダン」や「白檀」を指す漢語の「梅檀」に由来し、その木が多く自生した場所や滝・川などの景観と結びついて名付けられたと思われます。特に球磨川や笹越川にかかる「梅檀轟（せんだんとどろき）の滝」など、周辺の自然景観と一体となった呼称とし用いられている。
61	鼠蔵	そぞう	八代市・由来については不明。
62	鶴喰	つるばみ	八代市・由来ははっきりしませんが、鶴の姿や水辺や入り江を表す古語「つる」と関係する可能性が指摘される地名。
63	原女木	はらめき	八代市・由来は、「原（はら＝平坦地）」と女性を表す「女」と樹木が結びついたと思われるものの、確定的な説は不明。

64	豊原	ぶいわら	八代市・由来は、一般に「豊かな実りのある原」や「肥沃な畑地の広がる原」という意味を持つ地名と思われる。
65	催合	もやい	八代市・由来は、人々が集まり協力する「もやい」の精神に由来すると言われる。九州では「もやい＝助け合い」の意味を持ち、地名として使われる。
66	葭牟田	よしむた	八代市・由来は、「葭（ヨシ＝アシ）が生い茂る湿地や沼地」を意味する「ムタ（牟田・無田）」と組み合わせさせた、湿地由来の地名。
67	鹿路	ろくろ	八代市・由来は、古くからこの地が良質は木材の山地で、鼓の胴などを作るも木地師（轆轤職人（ろくろ職人）が多く住んだ事に由来するという説が有力です。「鹿」の漢字が当てられていますが「鹿の通り道」という意味ではないようです。
68	筌場	うけば	人吉市・由来は、川や池で魚を獲る仕掛け「筌（うけ）」を設けた場所＝「筌のある場所や筌を並べた場所」を意味する水辺由来の地名と思われる。
69	瓜生田	うりゅうだ	人吉市・由来は、一般的には「瓜が良く生える田あるいは土地」という自然地形や農作物に由来する地名と解釈できる。
70	大畑	おこば	人吉市・由来は、焼畑を意味する「畑（はた/こば）」に由来し、「大規模な焼畑が行われた場所」を表すとされている。戦国期から見える古い地名で「小畑」とも書かれ、周囲一帯の高原に広い畑地が点在する景観とも結びついている。
71	鹿目	かなめ	人吉市・由来は、近くの名瀑「鹿目の滝」にちなみ「鹿が集まる・鹿の目のような地形」を表すと考えられている。
72	蟹作	がんつくり	人吉市・由来は、「蟹迫（かにさこ）」とも書かれ、谷あいの窪地に水が集まり、蟹が多く生息した湿地状の地形を表す地名と思われる。
73	小縄川	こさでがわ	人吉市・由来は、掬い取る漁具の一つである小網（さで）に由来する
74	二日町	にのまち	人吉市・由来は、人吉城下に計画的に整備された町人町の一つで、周辺の五日町や九日町などと同様に、月の「二日」に立つ市や日付にちなむ地名です。
75	馬氷川	まごうりがわ	人吉市・由来は、「馬の水飲み場」を意味する地名とみなす説が有力と思われる。
76	海行原	かいごばる	荒尾市・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると「海への往来に関わる原野」と意味の地名と思われる。
77	肥猪	こえい	荒尾市・由来は、古くは「肥井」や「声井」などと書かれた湧水地名が転じたと見られ「肥えた土地や水」を意味する井戸や泉に由来する地名とされる。現在は「肥猪」や「肥猪中町」などの小字で残る地名
78	桑田	しときでん	荒尾市・由来は、四角に区切った耕地（田）を描いたものという意味の地と思われる。
79	聖人原	しょうにんばる	荒尾市・由来は、「聖人（しょうにん）や聖なる人に関わる寺社や墓地があった原野を指す宗教的な由来を持つ地名と思われる。
80	頭石	かぐめいし	水俣市・由来は、阿蘇神社の祭神「健甕龍命（たけいわたつのもこ

		かぶといし	と)」が矢を射る稽古をした際に「的」となった岩に由来する伝承地名とされている。
81	宝川内	ほうかわうち	水俣市・由来は、「宝川（ほうがわ）という川（または谷）」と、その流域の「内―谷あいや奥まった所」を合わせた地形由来の地名と思われる。
82	招川内	まんば	水俣市・由来は、川の内側に開けた土地を意味する「河内」に、川を呼び込むや招き入れるというイメージを重ねた地名と思われ、川沿いの水利用を反映した名称と解釈される。
83	湯出	ゆで	水俣市・由来は、「湯ノ津留川（湯出川）に温泉が湧き出していた事に由来する地名」で「湯が出る場所」を意味する地名と思われる。
84	小天	おあま	玉名市・由来は、かつての村名「小天」と「玉水」を合わせて作られた町名「天水」の一部であり、「小天」は金峰山系三ノ岳に祀られた蔵王権現に由来する山名から転じた地名という。
85	亀頭迫	きとうさこ	玉名市・由来は、推測ですが「亀の頭のように突き出た丘（岩）のふもとの谷」という意味の地形由来の地名と思われる
86	実山	げんやま	玉名市・由来は、字義からの推測ですが「実りの多い山」や「作物がよく実る山」という地味の地名と思われる。
87	岱明	たいめい	玉名市・由来は、有明海に面した低地「岱＝低い台地や野」と、そこに昇る朝日（明）をイメージして昭和期に作られた合成地名とされ、「低い野が明るく開けた土地」という意味合いを持つ。
88	繁根木	はねぎ	玉名市・由来は、「繁った根のある木（根が良く張った木）が多い土地」を意味する語から生じたと思われ、古くから自然地形や植生を反映した地名とされる。
89	両迫間	りょうはざま	玉名市・由来は、二つの「迫間（はざま＝狭い谷や川の間）に挟まれた土地を意味する地形由来の地名と思われる。
90	方保田	かとうだ	山鹿市・由来は、中世にこの地を本拠とした菊池氏庶流「方保田氏」の名字に由来する地名という。他に地形や田地の特徴を表す「方」「保」「田」の字をあてた説もあるが、確実なのは中世城館「方保田城」と在地武士団の名との結びつきです。
91	酒造野	すぞの	山鹿市・由来は、酒造りに関わる人々が住んだや酒造業が営まれた野（平地や原野）に由来する地名と思われる。
92	平小城	ひらおぎ	山鹿市・由来は、平山と小群・城を合われた地名。
93	日置	へき	山鹿市・由来は、古代の職業集団「日置部（ひおきべ/日奉部）」がこの地に移住・関与した事に由来する地名と思われる。
94	台	うてな	菊池市・由来は、川沿いの低湿地より一段高くなった洪積台地や段丘上の土地を指す地形由来の名称とされ、崖上の平坦地や扇状地の縁辺部などを表す。
95	生味	おおみ	菊池市・由来については不明。
96	尾足	おたる	菊池市・由来については、川沿いの谷の奥まった地形を表す「尾」や「端」を意味する語と。川の流れや水際を表す「足（あし）」が結び

			ついた地名と思われ、谷の奥に開けた水田地帯を指す地形由来の地名と思われる。
97	神来	おとど	菊池市・由来は、集落にある「神来貴船神社」から地名になったという説がある。菊池一族初代の菊池則隆が京都から貴船神社を勧請した際に、「神の降り来せし地とせん」という意思を社名に籠め、「神来」を冠したという説があるとの言い伝えがある。
98	虎口	こく	菊池市・由来は、中世以来の村名「虎口村（こくむら）」に由来し、城郭用語の虎口（とらぐち）＝城の出入り口や防御拠点にちなむ名称と思え荒れる。
99	木庭	こば	菊池市・由来は、戦国時代にはすでに見える古い村名で、周囲の山林と谷あいの「木の多い庭（平坦地）」を指す地形由来の地名。
100	泗水	しすい	菊池市・由来は、中国の山東省の泗水県（孔子誕生の地）にちなんで昭和期に命名された地名。
101	戸豊水	とりゅうず	菊池市・由来は、「戸（と）」＝集落や家々のまとまり、「豊水（とよみず/とよすい）」＝水が豊かな土地。という一般的な地名語から「水の豊かな集落（谷筋）の地」を表す地名と思われる。
102	日生野	ひおの・ひよの	菊池市・由来ははっきりしませんが、「日当りの良い野」や「日が差す野」などの意味を持つ合成語と思われる。
103	女鞍	めくら	菊池市・地名は確認できないが、誤記や聞き間違いの可能性はある。
104	夜間	やけ	菊池市・地名は確認できないが、誤記や聞き間違いの可能性はある。
105	隈府	わいふ	菊池市・由来は、本来は「くまふ」と読まれたが、熊本城下の「隈本（熊本）」同じく「くまもと／くまふ」と読まれるようになった為、区別のために読みを変えて「わいふ」としたという。地名字体の「隈」は川の曲がりや奥まった地形を表す古い地形語に由来する。
106	鯨鰐	あんこう	宇土市・国内にこの地名は見当たらない。
107	網田	おうだ	宇土市・由来は、古くは条里制の「網田里」に由来し、海辺の低地を開発した水田地帯の地名がそのまま残ったと思われる。
108	神合	こうあい	宇土市・由来は、安濃川と滝川が合流する堆積地に新しく開かれた村で、周辺の神社信仰と川の「合流（あい）」を反映した地名。
109	古保里	こおざと	宇土市・由来は、縄文時代の古保里塚に由来する地名で、「古い堀」と「小さな堀」など地形を表す語から転じたと思われる。貝塚を含む低丘陵地と「堀」を意味する古語に基づく説が有力です。
110	三拾町	さじっちょう	宇土市・由来は、「三十町」と書かれた古い地名表記が江戸期から明治期に残り、三十区画ほどの町場や耕地をまとめた呼称が由来と思われる。
111	築籠	ついごめ	宇土市・由来ははっきりしませんが、「築いた堤防や囲い（築）＋水をせき止めて籠らせた土地（籠）」と解釈される可能性が高いが、確定的な説とは言えない。
112	教良木	きょうらぎ	上天草市・由来は、「清ら木（きよらぎ）」が転訛したものと伝えられ清らかな霊木や名木に由来する地名と思われる。

113	鯨ヶ浦	このしがうら	上天草市・由来は、沿岸でよく獲れる魚「鯨（このしろ）」に由来すると思われ、鯨の豊かな漁場であった浦を示す地名と思われる。
114	賤之女	しずのめ	上天草市・由来は、「賤（身分の低い）」＋「女」を意味する古語から来たと推測される地名ですが、語源は不明。
115	蔵々瀬戸	ぞぞくら	上天草市・由来は、「蔵々」は近くの千束蔵々島などの島名に由来し「瀬戸」は島と島間の海峡や水道を指す一般的な名詞と思われる。確定的な語源説は見当たらず、古い島名や小字名から派生した地名と思われる。
116	長砂連	ながされ	上天草市・由来は、「長く続く砂浜（砂州）が連なった地形」に由来すると思われる。
117	夏唐	なとかろ	上天草市・由来は、語源は不明ですが、「夏（季節名）」と「唐（外来や唐物）」に由来する複合地名、あるいは人名や屋号に由来する可能性が高いと思われる。
118	二弁当	にべんとう	上天草市・由来は、田植えなどの農作業の際に一日に二度（朝と昼、また昼と夕方）弁当を取るほど作業が長時間に及んだことから、その様子を表して名付けられたとされる説が一般的由来です。
119	女鹿串	めがのくし	上天草市・由来は、「女鹿」はシカ（鹿）が多く見られる土地、「串」は岬状にお突き出た地形を指すと思われ、「鹿のいる岬状の土地」を意味する地名と思われる。
120	宇城	うき	宇城市・由来は、古くは宇土市や宇土郡と下益城郡一帯を指して呼ばれてきた広域名称「宇城（うき）」をそのまま新市名・地域名に採用したものとされる。
121	永尾	えいのお	宇城市・由来は、海の神と海童神が巨大なエイの背に乗って現れ。そのエイの尾の形をした岬にちなみ「永尾」と呼ばれるようになったと伝えられる。永尾神社（永尾劔神社）がその「エイの尾」にあたる場所に鎮座する事から、別名「劔神社」とも呼ばれる。
122	楫屋林	かじやばし	宇城市・由来は、「楫（かじ＝船のかじ）」や「鍛冶」「梶」などの職能や地形に由来する一般的な地名形成パターンからの推測です。
123	河江	ごうのえ	宇城市・由来は、「川（河）」の入り江や河岸の地形を表す語に由来すると思われ、古くは「河会」とも書かれた川の合流や湾曲部を示す地名と思われる。
124	古保山	こおやま	宇城市・由来は、古代から中世にかけて存在した「古保山荘」や寺院・郡寺跡などに由来し、「古い時代からの保護や支配された山地一帯（荘園や寺領を含む地域）」を指す地名と思われる。
125	不知火	しらぬい	宇城市・由来は、八代海に現れる怪火「不知火」現象と、それをめぐる景行天皇の伝承に由来するとされる。会場に無数の火が揺らめく様子を「誰も知らない火」と呼んだことから、この地名となった。
126	松橋	まつばせ	宇城市・由来は、「松の生えた場所に架かる橋」あるいは、「松原に通じる橋」に由来するとされ、古くから交通の要衝だった地域です。
127	舞鷲	まいしぎ	宇城市・由来は、由来ははっきりしませんが、「鷲（しぎ）」がよく舞

			来る事から付いた地名と推測される。
128	嫩迫	わなんざこ	宇城市・由来は、昔この地に一軒家があって息子に嫁をもらったが、外からも女を世話するものがあってお祝いの最中に七人白装束が躍り込み、皿を打ち破ってしまったので、この家を嫩（わなり）と呼ぶことからこの地名となった。
129	小池	こうじ	阿蘇市・由来は、周囲より低い窪地に湧水や小さな池があった土地を指した自然地形由来の地名と思われる。熊本県には旧「小池村」が複数あり、いずれも台地周辺や湧水・池の多い地域に位置する。
130	竹原	たかわれ	阿蘇市・由来は、周辺に竹が多く生えていた「竹の原（竹の生い茂る原野）」を意味する地形由来の名称と思われる。
131	役犬原	やくいんばる	阿蘇市・由来は、古くは阿蘇一帯の「牧（まき）」を管理する役人が、牧で使う犬を連れて通った「役人と犬の原（はら）」に由来する説がよく紹介される。湧水地を含む牧場地帯であった歴史と結びつけた民間語源的な解釈と思われる。
132	嵐口	あらくち	天草市・由来は、強い風浪が吹き込みやすい海辺の入り口（湾口）を意味する自然地形に由来する地名と思われる。
133	軍ヶ浦	いくさがうら	天草市・由来は、中世に「いくさ（軍）」と関わる出来事があった海辺や浦である事から名付けられたとする説が有力です、
134	大通越	うとし	天草市・由来は、山中を「通し越す」主要な峠道＝大きな通り道である事から「大通（おおとうし）の越え」と呼ばれるようになったと思われる。
135	魚貫	おにき	天草市・由来は、「魚が貫くほど多く獲れた」や「魚を貫いて引き上げるほど豊漁だった」という漁村らしいイメージから生まれたとする説と、難破船から流れ着いた魚を住民が救った事や分け合ったという伝承に由来する説の二つがよく紹介されるが、確定説ではない。
136	家来栄	かくえ	天草市・由来は、中世から近世にこの地に住んでいた家臣層（家来）と、田畑がよく実る「栄える土地」であった事を合わせて合成地名と思われ、武家家臣団の集住地や開発地であった事を示す地名。
137	椈木	かばのき	天草市・由来は、「椈（もみじ）＋木」という字義から「カエデ・モミジ類の木が多い場所」を指す自然地名と見るのが正解と思われる
138	須子	すじ	天草市・由来は、「洲処（すどころ）」＝砂州や洲がある場所を意味する語が転じたものとされる説が有力です。海岸の地形を表す言葉がのちに「須子」という表記で定着したと思われる。
139	鉾	とがり	天草市・由来は、一般に古代の武器である「鉾（ほこ）」を祭祀に用いた事や、鉾を模った地形や岬・丘などに由来する地名です。
140	栢宇土	はじうと	天草市・由来は、周辺に櫨（はぜ）の大木が多く生えていた事に由来すると思われる。
141	鬢掃除	びんそうじ	天草市・由来は、断定できませんが、海に面した急斜面地形から「崖の縁＝鬢」や「削り落とす＝掃除」に見立てた比喩的な地名です。
142	福連木	ふくれぎ	天草市・由来は、古くは「福来木」や「福連城」などと書かれ、豊か

			な木材資源と山の神への信仰から「福を連れてくる木や山」といった意味合いで理解されてきたと思われる。
143	合志	ごうし	合志市・由来は、古代から続く「合志郡（かわし/かはし）」に由来し、和銅6年（713年）の「好字令」により「合志」と表記され定着したと思われる。
144	竹迫	たかば	合志市・由来は、竹の生えた狭い谷や窪地（竹の迫＝たけのさこ）を意味する地形語に由来し、そこの本拠とした竹迫氏の頃から在町として発展した事から定着した地名となった。
145	上生	わぶ	合志市・由来は、中世には「和武」や「和生」などと書かれた古い郷名が変化したもので、合志郡内の一村名として成立し、のちに菊池郡上生村となった歴史的地名と思われる。
146	庵室	あぜつ	下益城郡・由来は、もともと「僧や隠者の小さな庵（いおり）を指す語であり、旧村名の小字「庵室村」も山間部に僧侶などの庵が置かれた事からこの地形や性格を表して名付けられたと思われる。
147	勢井	ぜい	下益城郡・由来は推測ですが、「水の勢いの強い井戸や湧き水」など水の性質を表した地名ある可能性があると思われる。
148	峠原	そばはら	下益城郡・由来は、一般的には「峠（山道の頂上付近）」に続く「原（はら/ばる＝台地状の平坦地）」という地形を表した地名です。
149	土喰	つちばみ	下益城郡・由来は、土質や地形や農耕に関わる「土を食う・削る」などの民間語源が由来と思われる。
150	砥用	ともち	下益城郡・由来は、平安時代の文献に見える「富神郷（とむちのさと）」が起こりで、「と」は山、「むち」は神を意味し、「山と神の郷」や「山神の郷」を表すと伝えられる。
151	洞岳	ほらおか	下益城郡・由来は、「洞＝谷」を意味し「谷の源頭にある山（岳）」という地形的特徴を表したものとされるのが有力です。命名の経緯は残っておらず、谷地形と山の位置関係から付いた自然発生的な地名。
152	土生野	はぶの	玉名郡・由来は、一般的には「土がよく生きる（肥えた土地）の野」や「土生（はぶ）姓・土生良い字小字」に由来する可能性が高い。
153	肥猪	こえい	玉名郡・由来は、古くは「肥井」や「声井」などと書かれた湧水地名が転じたとみられ、「肥えた土地や水」を意味する井戸や泉に由来する地名とされる。
154	腹赤	はらか	玉名郡・由来は、古代にこの地で獲れた「腹赤」という魚（ニベ＝イシモチ類）を朝廷へ献上していた事に由来する。景行天皇の巡行伝承や「肥後国封土記」や「延喜式」などに由来が見られる。
155	皆行原	かいこうばる	玉名郡・由来ははっきりしませんが、字義から推測で「みんなが行きかう原野」や「人々が通行する原（はら／ばる）」といった交通や集落の場を表す民間語源的な地名と思われる。
156	馬門	まかど	玉名郡・由来は、古代の駅家（うまや）や関所に由来する「馬の出入り口（馬の門）」を意味する地名と思われる。豊前街道沿いの交通の要衝で、馬の乗り換えや通行管理の場であった歴史が背景にある。

157	和水	なごみ	玉名郡・由来は、旧「三加和町」の「和」と旧「菊水町」の「水」を合わせた合成地名で、「人と自然が和む水の町」という意味合いも込めて命名されたという。
158	平平	ひらだいら	玉名郡・由来ははっきりしませんが、「平ら土地が重なるまたは続く」という意味合いか、また、平氏ゆかりの伝承を持つ集落名が多くあり、「平」を含む姓や屋号から地名化したとも考えられる。
159	蜻浦	へぼうら	玉名郡・由来ははっきりしませんが、「蜻（へぼ）は昆虫のトンボを表す漢字で、「浦」は「海や湖・川の入り江や水辺の低地」を指す地形語から推測すると、「トンボが自生している水辺」という意味の地名と思われる。
160	用木	もといぎ	玉名郡・由来ははっきりしませんが、特定の神社や施設で使う木を伐り出した場所ではないかと推測される地名。
161	焼米	やいごめ	玉名郡・由来は、古くからこの地で「焼米（炒った米）が作られたり出土した事に由来する地名。
162	御願所	ごがんしょ	菊池郡・由来は、一般に神仏への祈願や供養を行った場所（祈願所や御願場）であった事に由来する地名と思われる。
163	吹田	ふけた	菊池郡・由来は、低湿地で水が湧き出る田を意味する「吹き出す田」や『噴き出す田』が語源とされる説が有力です。
164	真木	まき	菊池郡・由来は、「薪になるまっすぐな木（真木）」が多く生えた場所を示す古い語に由来する地名と思われる。姓の「真木」もこの地に由来する一族があり、戦国期にはすでに地名として記録されている。
165	古閑原	こがばる	菊池郡・由来は、「古閑（こが＝古いや静かな土地）」＋「原（はら/ばる）＝台地状の原野」を合わせ、「静かな原野や古くからの原」を意味する地形由来の地名と思われる。
166	津久礼	つくれ	菊池郡・由来は、白川沿いの「津（港や渡し場）」と川の湾曲部などを指す古語（くれ（久礼や曲がり・暗がり））が結びついた、水辺の」地形に由来する地名と思われる。
167	曲手	まがて	菊池郡・由来は、江戸時代から見られる「曲手村」に由来し、「曲がった手（道や地形）」のような屈曲した地形や道筋を表すと思われる
168	薊原	あざみはら	阿蘇郡・由来は、薊（あざみ）の多い原野といった自然地形由来の地名と思われる
169	菰田	こもた	阿蘇郡・由来は、「菰（こも）が生える田」や「菰に縁のある田」と意味の地名。「菰（こも：マコモなどの草）はイネ科の水生植物。
170	城尾	じょうのう	阿蘇郡・由来は、中世の城郭や城跡の「尾根や尾根筋」に由来する地形系地名と思われる。
171	動馬木	どうめき	阿蘇郡・この地名は、公的資料や地名辞典では確認出来ない。
172	中原	なかばる	阿蘇郡・由来は、「村や集落の中央部に広がる原野や平坦地」を意味する地形由来の地名と思われる。
173	仁連	にれ	阿蘇郡・由来ははっきりしませんが、「仁」「連」はともに人名や仏教語や美称などに使われる漢字で、開基者や有力者の名か寺院や塔に関

			係する地名と思われる。
174	山亥	はげ	阿蘇郡・由来は、「山の中にある亥（イノシシ）に関わる場所」や「山裾のイノシシが多い谷や斜面」を意味する民間語源的な地名である可能性が高いと思われる。
175	土田滝	はんだたき	阿蘇郡・由来は、周辺の旧地名「土田（つちだ）」と、水田開発に関わる「土」と「田」を合わせた地名形成とその地を流れる「杖立川」本流にある落差23mの滝が「土田滝」と表記され、それは地名となったと思われる。
176	草部	くさかべ	阿蘇郡・由来は、阿蘇神話に登場する草部吉見神社の宮居の「壁を草で葺いた」事から「草部（くさかべ）」と呼ばれるようになったと伝えられる。
178	洗川	そそぎがわ	阿蘇郡・由来は、祭神である健甕龍命（たけいわたつのみこと）が旅の着物を濯（すす）いだとい伝承とから洗川の地名が付いたという。
179	水湛	みずたまり	阿蘇郡・由来は、字義から推測すると「水に堪える土地」や「水害に堪える場所」といった意味の地名と思われる。
180	風当	かざて	阿蘇郡・由来は、本来「風あて（かざあて）」と呼ばれた「風当たりの強い場所」を意味する地名が、方言音変化で「あ」が脱落して「かざて」となったものと思われる。
181	榴尾	すくのお	阿蘇郡・この地名は公的資料や地名辞典からは見当たらない。
182	座女木	ざめぎ	上益城郡・由来については不明。
183	粒麦	つぶむぎ	上益城郡・由来は、古くから麦作が盛んな土地であった事を示す「麦」に、細かな区画や小さな田畑を意味する「粒（つぶ）」が結びついた農業起源の地名と考えられる。
184	八勢	やせ	上益城郡・由来は、一般的には「八つの瀬（浅瀬や急流）」など、水辺の瀬が多い地形に由来する地名と解釈される可能性が高い地名。
185	蓍町	じとまち めどまち	上益城郡・由来ははっきりしませんが、少なくとも江戸初期の文書に「蓍町村」と見える文書が見える。
186	小谷	こやつ	上益城郡・由来は、中世にこの地を本拠とした「小谷氏」の居城があったこと、その一族の名字に由来して村名となったと追われる。
187	蛭子	よこ えびす	上益城郡・由来は、多くは「恵比須（蛭子）神」を祀る社や堂に由来し、漁業や海上安全・商売繁盛の信仰と結びつけた地名と考えられる
188	寒野	さまの	上益城郡・由来は、中世から見える「寒野」という古い地名がそのまま継承されたもので、「寒い野原」の意味とみられる。
189	九折	つづらおり	上益城郡・由来は、急峻な山道や谷筋が何度も折れ曲がる「つづら折り」の地形に由来すると思われる。一般に「九折」は曲がりくねった坂道や峠道を指す語であり、県内の九折集落も同様の地形的特徴から名付けられた地名と思われる。
190	都々良	つづら	上益城郡・由来は、「つづら折れの道や曲がりくねった谷や川の形」など地形を表す語に由来する地名と思われます。
191	鶴ヶ田	つるけた	上益城郡・由来は、明治8年に旧「鶴底村」と「仁田尾村」「牛瀬

			村」が合併して成立した村名で「鶴底」の「鶴」と周辺の田地を合わせた合成地名と思われる。一般には「鶴の多い湿田や谷地」にちなむ地名と思われる。
192	目射	めいらるめさし	上益城郡・由来は、山の斜面から谷へ向けて「目が射す（見通しが利く）」ような地形を表した地名とする説が有力で、古くは山の尾根筋から見下ろす視界の良さを示す言葉に由来する。
193	梶	かこい	八代郡・由来は、川に閘（せき）を設けて水をせき止めた場所や、武家屋敷の「クワキ（囲い）」に由来する地名とされる説が有力です いずれも「囲うやせき止める」という意味合いから生じた地名。
194	葦北	あしきた	葦北郡・古くは「日本書紀」に見える港名「葦北津（あしきたのつ）や郡名「葦北郡」に由来し、葦の多い海辺や入り江を意味する古い地名と思われる。
195	簸瀬	えびらせ	葦北郡・由来は、川の流れの早い部分の地形に由来する地名。
196	碓瀬	かきぜ	葦北郡・由来は、「碓」はカキ（貝）や岩礁を表す字で、「瀬」は浅く流れの早い場所を指す意味です。まとめると「川の浅瀬に牡蠣殻や岩礁が多い場所」という意味の自然地形由来の地名と思われる。
197	合串	えごし	葦北郡・由来は不明ですが、「合志」などの誤記や聞き間違いか。
198	大泊	おおど	葦北郡・由来は、景行天皇がこの地の港に船を「大きく泊めた」事に由来する港名とされ、「大きな泊り場（港）」を意味する地形や歴史由来の地名と思われる。
199	搦手	からめて	葦北郡・由来は、城郭や砦の「搦手＝裏門や裏側の出入口」に由来し城の背後側や脇道側に位置した場所を示す場所を示す地名と思われる 多くは、城の正面「大手」に対する裏側の道・門・集落の名称。
200	川内	かわち	葦北郡・由来は、多くが「川の内側（川の湾曲部や支流に囲まれた内側の土地）」を意味する地形由来の名称と思われる。
201	一武	いちぶ	球磨郡・由来は、「一武村」という村名において明確な由来は分かりませんが、「武」とある所から寛永年間当地で武を持って名を成した丸目蔵人在居時から呼ばれていた地名という。
202	木上	きのえ	球磨郡・由来は、周囲に多く自生していた木々の「木」と川沿いのやや高い位置に示す「上」が合わさり、「木の多い高まりの土地」を意味する地形由来の地名と思われる。
203	中福良	なかふくら	球磨郡・由来は、「福良」は「福に恵まれた土地」といった吉祥的な意味を持つ地名で、地区の中ほどにある地域から「中福良」となったと思われる。
204	浜川	はまごう	球磨郡・由来は、「浜（川の河口や水辺）」と「川」が結びついた、水辺の集落や河口付近を示す自然地形由来の地名と思われる。
205	本別府	もとんびゅう	球磨郡・由来は、荘園時代の免符「別府（べっふ）」に由来する地名が変化し、中心となる集落を示す「本」が付いたものと思われる。
206	思川	おめぐう	球磨郡・由来は、伝説によると豊穡を祈る農民たちが、祭った水の女神の「田心姫（たごりひめのみこと）」の「田心」の二字がちじまっ

			たものと言われている。
207	才松内	さいごうち	球磨郡・由来については不明ですが、この地域に「才松」という苗字の方が多く住んでいることから、「才松一族」が「支配していた土地の内側ではないかと思われるが、確定ではない。
208	多良木	たらき	球磨郡・由来は、古くは「多良」や「古多良」などと記される地名に由来し、鎌倉時代にはすでに見える古い地名で、相良氏の本拠地の一つとして発達したとされる。ただし「多良木」自体の意味は不明。
209	茗の木	ちしゃのき	球磨郡・由来は、「茶の木（茶の若芽＝茗）」が多く生えた場所、あるいは茶の木に関わる土地柄を反映した地名と思われる。
210	浜川	はもごう	球磨郡・由来は、「浜（川の河口や水辺）」と「川」が結びついた、水辺の集落や河口付近を示す自然地形由来の地名と思われる。
211	小川内	おごうち	球磨郡・由来は、「小さな川の内側（谷あいや川沿いの奥まった土地）」を意味する自然地形由来の集落地名と思われる。
212	朴ノ木原	ふうのきはら	球磨郡・由来は、「朴（ほお）の木」が多く生えていた原野（はら）を指す自然地形由来と思われる。朴の木はモクレン科の樹木。
213	古川	ふるこう	球磨郡・由来は、かつてこの一帯は坪井川の旧川道や沼地沢であった事から「古い川筋」を意味して名付けられた地名と思われる。現在の川の流れが付け替えられる前の川底や湿地の地形を反映した地名。
214	相良	さがら	球磨郡・由来は、中世にこの地を支配した相良氏の名字に由来する説と、「坂の下の原野を意味する古い自然地名「さかはら」が転訛したとする説がある。一般的には「相良氏」説が由来とされている。
215	深水	ふかみ	球磨郡・由来は、川辺川沿いの段丘上に広がる「深水原」と呼ばれる土地を豊かな湧水や河川に由来する地名で、中世から見える「深水村」の名が近世以降も継承されたもの。
216	出ル羽	いずるは	球磨郡・由来は、川筋から張り出した山の尾根（＝羽のように突き出た地形）を指す古い地形語が由来と思われ、山の「出っ張り」を意味する地名と思われる。
217	鴛山	おしやま	球磨郡・由来は、水鶏の「おしどり」に由来し、水辺に集うおしどりにちなむ山名と思われる。
218	合戦峯	かしのみね	球磨郡・由来は、中世から近世にかけてこの地一帯が合戦の舞台になった事に由来すると思われ、「合戦があった峯（山）」を意味する地名と思われる。
219	金川	かなごう	球磨郡・由来は、近世になって消滅した地名ですが、由来は字義から推測すると「金属鉱床や砂金採取地の流れる川辺の集落と思われる。
220	築切	ちいきり	球磨郡・由来は、山腹を切り開いて段々畑や道を築いた「築（きず）き」と、山の斜面を切り取った「切り（きり）」という地形や開墾行為を表す語が合わさったものと思われ。急斜面地を人為的に整形した場所を示す地名と思われる。
221	九折瀬	つづらせ	球磨郡・由来は、急峻な山あいだで川や道が幾重にも折れ曲る「九折（つづらおり）」の地形と、瀬（浅瀬や早瀬）の多い川の様子を合わ

			せた地名と思われる。
222	土会平	つてひら	球磨郡・由来は、「土会平」姓の発祥地とされる山間の小集落の地名で、地形や古い土地利用に由来する地名と思われる。
223	筌野	うけの	球磨郡・由来は、川で魚を獲る道具「筌（うけ）」を仕掛けた場所にある野原＝筌の野」が語源で、「筌野」と表記されるようになった。
224	沢水	そうみ	球磨郡・由来は、山間の谷筋に湧き出る水や湿地状の土地を指す「沢」と湧水や流水を意味する「水」が重なった、地形や水環境に由来する地名と思われる。
225	戊	ぼ	球磨郡・由来は不明で、「戊」という地名も見当たりませんが、「戊」は十千の一つで、地名では「甲・乙・丙・丁・戊・・・」のように、区画や耕地の番号や方角に補助記号として使われた事があるので、登記上の小字として残っているのかも知れない。
226	万江	まえ	球磨郡・由来は、「万（多くの）」と「江（川や入り江）」を合わせた水辺の地形を表す地名で、万江川流域の集落を指す地名として中世から近世に成立したと思われる。
227	楮木	かじき	球磨郡・由来は、和紙の原料となる樹木「楮（こうぞ）」が多く生えていた土地を示す地名と思われ、「楮の木のある場所」から「楮木」となったと思われる。
228	球磨	くま	球磨郡・由来は、球磨川の名に由来し、「クマ」は川の大きな曲がり（曲流）または「隈」に通じる奥まった土地を意味するという説が力です。飛鳥時代には、「熊県」と書かれ、「和名抄」以降「球磨」の表記が見られるようになった。
229	杣鼻山	そのはなやま	球磨郡・由来は、「杣」は木材を伐り出す山林、「鼻」は山の突き出た部分を指し、木材伐採の行われた山の突端という地形や利用形態に由来する地名と思われる。
230	多武除	たぶのき	球磨郡・由来は推測ですが、多くは「多武（たぶ）姓との関係」や「武を除くや防ぐ」といった字義から推測される地名。
231	向淋	むこうそそぎ	球磨郡・由来は、「淋（そそぎ）」という元の集落や小字の対岸に出来た集落を指す地名としての解釈と思われる。
232	円八重	えんばい	球磨郡・由来は、推測ですが「円形に囲まれた谷や盆地が、山ひだの重なる地形の中にある場所」という情景から付いたか、あるいは、古い屋号や寺社名など「円（園・苑）」があり、その周辺の山ひだの多い一帯を「八重」と読んだ結果複合して定着したとも考えられる。
233	神殿原	こうどんばる	球磨郡・由来は、あさぎり町の台地状の原野を指す地名で、もとは広大な原野を意味する「原（はら/ばる）」に近世以降の開墾や農場や飛行場設置により「神殿（こうどん）」と呼ばれた地区名が合わさって成立した地名と思われる。
234	築地	ついじ	球磨郡・由来は、川や海に面した低湿地を土盛りして造成された土地＝「築いた土地（築地）」を意味する一般的な地形由来の地名。
236	柳別府	やなぎのびゅう	球磨郡・由来は、「柳が多く生える湿地や湧水池（別府）」という地形

			的特徴から名付けられたとされる地名で、「柳」と「別府（湧き出る所）」を組み合わせたものと思われる。
237	都呂々	とろろ	天草郡・由来は、古くは「トロロ」やトロロウラ」などと呼ばれた入江や湾状の地形名が語源とみられ、これが村名や大字名として定着したものと思われる。



国宝の熊本城



大分県



NO	地名	読み方	由 来
1	丹川	あかがわ	大分市・由来は、「丹」が赤土や朱色を意味し、赤みを帯びた土や水をたたえる川に由来する地名と思われる。
2	明磧	あけがわら	大分市・由来は、大分川の氾濫で運ばれた砂礫が堆積した「明るく開けた川原（砂礫地）」を意味する地形由来の地名と思われ、「明るい川原」が「明磧」と表記されるようになったとされる。
3	生石	いくし	大分市・由来は、「石が生きて血を流した」という伝承に由来する説が有力で、「生きた石」が「生石」と書かれたとされる。
4	荏隈	えのくま	大分市・由来は、古くはこの地で栽培された植物「荏（え）」と、地形を表す「隈（熊/入り江や曲がりくねった所）」に由来し、「荏の生える入り江やくぼ地」を意味する地名と思われる。

5	志生木	しゅうき	大分市・由来は、「生木（いきき/うぶき）」など生きた木や若木を意味する古語系の地名が転訛した可能性や、志を立てて開いた新田や集落を象徴する当て字とみる説など、幾つかの仮説がある。
6	鴛野	おしの	大分市・由来については確実な説は見当たりませんが、字義から推測すると「鴛（おしどり）にちなむ地名と思われる。
7	賀来	かく	大分市・由来は、中世にこの地を本拠としていた在地武士の「賀来氏」の名字に由来し、その本拠地一帯が「賀来庄」「賀来村」と呼ばれた事から現在の地名となった。
8	椎迫	しいざこ	大分市・由来は、「シイ（椎）の木が多い谷や迫（さこ）」という地形と植生に由来する説が有力です。
9	寒田	そうだ	大分市・由来は、もともと沢を意味する「沢（サワ）」と場所を表す「タ（処）」が結びついた「サワタ（沢田や沢の場所）」が音変化して「ソウタ/ソウダ」となり、現在の「寒田」の字が当てられたものと思われる。
10	高尾水分	たかおみくまり	大分市・由来は、背後の高い尾根「高尾」と水を司る神を祀る「水分（みくまり）神社・水分神」に由来する地名と思われる。古くから山の尾根筋と水源を守る信仰が結びついた場所地名です。
11	東院	とういん	大分市・由来は、中世に賀来荘の一部として成立した「東院村」に由来し、「荘園の東側に置かれた院（いん＝施設や領域）」を意味した地名が現在も残っているもの。
12	豊海	とよみ	大分市・由来は、大分川河口の埋立地として形成された港湾や工業エリアに、豊かな海に面した立地をイメージして「豊かな海＝豊海」と名付けられたと思われる。
13	那智榔	なちなぎ	大分市・この地名は見当たらず。誤記と思われる。
14	丹生	にゅう	大分市・由来は、この地域で朱（辰砂）＝水銀を多く産した事から「丹が生まれる土地」という意味から名付けられたとされ、「豊後国風土記」以来の古い由来を持つ地名。
15	端登	はたのぼり	大分市・由来は、川沿いの田の端唐山側へ登る地形を表す「端（はた）＋登（のぼり）」と解釈する説が有力です。
16	豊饒	ぶにょう	大分市・由来は、「豊かで実り多い土地」という意味の漢語「豊饒」に由来し、古くから肥沃な田畑が広がる地域であった事を示す地名
17	古国府	ふるごう	大分市・由来は、奈良から平安時代にこの一帯に置かれた豊後国の国府（こくふ＝地方政庁）がのちに移転したため、「古い国府のあった場所」という意味で、名付けられたと思われる。
18	戸次	へつぎ	大分市・由来は、中世にこの地に置かれた松園「戸次荘（へつぎのしょう）」の名に由来し、その荘園名が現在の地名として受け継がれたものと思われる。戸次荘は豊後国大分郡に属し、大野川中流域一帯を指した荘園。
19	戸保ノ木	へぼのき	大分市・大分県にこの地名が確認できない。
20	政所	まんどころ	大分市・由来は、中世以降に寺社や荘園・役所の事務機関「政所」が

			置かれた場所を指した呼び名が、そのまま地名化したもの。
2 1	御所峠	みせんとうげ みせんたお	大分市・由来は、中世以降にこの付近にあったとされる「御所（貴人の館や行在所）」に由来すると考えられ、「御所の峠」から「御所峠」と呼ばれるようになったと思われる。
2 2	廻栖野	めぐすの	大分市・由来は、近世に「廻洲村（めぐすむら）」と呼ばれた村名に由来し、その後に「廻栖」と表記され現在の「廻栖野」となったと思われる。
2 3	米良	めら	大分市・由来は、山間の焼畑農業地でもあったことら「焼畑地・産地」を意味する古語系統の地名と見られ、人名「米良姓」とも結びついた地名と思われる。
2 4	萌葱台	もえぎだい	大分市・由来は、「萌葱」は若い草の芽のような濃い黄緑色を指す伝統色の名から取り、周辺の緑豊かな環境イメージにちなんで付けられた地名と思われる。
2 5	柞原	ゆすはら	大分市・由来は、「柞（ははそ/くぬぎ）」という木が生い茂る原野や山地を意味する古語に由来し、「柞の原（ははそのはら）」が転じたものと思われる。特に柞原八幡宮周辺の森を指す地名として定着した
2 6	永興	りょうご	大分市・由来は、地域内にあった寺院「永興時（りょうごじ）」の名に由来する。
2 7	霊山	りょうぜん	大分市・由来は、古くは、山全体が仏教信仰の対象とされた「霊験あらたかな山」や「仏の山」である事に由来すると思われ、山腹の霊山寺の存在とも結びついた地名。
2 8	植田	わさだ	大分市・由来は、古代の行政区画「植田郷・植田庄」に由来し、「植えた田」や「早く植える田」といった意味を持つ田地の呼称から生まれた地名と思われる。現在の植田や東植田から野津原方面に広がる田園地帯を指す歴史的な地名が、現代の地区名として残ったもの。
2 9	内竈	うちかまど	別府市・由来は、海辺で塩を焼いたり魚を煮炊きした「竈（かまど）」があった入り江（内側の浜）を意味する地名と思われ、海岸の竈場を示す「竈」＋湾奥を示す（内）が合わさった名称とされる。
3 0	大所	おところ	別府市・由来は、「大きな所」や「広い場所」を意味する地形由来の地名と思われ、周辺の山間や谷筋の中で比較的開けた土地を指した呼称が地名化したと思われる。
3 1	乙原	おとばる	別府市・由来は、一般的には「乙（きのと）＋原（はら）」という古い方向や序数語と地形語を組み合わせた地名と思われる。
3 2	大畑	おばたけ	別府市・由来は、一般的には「大きな畑」や「広い畑」を意味する地形由来の地名と思われる。
3 3	鎗掛	かいかけ	別府市・由来は、字義から「鍵をかける場所」や「鍵のように出入りを制限する場所」というイメージや、参道の関所や峠・谷口など、出入りを制限したすい地形に由来する説などがある。
3 4	鉄輪	かんなわ	別府市・由来は、古くは「神和（かんなわ）」と書かれた「神の湯（霊験あらたかな湯）」を意味する名が、のちに当て字で「鉄輪」と表

			記されるようになったとする説が有力。
35	城島	きじま	別府市・由来は、「城（しろ）」に関連する地形や施設」と、川や海に囲まれた「島状の土地」を合わせた地名と見られ、城の近くの中州や微高地を指したと思われる。
	上人	しょうにん	別府市・由来は、鎌倉時代に別府や鉄輪の地獄地帯を開発したと伝わる一遍上人にちなむ名称とされる説が有力です。
37	鉾ノ掛	ちょんのかけ	別府市・由来は、山腹の崩壊地形が「鉾（おの）」で削りかけたように見える事から名付けられた地名と思われる。砂防事業の対象となる急峻な谷や崩壊地を指す局地名として使われた地名。
38	堂籠	どうごもり	別府市・由来ははっきりしませんが、字義から推測では「堂のある籠った谷・集落」や「堂のある囲まれた場所」といった地形・景観に由来した地名と思われる。
39	永石	ながし	別府市・由来は、弘法大師が老婆から水の施しを受けたお礼に地面の石を握って温泉を湧かせたという伝説から、「握石（にぎいし）」が「永石（ながいし）」へ転じたとされる説が有力です。
40	捏山	ねつやま	別府市・この地名は存在しないようです。
41	火売	ほのめ	別府市・由来は、鶴見岳の火山神を祀る「火男火売（ほのおほめの）神社」に由来し、火の神や火山信仰と結びついた地名と思われる。
42	明礬	みょうばん	別府市・由来は、江戸時代にこの地で硫黄ガスを利用して明礬（ミョウバン＝硫酸アルミニウムカリウムなどの総称）が露店製造された事に由来する地名です。
43	合馬	おうま	中津市・由来は、古代の駅制に伴う「駅馬（えきうま）」が集まる場所、あるいは谷が出会う「逢間（あいま）」のような地形に由来すると思われる。
44	大石峠	おしがと	中津市・由来は、一般的に「大きな岩（石）が目印となった峠」である事から「大石峠」と呼ばれるようになったという。
45	萱津町	かいづまち	中津市・由来は、中世にこの地を領した武士「萱津（かやつ/かいづ）」氏の「名」に由来し、その居館跡周辺が後に「萱津町」と呼ばれるようになったと思われる。
46	蛸瀬	かきぜ	中津市・由来は、海岸の干潟（瀬）に由来する地名で、もとは海辺の浅瀬や干潟を指した呼び名が村名や地名となったと思われる。
47	水主	かこ・みずし	中津市・由来は、推理を司る人や水の管理地を意味する語（水の主）に由来する可能性が高い地名と思われる。
48	冠石野	かぶしの	中津市・由来は、「冠のような形をした石のある野（野原）」という地形イメージに由来する地名と思われる。
49	闇無	くらなし	中津市・由来は、「闇（くらやみ）が無いほど明るく開けた土地」や「木が少ない見通しの良い場所」を意味する説が有力です。
50	定留	さだのみ	中津市・由来は、「人や物をとどめ置く場所」や「定着した集落」である事から生まれたとみられ、江戸期の村名「定留村」に由来する地名と思われる。

51	深水	ふこうず	中津市・由来は、一般的には「水深が深い場所」や「湧水や深い淵」を表す地形語から生じた地名と思われる。
52	秣	まくさ	中津市・由来は、家畜の飼料である草＝秣を採取や貯蔵した場所に由来する地名と思われる。多くの場合、古くは放牧や農耕が行われた草地や山裾・谷筋などに付けられた地名。
53	天瀬	あまがせ	日田市・由来は、「天ヶ瀬（天の川の瀬や天にかかる瀬）など水辺の瀬と神聖な「天」を結び付けた信仰的な呼称が転じたものと思われ、玖珠川沿いの温泉地形と結びついて定着した地名と思われる。
54	出羽	いずるは	日田市・由来は、古代の国名「出羽国（でわのくに）」や神社信仰（羽黒山・出羽三山信仰）に由来し、東北の出羽からの移住者・勧請社にちなむ地名と思われる。多くは出羽神社や羽黒神社などの鎮座と結びつき、東北との歴史的交流を反映した地名。
55	三春原	うらせばる	日田市・由来は、山高く谷深い地形で、梅や椿、桜などの花が早春から晩春まで咲き、年3回春が来る事によるものという意味の地名。
56	小鹿田	おんた	日田市・由来は、「小さな鹿の田」ではなく、古くは「小ヶ田」や「小ヶ太」などと書かれた「小さな田や小さな耕地」を意味する地名が転訛したものとする説が有力です。
57	咸宜	かんぎ	日田市・由来は、「詩経」から取った言葉で「咸く宜し」（ことごとくよろし）で、すべての事が宜しいという意味です。
58	月出山岳	かんとうだけ	日田市・由来は、景行天皇がこの山から昇る月をほめた際、案内役の久津媛が方向を聞かれたと勘違いして、「関東」と答え、その音に「月出山」の字をあてたという伝承に由来すると思われる。
59	崩の平	くえのひら	日田市・由来は、山腹の崩壊地（崩崖）にある小さな平坦地を意味する地形語「崩（くえ）＋平（たいら/ひら）」に由来する地名。
60	川作	こうくり	日田市・由来は、「川沿いの作場（耕作地）」を意味する地形由来の地名と考えられ、「川＋「作（作場や新田）」の結合による地名です。
61	我有木	ごうのき	日田市・由来は、古くは「賀生木」や「賀有木」などと書かれ、「カウキ（カウギ）」という古い地名音が転訛し、現在の「我有木」の字が当てられたと思われる。
62	牛王	ごおう	日田市・由来は、近くの牛王山に由来し、山名から集落名となった地名とされる。牛王は全国にある牛王信仰（牛王神や牛王宝印）とも関係があると思われる。
63	五条殿	ぎじゅどん	日田市・由来は、中世にこの一帯を支配した武家「五条氏」の館（殿）があった事に由来する地名とされ、五条氏の居館跡や屋敷地を示す呼称がそのまま地名化したものと解釈される。
64	末野	じいの	日田市・由来は、部落や耕地が広がる野の端に位置する集落名。
65	下釜	しもうけ	日田市・由来は、川沿いの低い場所を意味する「下（そも）」と竹などで作る仕掛け「釜（うけ9）」を合わせ。「川下側に設けた魚捕り用の「釜」（うけ）のある場所」を指す地名と解釈される地名が有力。
66	竹の原	たけのはら	日田市・由来は、竹林が多い土地を示す地名と思われる。

67	鈴連町	すずれまち	日田市・由来は、古くは「刃連（ゆきい）」と書かれた地名が時代とともに字を変え、「刃連」が「鈴連」と表記されるようになったとされる説が有力です。
68	伝里	つたり	日田市・由来は、「田んぼ（田）＋里（さと）」が合わさった「田の里」や「田園の里」を意味する地名と思われ、古くからの農村景観を表したものとされる。
69	鶴城町	つるぎまち	日田市・由来は、一般的に「鶴城」という地名は「鶴のいる（舞う）城」や「鶴にちなむ城跡」に由来する雅称であると解釈される。
70	光岡	てるおか	日田市・由来は、「日田盆地北側の台地が日当りの良い丘（光の当たる岡）である事から、「光る岡＝光岡」とする地形や景観由来の説が有力です。
71	赤米田	とぼしだ	日田市・由来は、一般的には「赤い（色の）田」または「赤米を作った田」に由来する可能性が高いが確定的な説は確認できない。
72	上手町	のぼてまち	日田市・由来は、一般には川や道の「上流側・上手側」に位置する事から名付けられたと思われる地名と思われる。
73	一尺八寸町	みおうやま	日田市・由来は、江戸期に整備された官営用水路の幅が一尺八寸（約54cm）だった事に由来する地名と思われる。
74	源栄町	ともえまち	日田市・由来は、一般には「源」や「栄」を含む地名や姓の用法から源氏や水源や起源、繁栄・発展などを吉祥的に表した合成地名である可能性が高い地名。
75	八所	やどころ	日田市・由来は、断定出来ませんが「八つの社（神社）がある場所」や「八つの場所（所）」などを由来とする可能性がある。
76	刃連町	ゆきいまち	日田市・由来は、古代の職能集団「靱部（ゆぎべ）」に由来する地名「靱負（ゆげい）」が転訛し、「靱負から靱編、刃連」と変化したと伝えられるのが有力です。特に、靱（矢を入れる筒）を作る人々が住んだ村にちなむ地名です。
77	会所山	よそやま	日田市・由来は、「山上や山腹に人が集まる「会所」（役所・集会所・祭祀の場）があった、あるいは山自体が村落の寄合・祭礼・信仰行事の場だったことに由来する地名と思われる。
78	浅海井浦	あざむいうら	佐伯市・由来は、「浅い海」と「井（湧き水や井戸）」がある入り江（浦）という地形的特徴を表した地名と思われる。
79	荒網代浦	あらじろうら	佐伯市・由来は、「荒い波の立つ海辺に設けられた網代（定置網の漁場のある浦）」という地形・漁業由来の地名と思われる。
80	市福所	いちぶせ	佐伯市・由来は、近世以降に設けられた年貢収納や物資取引の「市（いち）」と福宗の「福」に合わせた行政や経済拠点を示す地名と思われ、周辺の「福宗」や「福良」などの福を冠する集落群の一部として成立したと思われる。
81	大入島	おおにゅうじま	佐伯市・由来は、「大きな入り江（湾）」に突き出した島で「大きく入り込んだ場所の島」＝大入島と呼ばれるようになったとする説が有力で他に「大漁で魚が入り込む」や「人や船が多く入り込む」などの説

			があるが、いずれも「入り込む＝入る」に由来すると思われる。
82	大地ヶ浦	おじがうら	佐伯市・由来については不明。
83	小半	おながら	佐伯市・由来は、古くは「小名柄」や「小長良」などと書かれた山間集落名が転じたもので、明確な語源説はなく、川沿いの小さな谷筋や斜面地形を表す古い呼称に由来すると思われる。
84	葛港	かづらみなと	佐伯市・由来は、古くは、「葛（くず）」が多く生えた入り江や港があったことから、その地形と植生に由来する地名と思われる。
85	蒲江	かまえ	佐伯市・由来は、入り江を意味する古語「江（え）」と、水辺に生える「蒲（がま）」などの植物名が結びつき「蒲の多い入り江」や「蒲の生える湾」を表した地名と思われる。
86	門田	かんだ	佐伯市・由来は、集落の入口付近や神社や館の門前近くにある田んぼ＝「門の田」から生じた地名と思われる。多くは中世の荘園や在地領主の館の周辺に開かれた良田を指し、その後に村名や小字名として定着した例が各地で見られる。
87	蟹田	かんだ	佐伯市・由来は、一般的には、カニが多く生息した湿地や田んぼに由来する可能性が高いと思われる。
88	杭の内	くえのうち	佐伯市・由来は、一般的には「杭＝境界や水辺の杭」、「内＝その内側の土地を意味する事が多く、川沿いや村境の杭の内側の土地を指す地名から生じた可能性が高いと思われる。
89	下城	げじろ	佐伯市・由来は、「城の下（しろのした）」に位置する集落や村を意味する中世から近世の一般的な地名形成に由来すると思われる。
90	西野	さいの	佐伯市・由来は、堅田地区の西側に開けた野（耕地や原野）を指す地形由来の地名と思われる。
91	猿鳴	さんなぎ	佐伯市・由来は推測ですが、字義から「猿が鳴く（泣き声が良く聞こえる）場所」という民間語源的な連想が出来る。
92	鯖浦	しびうら	佐伯市・由来は、古くからサバ漁が盛んだった浦（入り江）であることから「鯖の浦」が「鯖浦」と呼ばれるようになったとする説が一般的です。
93	竹原	たこら	佐伯市・由来は、竹の多い原野や台地を意味する「竹原（たけはら）」という一般的な地形由来の地名が当てはめられたと思われ、古くからの小字や集落名として残ったものとみられる。
94	土紙屋	つちごや	佐伯市・由来については不明。
95	鶴望	つるみ	佐伯市・由来は、「鶴見」から「鶴望」へと字が改められた難読地名あり、古くは海を「望む」地形や景観と結び付けて理解されていると思われる。
96	浪太	なぶと	佐伯市・由来は、一般的な語構成からは「浪（波）」＋「太（大）」で「波の荒い浜や岬」を指す可能性が高いと推測される地名です。
97	浪越	なんごう	佐伯市・由来は、「浪（波）」の打ち寄せる海岸の越（岬や丘）や境目」を表す自然地形由来の地名と思われる。
98	最勝海浦	にいなめうら	佐伯市・由来は、古くは「新嘗浦」など「新しい稲の収穫（新嘗）」を

			意味する語に由来し、それが「最勝」という縁起の良い漢字に置き換えられた当て字地名と思われる。
99	波寄	はき	佐伯市・由来は、番匠川沿いの集落が川の「波」が寄せる場所に位置する事から、水辺の地形を表す呼称として生まれたと思われる。
100	間越	はざこ	佐伯市・由来は、「海岸の岬や入り江の間に位置する地形」にちなむと思われる、江戸時代から見える古い地名です。
101	波当津	はとつ	佐伯市・由来は、字義から推測すると「波が当たる浜や港」のイメージから「波当津浦」という小湾や集落名として古くから用いられた地名と思われる。
102	払鳥屋	はらいどや	佐伯市・由来は、字義から、「山林を切り開いた場所に鳥小屋や猟場施設があった」や「鳥を祓う（追払う）ための小屋があった」というイメージの地名と思われる。
103	戸穴	ひあな	佐伯市・由来は、「山の戸口（と）にある穴（あな）や洞穴」など、地形上の「穴」を意味する地名と思われる。周辺に洞穴や窪地が多い事から、自然地形に由来する地名と思われる。
104	堤内	ひさぎうち	佐伯市・由来は、番匠川などの川沿いに築かれた堤防の「内側の土地」を指す地形由来の地名と思われる。
105	泥谷	ひじや	佐伯市・由来は、番匠川流域の低湿地で泥の多い谷状地形を指す地形語から生まれた地名と思われ、そこから江戸時代に村名「泥谷村」が起こり、さらに苗字の「泥谷」の由来地ともなった。
106	二栄	ふたばえ	佐伯市・由来は、多くの場合開拓時や合併時に「二つの地区」「二つの村の繁栄」などを願って付けられた人工地名である可能性が高い。
107	向島	ほうじま	佐伯市・由来は、本土側見て川や海の「向こう側にある島状の土地」である事から名付けられたと思われる。
108	丸市尾浦	まるいちびうら	佐伯市・由来は、「蒲江浦」の一部をなす小さな浦で、江戸初期には「丸市火」とも書かれ、浦の名主・新左衛門がが開発した浦集落の名として成立したと見られる。
109	門前	もんぜ	佐伯市・由来は、多くの場合寺院や神社の門の前に出来た集落や町に由来する地名。
110	山梨子	やまなし	佐伯市・由来は、推測ですが「ヤマナシ（野生のナシ）など植物名に由来する地名として使われる例がある。
111	除	よけ	佐伯市・由来は、古くは「除地」や「除田」などと書かれた年貢や諸役を免除した土地（除地）に由来する地名と思われる。※
112	米水津	よのうづ	佐伯市・由来は、神武天皇がこの湾で米と水を補給したという伝承に由来すると思われるが、伝承のため確実な史料の裏付けはない。
113	出羽	いづるは	臼杵市・由来は、古代の国名（出羽国（いではのくに）と同源とみられる語で、「出る＋羽（端や辺）」＝山地や辺境に出はずれを指す地名と思われる。
114	烏嶽	うがく	臼杵市・由来は、山に多く棲んでいたカラス（烏）にちなみ「カラスのいる山」という意味から付いたとされる説が有力です。

115	笠場	おろば	臼杵市・由来は、推測ですが「山に囲まれた笠のような地形の居住地や作業場に由来する地名と思われる。
116	海添	かいぞえ	臼杵市・由来は、「海のそばや海に添う土地」を意味すると思われる地形由来の地名と思われる。
117	碓江	かきえ	臼杵市・由来は、カキ（牡蠣）と入り江を意味する語が合わさり、「牡蠣の多い入り江」を表す地名と思われる。
118	風成	かぎなし	臼杵市・由来は、もとは「風無」と書かれ、「風が当たりにくい静かな入り江（港）」を意味する地名と思われる。
119	笠良木	かさらぎ	臼杵市・由来は、戦国期以降に見える旧の大野郡笠良木村に由来し、野津氏庶家「笠良木氏」の名字にも関連がある地名。
120	桑尾	かのお	臼杵市・由来は、「桑の木が多い尾根状の土地」や「桑畑のあった山の尾根付近」といった地形や土地利用を表した地名と思われる。
121	桑原	かばる	臼杵市・由来は、一般には「桑の木が多い原を意味する自然地名。
123	御霊園	ごりょうぞの	臼杵市・御霊園という地名はない。
124	西寒田	ささむた	臼杵市・由来は、寒田川流域の西側を示す「西」を付けたもの。「寒田」＝寒い田（冷たい水田地帯）を指す地名。
125	清水原	そうずばる	臼杵市・由来は、豊富な湧き水がある土地にちなみ、「清い水の湧く原（はら）」という意味から付けられた地名と思われる。
126	藤田	とうだ	臼杵市・旧地名としてありましたが、由来は不明。
127	日当	ひなた	臼杵市・由来は、「日がよく当たる場所」という意味から生まれた地名と思われる。
128	平清水	ひらそうず	臼杵市・由来は、臼杵川右岸の城下西側にあった地区名で「平らな土地から湧き出る清い水（湧水）」を意味する地形由来の地名で、「平坦な川沿いの遊水池を指す語の組み合わせた地名。
129	千怒	ちぬ	津久見市・由来は、古い地名「チヌ」に後から「千怒」の字をあてられた地名と思われる。西日本ではクロダイを「チヌ」と呼ぶ。
130	会々	あいあい	竹田市・由来については不明。
131	市用	いちもち	竹田市・由来は、推測ですが「市（いち＝市場）」と「用（陽＝用地や用水など）」関わる地名と思われる。
132	栢木	かやぎ	竹田市・由来は、一般に「カヤの木（栢）」が多い場所に由来する地名と思われる。
133	神原	こうばる	竹田市・由来は、祖母山信仰や谷沿いの社や滝など「神域」と結びついた自然景観を持つ事から、神を祀る原や原野に由来する。
134	鳴田	しぎた	竹田市・由来は、「鷗（シギ）」という水鳥が多くいた湿地や田んぼに由来する地名と思われる。
135	炭竈	すみかまど	竹田市・由来は、炭焼きに使う竈（かまど）＝炭窯に由来する地名と思われる。炭焼き生産と結びついた山村の歴史を反映した地名。
136	挾田	はさだ	竹田市・由来は、古くは直入郷の一部として記録される歴史的な地名で「谷や川に挟まれた狭い土地や田」を表す地名と思われる。
137	陽目	ふなため	竹田市・由来は推測ですが、「太陽の当たり方」や「山の斜面の向

			き」などに由来するという説がある。
138	仏面	ぶちめん	竹田市・由来は、周囲の山並みが仏の顔のように見えることから名付けられたと思われる。
139	政所	まどころ	竹田市・由来は、多くの場合、荘園や領主の行政や財政を司る役所（政所＝まんどころ）が置かれた場所に由来する地名と思われる。
140	米納	よない	竹田市・由来は、自我から推測すると「年貢米などを納める場所」を表す地名と解釈されると思われる。
141	夷	えびす	豊後高田市・由来は、古くは「夷村（あびすむら）と呼ばれ、溪谷「夷谷（えびすたに）」などに残る地名で、中国古典に由来する「夷＝異郷や辺境」を背景にもつ地名と思われる。
142	堅来	かたく	豊後高田市・由来については不明。
143	鼎	かなえ	豊後高田市・由来については不明。
144	来縄	くなわ	豊後高田市・由来は、古代の郷名「来縄郷（くなわごう）」に由来するが語源ははっきりしない。
145	田染	たしぶ	豊後高田市・由来は、古くは「田洪」や「田汁」などと書かれ、湿地や水の多い田んぼを意味する語に由来すると思われる。確定する説はなく、水田と湿地の多い地形を表す古い地名要素と見る説がある。
146	都甲	とごう	豊後高田市・由来は、古代の「都甲荘」という荘園に由来する。
147	並石	なめし	豊後高田市・由来は、近くにそびえる奇岩群「鬼城岩峰（こじょうがんぼう）」など、岩が並び立つ独自の地形にちなむ地名と思われる。
148	陽平	ひなたびら	豊後高田市・由来は、推測ですが「日当たりの良い平坦地」や「南向きで明るい平地」といった地形的特徴から名付けられた地名と思われる。
149	小田原	こだわら	豊後高田市・由来は、「小さな田の原（田んぼの広がる原）」という地形由来の地名である可能性と思われる。
150	相原	あいわら	杵築市・由来については不明。
151	生桑	いくわ	杵築市・由来は、字義から「生きる＋桑」で、「桑の木が生えていた土地」を表す地名と思われる。
152	釜口	うけくち	杵築市・由来は、川や海で魚を獲る釜（うけ）仕掛ける「水の入口」や「漁場の入口」を指す地名と思われる。
153	槍原	うつけばる	杵築市・由来については不明。
154	筒木	うつろぎ	杵築市・由来は、周辺の地名や歴史から見て「木に関わる古い呼び名（筒＝つつ/つづ＋木）」とみる説が有力です。
155	大内原	おおねばる	杵築市・由来は、城下町近くの「大きな内側の原（台地）」を示す地形由来の地名と推測される。
156	大片平	おかたびら	杵築市・由来は、「山地の片側に広がる比較的広い平地」という意味の地名と思われる。
157	大内山	おちやま	杵築市・由来は、「大きな内側の山」あるいは「大内という谷や郷にある山」といった、地形に由来する地名と思われる。
158	乙王	おとう	杵築市・由来は、村の東にあったこの地を治めた有力者の「豪族の乙王の墓」にちなむと思われる。

159	小野尾	おののお	杵築市・由来は、「小さな野」や「山の尾根や尾根筋」などの意味で使われる地名です。
160	小狭間	おわさま	杵築市・由来は、狭間の中でも規模の小さい谷やくびれた地形を指した地名と思われます。
161	唐川	からこ	杵築市・由来については不明。
162	上村	かんむら	杵築市・由来は、「周囲の村々から見て上手（上流・高所）側にある村」という位置関係を表す名称である可能性が高い地名と思われる
163	杵築	きつき	杵築市・由来は、中世以来の地名「木付（きつき）」が元で、江戸時代に現在の「杵築」という表記になったという。地名の起源は、慶長2年（1250年）に大友氏2代親秀の六男親重が古文書に拠れば、八坂郷木付荘（または八坂下荘木付村）封じられた木村氏を名乗った事に由来するとのこと。
164	見常寺	けじょうじ	杵築市・由来は、寺院名による地名と思われる。
165	越井	こい	杵築市・由来は、「峠や谷を越えた所にある井戸や湧き水」や「境を超えた先の水場」といった地形や生活環境に由来する地名と思われる
166	甲尾	こうのお	杵築市・由来は、「兜（かぶと）のような形の山（岩）の尾根や山裾を指す地形由来の地名と思われる。
167	甑岩	こしきわ	杵築市・由来は、多くの地域で「米などを蒸す道具や甑（こしき）」に形が似ている事から付いたとされる地名と思われる。
168	定野尾	じょうのお	杵築市・由来は、字義から推測すると「定まった野の尾（端）」など地形由来と思われるが、現在は使われていない。
169	勢場	せいば	杵築市・由来は、戦国期の合戦地名「勢場ヶ原（せいばがはら）」と関係すると思われ、軍勢が布陣した場所（勢いの場）を意味する合戦由来の地名と思われる。
170	大左右	だいそう	杵築市・由来については不明ですが、同じ地名が長崎県にもある。
171	苜ノ木峠	ちしゅのきとおげ	杵築市・由来は、チシャノキ（落葉高木）の多い場所に由来する地名で、峠付近に苜の木が多く生えていたと思われる。
172	中ノ原	なかんばる	杵築市・由来は、「谷や盆地の中央付近にある原（平坦地）」という地形から名付けられたと思われる。
173	七双子	ならぞうし	杵築市・由来は、近くの池に伝わる大蛇伝説と結びついた小字名で、七双子池と七双子古墳群のある一帯を指す地名です。
174	西鹿鳴越	にしかなごえ	杵築市・由来は、「鹿鳴越（かなごえ）」と呼ばれる山塊や峠の西側の峠道を指し、豊前と豊後を結ぶ古い交通路に由来する。
175	波多方	はだかた	杵築市・由来は、推測ですが字義から「波の多い方向」や「端（はた）+方」などの想像する地名。
176	仏供	ぶく	杵築市・由来は、仏教や仏像に由来するものではなく、「ぶつ切り」や「崖や段差状の地形」などを表す古い言葉が転じた地形由来の地名と思われる。
177	藤川	ふじのかわ	杵築市・由来は、川沿い一帯に自生・植栽していたフジ（藤の花）と川にちなむ地名と思われえる。

178	薫石	ふすべいし	杵築市・由来は、字義から推測すると、香り（薫）と石に関わる地名と思われる。
179	船迫	ふながさこ	杵築市・由来は、「船のような形をした窪地や谷間」や「船と山が迫るような地形」を指す地名と思われる。
180	三光坊	みこぼう	杵築市・由来は、開拓地名で近くの寺院名などに由来する地名。
181	野狐谷	やこだに	杵築市・由来は、「野狐（やこ/のぎつね）は、狐の俗称（やこ）に漢字をあてた表記とされるもので、丘陵地の谷に狐が住んでいた事で付けられた地名と思われる。
182	野辺	やべ	杵築市・由来は、「野原や野外れ」や「集落のはずれの野や河川沿いの埜原」を意味する地名語から来たと思われる地名です。
183	寿命	じゅみょう	杵築市・由来については不明。
184	安心院	あじむ	宇佐市・由来は複数あり、葦生説では「葦が生える地」を意味する「葦生（あしぶ）」と呼ばれ、それが転化して「安心」になり、のちに倉院（荘園の倉）が置かれて「安心院」と表記されるようになった説と、安曇氏由來說では古代の海人系渡来氏族の安曇氏の名が転じて「あじむ」になったとする説、また「安心して住める地説」では、宇佐川上流の賊（鼻垂）が討たれ、人々が安心して住めるようになったので「安心」という地名が生まれたという説などがある。
185	釜ノ口	うけのくち	宇佐市・由来は、周囲の地形が魚をとる道具「釜（うけ）」に似ていることから、その入り口という意味で名付けられた地名。
186	有徳原	うっとくばる	宇佐市・由来は、「特のある原（はら）」を意味する美称地名。
187	大副	おおそい	宇佐市・由来については不明。
188	折敷田	おしきだ	宇佐市・由来は、鎌倉時代に田の上に「折敷（おしき）」を置いて神への供物を供えた事に由来する地名。
189	落狩田	おちかくら	宇佐市・由来は、「山の斜面（崩れやすい場所）近くの狩場に開かれた田」などのイメージから生まれた地名と思われる。
190	小野川内	おのごうち	宇佐市・由来は、戦国期にこの地に移り住んだ小野氏一族の名にちなむ地名と思われる。谷奥の集落名で、川名ではなく一族名＋谷（川内）という構成です。
191	景平	かげへら	宇佐市・由来は、地形や景観にちなむ地名と思われ、「山の影になる平地」や「景色の良い平地」といった意味と思われる。
192	萱籠	かやごもる	宇佐市・由来は、「萱の生い茂る山合いに籠るような場所」といった情景から生まれた地名と思われる。
193	木裳	きのも	宇佐市・由来については不明。
194	九人峠	くにんがとう	宇佐市・由来は、大友氏に反旗を翻（ひるがえ）した安心院氏（地方豪族）は、逆に城を落とされた為、この峠で当主の子の千代松丸以下九名が討死して、安心院氏は滅亡したという伝承がある。
195	閣	ごう	宇佐市・由来ははっきりしませんが、「閣」は一般に「高い建物」や「櫓（やぐら）」「御殿」などを表す漢字です。
196	小唐川	こがらこ	宇佐市・由来は、「唐が外来や異国風のものを指す古い古語である事

			から、「唐」に似た地形や岩、植物に由来していると思われる。
197	寒水	そうず	宇佐市・由来は、一般的には「泉や清水」の意味で、深見川の源流側に位置する寒い水が湧く場所」という意味の地名と思われる。
198	高家	たけい	宇佐市・由来は、「高」は高台・丘陵を、「家」は集落や家々を表し、「高い場所の集落」という地形由来の地名である可能性と思われる
199	岳切	たつきり	宇佐市・由来は、昔、淹つぼの近くまで鮎が帰って来ていた事が地名の由来という。域内に「岳切溪谷」がある。
200	妻垣	つまがけ	宇佐市・由来は、神社の由緒によると、神武天皇東征の際、宇佐国造の祖・宇沙津彦命がこの地で饗応を行い、その侍臣の天種子命が宇沙都比売命を妻に迎えた古事にちなんだ地名と思われる。
201	西納	にしのと	宇佐市・由来にはっきりしませんが、字義から推測すると、「納」は年貢や物資の集積や収納に関わる要素があるので、そういう施設の西側にある地という意味かと思われる。
202	蜷木	になぎ	宇佐市・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると「蜷」はカタツムリや巻貝を表す漢字で、水辺や川と関係のある地名と思われる
203	羽馬札	はばれ	宇佐市・由来については不明ですが、字義から推測すると「羽根が生えた馬（ペガサス）」か？
204	別府	びゅう	宇佐市・由来は、中世の荘園用語の「別府（べっふ）が「びゅう」と転じたもので、本来は本領とは別枠に設定された特別な土地＝別府が語源です。
205	佛木	ほとぎ	宇佐市・由来は、仏像を刻んだ木（仏木）に由来する地名です。
206	駅館川	やっかんがわ	宇佐市・由来は、宇佐八幡宮へ向かう勅使の宿駅となった館（駅館）に由来する地名とされている。
207	浅水	あそうず	豊後大野市・由来は、古くは、水辺や浅い水に関わる地形名とみる説が有力です。水に関わる地形に表す古い地名と思われる。
208	荒木	あらこ	豊後大野市・由来は、多くの場合、新しく開墾した土地を意味する古語の「あらき」に由来すると思われる。新田開発や焼畑で拓かれた粗い土地を指す語です。
209	大寒	おおそう	豊後大野市・由来は、字義から推測すると、冬の厳しい土地柄を表したと思われる地名です。
210	久知良	くじら	豊後大野市・由来ははっきりしませんが、先に古い音があり、後から漢字を当てた例が多いので「久知良」も同様と思われる。
211	西寒田	ささむた	豊後大野市・由来は、寒田川流域の地名「寒田（そうだ/さむた）」に由来し、その西側に位置する地域。「寒田」の由来は「寒い田（湿地や冷え込みの強い田）」を意味する地名です。
212	左右知	そうち	豊後大野市・由来は、地元発祥の古い地名がそのまま残ったものですが、漢字「左右知」の語源については不明。
213	中土師	なかはじ	豊後大野市・由来は、古い村名「土師（はじ）」の一部を示す地名で柴北川流域の土師村の中心部（中ほど）を表す地名と思われる。
214	夏足	なたせ	豊後大野市・由来は、字義から推測すると「夏に川が増水して足まで

			浸かる土地」や「夏に水が集まる足元のような低地」などの連想がされる地名と思われる。
215	六種	むぐさ	豊後大野市・由来は、明治8年に丸小野・石原・泉園・蔵内・小原・宮津留の六か村が合併して「六種村」が出来た。
216	用作	ゆうじゃく	豊後大野市・由来は、江戸時代に岡藩家老の中川平右衛門長伸の別荘地として整備された庭園「用作公園」が語源となったと思われる。
217	櫟木	いちぎ	由布市・由来は、「櫟（クヌギ・コナラなどのブナ科の木）が多く生えていた土地に由来する地名と思われる。
218	小狭間	こはざま	由布市・由来は、近隣にある「狭間」の由来から、「川や谷に挟まれた狭い間（はさま）」を意味する地形由来とみる説が有力です。
219	東院	とい	由布市・由来は、中世の村名「東院村」に由来し、寺院等の東側の地域という意味と思われる。
220	朴木	ほうのき	由布市・由来は、「朴（ほお）の木がある場所」に由来する。
221	朝来	あさく	国東市・由来は、古くは「朝来村」と呼ばれた集落で、「朝に来るや朝に参る」といった意味合いを持つ地名と思われる。
222	岩戸寺	いわとうじ	国東市・由来は、境内奥にある大きなアーチ状の霊地（岩戸）に由来すると思われる。この岩戸を祀ることから寺号が付いたという。
223	大海田	おおみだ	国東市・由来は字義からの推測ですが、「海に面した田」や「海に近い低湿地の開田」などが想像できる地名。
234	小門山	おどむれやま	国東市・由来は、国東半島では「～牟礼」や「～門」など、古い城郭や峠・出入り口に関わる地名が多く、山頂に小門牟礼城があったことから、城や峠に由来する可能性があると思われる。
235	鬼籠	きこ	国東市・由来は、赤鬼が刀鍛冶をしたという民話に由来する地名。
236	櫛海	くしのみ	国東市・由来は、推測ですが「海岸線の形が櫛の歯のように入り組んでいる」地名と思われる。
237	国東	くにさき	国東市・由来は、古くは「国前（くにさき）」と書かれ、海に突き出た「国の岬（さき）」＝国のさき（くにさき）を意味するとされる。のちに「前」ではなく「東」の字が当てられ「国東」と表記された。
238	来浦	くのうら	国東市・由来は、国東半島に古くからある海辺の集落で、地名は古代の「櫛来（くしく）」という地名・別府名に由来すると思われる。
239	黒川原	くろごうら	国東市・由来は、一般には「黒い川」と「川沿いの原」という自然地形に由来する地名と思われる。
240	千燈	せんど	国東市・由来は、国東半島の六郷満山を代表する寺院「千燈寺（せんとうじ）」とその開基伝承に由来すると思われる。
241	凧ノ浦	なぎのうら	国東市・由来は、国東市国見町の小字名で「凧（なぎ）」の穏やかな海と入り江（浦）を表す地形由来の地名の由来と思われる。
242	浜陽	はまひなた	国東市・由来は、推測ですが「浜」に近い明るい土地」や「海辺の陽当たりの良い住宅地」といったイメージから付いた地名と思われる。
243	浜手	ひんで	国東市・由来は、字義から推測するに、海岸側に位置する一帯を指す地名要素の地名と思われる。

244	両子	ふたご	国東市・由来は、国東半島中央の山「両子山」が双子のように二つの峯を持つ山である事に由来する地名と思われる。
245	馬渡	まなたり	国東市・由来は、「馬」＋「渡り」で、「馬が川などを渡る場所」を表す地名と解釈されられると思われる。
246	向田	むかた	国東市・由来は、一般に「川や谷に向いた田んぼ（田地）」という地形に由来すると思われる。
247	両瀬	もろせ	東国東郡・由来は、推測ですが「川の両側に瀬（浅瀬）があった場所や「二つの瀬が続くか向かい合う場所」を表す地名と思われる。
248	用作	ようじゃく	東国東郡・由来は、古くは「柚木作」や「柚作」などと書かれ、ユズの木が多い土地の「作り場（耕作地）」を意味する地名と思われた。
249	会下	えげ	速見郡・由来は、字義推測するに「人が集まる場所の下手」や「谷や川の合流点付近」などを連想する説のあるが、確信がない。
250	大神	おおが	速見郡・由来は、一般に「大きな神」や「偉大な神」に由来するとされ、古くからの神社信仰や氏族名（大神氏）と結びつく地名。
251	皆本	かいもと	速見郡・由来については不明。
252	太田	たいだ	速見郡・由来は、一般に「大きな田や広い田」に由来する地名で、「大分（おおいた）」の語源と同系統の意味を持つと思われる。
253	日出	ひじ	速見郡・由来は、古い荘園名「日出荘」に由来し、語源は泥地を意味する「ヒジ」とする説が有力です。現在は「日が出る」の字を当て、別府湾に向いた立地から「日、出（いずる）町」としての説もある
254	甘川水	あまがせ	玖珠郡・由来は、字義から推測するに「水のきれいな川」や「甘い＝うまい水」などを連想する説が成り立つと思われる。
255	奥双石	おくなめし	玖珠郡・由来は、「奥」は谷の奥まった場所を、「双石」は近くの川名「双石川（なめしかわ）」に由来すると思われる。
256	書曲	かいまげ	玖珠郡・由来ははっきりしませんが、古くから伝わる地名で、元は古い方言地名（発音）からのちに「書曲」という当て字の可能性が考えられる地名。
257	楮原	かごわら	玖珠郡・由来は、字義から推測で和紙原料の「楮（こうぞ）」を植えた畑や原に由来すると思われる。
258	桐木	きるぎ	玖珠郡・由来は、古くから桐が多く生えていた場所や、桐に関わる土地利用（材木や器具材など）から名付けられたと思われる。
259	崩平山	くえんひらやま	玖珠郡・由来は、山名は「山体が崩れて平らになった地形」から付いたとされる説が有力です。
260	疥癬湯	ひぜんゆ	玖珠郡・由来は、皮膚病の一種である「疥癬（かいせん）を治す湯が湧いた事にちなむ地名と思われる。
261	内帆足	うつばし	玖珠郡・由来は、玖珠郡帆足庄が地名の語源と思われる。
262	玖珠	くす	玖珠郡・由来は、巨大な楠（くす）の木にまつわる民話に由来するとされる。大楠を切り倒した切り株が今の伐株山になり、その地が「玖珠」と呼ばれるようになったという。
263	内匠	たくみ	玖珠郡・由来は、古くからの職人や工人を意味する語「匠」に由来す

			る地名と思われる。
264	中泊里	なかづまり	玖珠郡・由来は、湾や入り江の「中ほどにある船泊まりの集落」という意味合いの地形由来の地名と解釈できる地名と思われる。
265	万年山	はねやま	玖珠郡・由来は、古くは「刎山（はねやま）」と書かれ、大桶を切り倒した時に跳ね上がった土が山になったという伝承が由来という。
266	萩ヶ原	はんがはる	玖珠郡・由来は、古くは「萩ヶ原村（はんがはるむら）」と呼ばれた集落名で、萩の生える原野を開いた高原状の土地に由来する。
267	日出生	ひじゅう	玖珠郡・由来は、古くは「日出庄」「日出生村」などと書かれ、「日が昇る方角や東の台地」を指す地名と見られる説が有力です。



宮崎県



NO	地名	読み方	由 来
1	櫓	あおき	宮崎市・由来は、付録この一帯が「櫓原（あおきはら）」や「阿波岐原（あはきはら）」と呼ばれていた事に由来し、日本神話の禊（みそぎ）の伝承地名が元になったとされるという。
2	阿波岐原	あはきはら	宮崎市・由来は、「櫓（あおき）」と同じ。
3	生目	いきめ	宮崎市・由来は、古くからの神社名や人名伝承に由来し、「活きた目」や「霊験ある目」を意味する語に結び付けて説明される事が多いと思われます。また、平安時代末期の武将の藤原景清（平景清）にまつわる伝承が残されている。壇ノ浦の戦いに敗れ、この日向の地に逃れた景清が「源氏の世を見るのは忍びない」と自らの両眼を抉（えぐ）って投げ捨てたという、強い信念を感じさせる物語です。その眼が落ちた場所に建立されたのが、眼病平癒の神様と知られる「生目神社」であり、地域の地名の由来となったと思われる。
4	浮之城	うきのじょう	宮崎市・由来は、五ヶ瀬川沿いの低地に築かれた城が、周囲の水に囲まれて浮かぶ城のように見えた事から名付けられたという。水に囲まれた城郭の景観が語源という説が有力という。
5	瓜生野	うりゅうの	宮崎市・由来は、第12代景行天皇がこの地で休息した際、立派な瓜が実っているのを見て、「瓜がよく実る野」と言った事が始まりという説がある。
6	追分	おいわけ	宮崎市・由来は、全国的にもとは牛馬を追い分ける場所の意味で、そこから「街道や道路の分岐点を表す地名」となったと思われる。
7	折生迫	おりゅうご	宮崎市・由来は、もともと谷の多い地形を背景にした村名で、江戸時代からの「折生迫村」に由来する駅名が現在に受け継がれている。
8	鏡洲	かがみず	宮崎市・由来は、「鏡」は水面や淵の静かな様子、「洲」は川の中州や川沿いの土地を表す漢字で、川沿いの地形から付いた地名と思われる。
9	郡司分	ぐじぶん	宮崎市・由来は、律令制下で郡を治めた役人「郡司（ぐんじ）」に由来し、郡司の支配地や持ち分だった地域を示す名と思われる。
10	沓掛	くつかけ	宮崎市・由来は、一般的に「旅の途中で履物（草履や馬の沓）を掛け替えたり脱いで休んだ場所」に由来すると思われる。
11	月知梅	けっちばい	宮崎市・由来は、薩摩藩主の島津光久が詠んだ歌に由来し、「その梅がいつ植えられたかは月だけが知っている」という意味から名付けられたという地名。
12	正手	しょうて	宮崎市・由来は、字義から推測すると「正面や表側」や「本筋の側」などが連想できる地名です。
13	新別府	しんびゅう	宮崎市・由来は、旧櫓村（あおきむら）の新別府村に由来する。「別府（びゅう）」という地名は、古くから浜辺や漁場に近くに「新たに開かれた村・新田として成立したものと思われる。
14	曾山寺	そさんじ	宮崎市・由来は、近くにある曹洞宗の寺院「曾山寺（そさんじ）」の名に由来する。
15	恒久	つねひさ	宮崎市・由来は、中世文書に見える荘園名「左右恒久（さうつねひ

			さ)」に由来し、古くから続く村名や地名が現在も受け継がれた地名
16	新名爪	にいなづめ	宮崎市・由来は、新しく開いた田地の生き詰まりの場所という意味で付けられた地名と思われる。
17	飛江田 加江田	ひえだ かえだ	宮崎市・飛江田の由来は、河口や入江に近い低地を開発した田地を表す地名と思われる。加江田の由来は、中世から見える古い地名で「海江田」とも書かれる沿岸部の集落や郷名に由来する。
18	双石山	ほろいしやま	宮崎市・由来は、岩が風化して「ぼろぼろ崩れる性質」に由来する地名と思われる。
19	穆佐	むかさ	宮崎市・由来は、川向うから見た「向かいの地」と低湿地を指す「す（三角州）」が合わさった呼び名「コムス」が転じたものとされ、後に願いを込めて漢字「穆（むか）（向いの地）」が当てられたという。
20	和石	よれし	宮崎市・由来は、古くからの集落名で、石にちなむ和名ではなく、古い地名語が訛った当て字と思われる。
21	五十市	いそいち	都城市・由来は、近隣の「五十町（ごじゅうちょう）」と同様に、耕地の面積（五十町分）に由来する地名と思われる。
22	飯起	いぼこり	都城市・由来ははっきりしませんが、字義から「稲作や食」に関わる地名と思われる地名。
23	乙房町	おとぼうちょう	都城市・由来については不明。
24	上水流 下水流	かみづる しもづる	都城市・上水流の地名の由来は、川や谷の上流側にある集落で、下水流は下流側にある集落の意味の地名と思われる。
25	上長飯 下長飯	かみながえ しもながえ	都城市・由来は、古くは「原口村」と呼ばれた地域が、後に「長飯（ながえ）」と総称され、その上手側を「上長飯」で、下手側を「下長飯」と区分して出来た地名。
26	四家	しか	都城市・由来は、源平合戦後にこの地に移り住んだ平家落人の「四つの家（四姓）」に由来すると言われる地名とされる。
27	志比田町	しばたちょう	都城市・由来は、安土桃山時代に「紫尾田」の表記で記録のある地名で、江戸時代に門割り制度の「志比田門」があった。語源や由来については不明です。
28	温水	ぬくみず	都城市・由来は、確定した定説はないが「湧水など水の温かさ」や「湿地や水辺の性質」を表す古い言葉に由来する地名。宮崎県の温水は、戦国時代からこの地で温泉が湧出していた事に由来する。
29	長谷谷	はせたん	都城市・由来ははっきりしませんが、多くは「細長く続く谷地形」に由来すると思われる。
30	弁済使	べんざし	都城市・由来は、七福神の一柱である弁才天（弁財天）を祀る社や信仰に由来する地名と思われる。近くの恵比寿神社などと同様に、商売繁盛や水の神への信仰と結びついた小字名です。
31	御池	みいけ	都城市・由来は、古くは「神の池」とされる聖なる湖を意味する呼び名が簡略化し「御（おごそかな・尊い）」＋「池」という尊称表現になったと思われる伝承がある。
32	都城	みやこのじょう	都城市・由来は、「都島（みやこじま）」に築かれた城」に由来する。

33	牟礼水流	むれづる	都城市・由来は、一般に「丘陵地名の牟礼」と「川筋地名の水流（つる）」が合わさった複合地名と思われる。
34	母智丘	もちお	都城市・由来は、定説はなく、古い神名や地名に由来する説はあるが、はっきりした語源は不明。
35	愛宕	あたご	延岡市・由来は、麓にある愛宕神社の鎮座と山名「愛宕山」に由来すると思われる。
36	天下	あもり	延岡市・由来ははっきりしませんが、見晴らしの良い高台や要害地や領主や武家の屋敷があった場所などに付けられる地名と思われる。
37	家田	えた	延岡市・由来は、一般に集落と田んぼが一体となった地形から生じた地名と思われるが、確定した語源ではない。
38	大峽	おおかい おおはざま	延岡市・由来は、一般に「大きな挾（はざま）＝大きく深い谷間や峡谷」を意味する語から生じた地名と思われる。
39	大崩山	おおくえやま	延岡市・由来は、東側斜面に露出した花崗岩が「大きく崩れたように見える」独自の岩壁景観に由来すると説明されている。風化した花崗岩が崩れたように見える地形が由来の核心という。
40	鹿狩瀬	かがせ	延岡市・由来は、字義から推測すると「鹿の狩猟が行われた場所（川の瀬）」に由来すると思われる。
41	川水流	かわずる	延岡市・由来は、五ヶ瀬川の流れと結びついた「川の水の流れ」を表す地形系の地名とおもわれる。
42	鹿川	ししがわ	延岡市・由来は、「鹿のいる川」や「鹿の出る谷筋」を表す地名で、日本各地で見られる。その他伝承では「左岸の石は石丸をくわえた獅子をかたどり、右岸の石は象の鼻のごとく細長く突き出している。この獅子が「鹿川」の地名となったという。
43	須美江	すみえ	延岡市・由来は推測ですが、美しい入り江を形容した地名と思われる
44	東海	とうみ	延岡市・由来は、「海の東側（東の海辺）」行った方角や海岸地形を表す一般名詞的な呼び名から生まれたとみられる。
45	土々呂	ととろ	延岡市・由来は、古くからある地名で、地形や土地の特徴に由来する語源としては「土が露出している場所」を意味する語から付いたとする説や、海に近い土地柄から「海の轟（とどろき）」の音が転じたのではないかと思われる説がある。
46	直海	なおみ	延岡市・由来ははっきりしませんが、近世以前から小字としてあった地名です。
47	西階	にししな	延岡市・由来は、市外西側にある丘陵地・城跡「西階城（宝坂城）」に由来する地名と思われる。「西階」の由来は、延岡城下から見て西側の丘陵から付いた地名と思われる。
48	一ヶ岡	ひとつがおか	延岡市・由来については不明。
49	別府	びゅう	延岡市・由来は、古くは「新別府（しんびゅう）」と書かれた海辺の集落名にさかのぼり、江戸～近世の文書にも「シンベフ」と訓が付されるなど、古い地名が現在の町名にも受け継がれている。
50	祝子	ほうり	延岡市・由来は、神話の神「山幸彦（ホオリノミコト）にちなむ地名

			で、この「祝子川」で山幸彦がこの川の水で産湯を使ったという伝承に由来すると思われる。
51	槇峰	まきみね	延岡市・由来は、周辺に自生・植栽していた槇（まき）の木にちなむ山名や鉾山名が地名化したものと思われる。
52	行勝	むかばき	延岡市・由来は、山の姿が馬具の「行勝（むかばき）」に似ていることから付いた地名です。特に行勝山や行勝の滝の奇岩絶壁の形状に由来する説が一般的です。
53	八峡	やかい	延岡市・由来は、干支を用いた独特の住所表示の中で、午（うま）に対応する地区名として付けられた地名と思われる。
54	柚木	ゆうき	延岡市・由来は、一般的に「柚（ゆず）の木が多い土地」など、柚子にちなむ地名と解釈できる地名。
55	吾田	あがた	日南市・由来は、古代の地名「吾田邑（あがたむら）」にさかのぼる名称で、神武天皇の妃・吾平津媛（あいらつひめ）の出身地として「日本書紀」に登場する事に由来すると思われる。
56	鵜戸	うど	日南市・由来は、主祭神の名に含まれる「鵜（う）」にちなみ、「うど」という音に「鵜」の字を当てた地名とされる。
57	鶯巣	おうさ	日南市・由来は、一般的に「鶯（うぐいす）が巣を作る場所」や「鶯の多い谷や森」といった自然景観に由来する地名と思われる。
58	飢肥	おび	日南市・由来は、古くは「帯」や「小火」などと書かれ、城下町一帯の地形や伝承に由来する地名と思われる。
59	贅波	にえなみ	日南市・由来は、古文書に「贅浪」「熱波」などと書かれ、海辺の集落として発達した歴史を反映した地名と思われる。古い呼び名（ねなみ系の音）に「贅波」の字を当てた地名と思われる。
60	富士	ふと	日南市・由来は、古くは「太刀（たち）」と書かれ、海岸の岬状に張り出した地形を表す言葉が転じた地名とされる説が有力です。
61	榎原	ゆわら	日南市・由来は、古くは「よはら」や「よわら」と読まれ、「岩原（いわはら）」が転じたとする説が有力です。岩の多い海岸の原野を指す地形名とみる説がある。
62	軍谷	いくさだに	小林市・由来は、一般に「古い戦（いくさ）のあった谷＝古戦場に由来する地名」と思われる。
63	売子木	きしゃのき	小林市・由来は、この地域に自生していた落葉高木「チシャノキ」に由来すると思われる。
64	輝嶺峠	きれいとうげ	小林市・由来は、「山並みがよく見える峠であることから「輝く嶺」をイメージして当て字的に名付けられた」と推測される地名。
65	猿谷	さいたに	小林市・由来は、一般的に「サル（猿）」＋「タニ（谷）」という地形由来の地名と思われる。
66	水流迫	つるざこ	小林市・由来は、岩橋川沿いの「水の流れが狭まる場所」を意味すると思われる。「水流狭所（つるさこ）」の意をとった地名とされる。
67	夷守	ひなもり	小林市・由来は、古代に辺境を守る役職名・地名だった「ヒナモリ」に由来すると思われる。「夷守」は3～4世紀ごろの倭国・ヤマト王

			権で、国境や辺境を守る軍事的長の称号とされる。
68	韓国岳	からくにだけ	小林市・由来は、「韓（から）の国が見えるほど高い山」とされることに由来する説が一般的です。古事記の表現や、朝鮮半島への方角を意識した呼び名と結びつけたと思われる。
69	小倉ヶ浜	おぐらがはま	日向市・由来は、「お金」と「お倉」という2人の女性にまつわる民話に由来する地名と思われる。この民話の内容は「欲張りを戒める説話の一種で、弘法大師が登場するバージョンもあり、「お金」と「お倉」の行いが浜の名の由来になったという。
70	幸脇	さいわき	日向市・由来については不明。
71	山陰	やまげ	日向市・由来は、一般に「山の陰（北側の日当たりの弱い側）」という地形から生まれた地名と思われる。
72	郡元	こおりもと	串間市・由来は、古代の郡（こおり＝行政区画）の中心地や本拠を意味する「郡の元（本）」に由来すると思われる。
73	大重野	だいしげの	串間市・由来は、字義の推測から「草木がよく茂る広い野」あるいは「大きなシゲ（重）氏の野」という意味合いの地名かと思われる。
74	築島	つきしま	串間市・由来は、明治時代に島を買い取り移住した漁師の築島藤吉（つきしまとうきち）の苗字に由来する。
75	舳	へた	串間市・農業集落名として「へた」という表記される地区名で、隣接する「夫婦浦（めおとむら）」と対になって使われた地名。
76	寒川	さぶかわ	西都市・由来は、近くを流れる蛇籠川（じゃろうがわ）の旧称「寒川」に由来する。寒川とは「水が冷たい川」や「寒さの厳しい川筋」などを連想される地名です。
77	銀鏡	しろみ	西都市・由来は、日向神話で、ニニギノミコトが大山祇神の娘であった「木花咲耶姫」だけを妻に選び、姉の岩長姫を退けたため、嘆き悲しんだ岩長姫は、自分の姿を映した鏡を遠くへ投げた「銀の鏡」が落ちた場所とされる神話に由来する地名です。
78	調殿	つきどの	西都市・神をまつる齋殿（いわゆる神事の為の御殿）に由来するとされる。別の説では、宇佐宮への貢物を納めた倉庫を指すとも伝わる。
79	都萬神社	つまじんじゃ	西都市・由来は、「都萬神社のある地名「妻（つま）」は、ニニギノミコトがコノハサクヤヒメを「妻にしたい」と願った場所とされる伝承に由来すると思われ、神話上の求婚の場面が湯名となったという。
80	水流崎	つるさき	西都市・由来は、一般的には「川や水の流れに面して突き出た岬状の場所」といった地形由来の地名と推測される。
81	都於郡	とのこおり	西都市・由来は、古代日向国児湯郡の「都於（との）郷」が中世以降まで受け継がれた地名で、現在の西都市都於郡一帯に残る古い郷名由来の地名です。
82	八重	はえ	西都市・由来は、山の中腹に広がった平らな土地の事で、山沿いの地域ではこの貴重な平地を大切に利用し、生活を行ってきた。
83	蝦野	えびの	えびの市・由来は、霧島山中の「えびの高原」に由来し、秋にススキの穂先がエビ色（ブドウ色）に染まる景観から名付けられた地名。

84	尾八重野	おべの	えびの市・由来ははっきりしませんが、「雄八重/尾八重」といった周辺地名の変遷や地形から派生した可能性が高い地名と思われる。
85	加久藤	かくとう	えびの市・由来は、古くは「覚頭（かくとう）」とも書かれたとされ、中世以来の郷名や城名として定着した歴史地名と思われる。
86	甑岳	こしきだけ	えびの市・由来は、山の形が昔の蒸し器（甑（こしき））に似ている事に由来するとされている。頂上部分が水平に斬り落とされたような台形の山容がその由来です。
87	川内川	せんだいがわ	えびの市・由来は、下流域の地名「川内（せんだい）」に由来し、その「川内」の語源については「千の台」に関する神話説と、川の内側の土地を指す地形説などがある。
88	真幸	まさき	えびの市・由来は、平安時代の駅名「真斫（ませき）駅」に由来し、「真狭き土地」＝細長く狭い地形を表した語が転じたものとされる。
89	大八重	おおはえ	北諸県郡・一般に「山の中腹に重なって広がる平らな土地（八重）」が大きく発達した場所を指す名所と思われる。
90	櫟田	くぬぎだ	北諸県郡・由来は、「櫟の木が多く生えていた田（あるいはその周辺）」を意味する地名と思われる。
91	鷺巣	さぎす	北諸県郡・由来は、元禄元年（1528年）に新納忠勝が伊東氏と戦った際、地内の小鷹原の谷迫に水を湛えて作物の鷺を据え、伏兵をもって伊東勢を誘い込んで勝利を得た事にちなむ伝承がある。
92	蓼池	たでいけ	北諸県郡・由来は、もともと「蓼（たで）」という水辺に生える草が多かった池にちなむ地名と思われる。
93	御池	みいけ	西諸県郡・由来は、古くは「神の池」とされる聖なる湖を意味する呼び名が簡略化され、「御（おごそかなや尊い）+池」という尊称表現になったと思われる。
94	神祭野	こぜの	児湯郡・由来は、字義から推測すると「神を祀る祭礼が行われた野（開けた場所）」といった意味合いの地名と思われる。
95	勝利	すぐり	児湯郡・由来は不明ですが、開墾地や新しい集落に縁起の良い漢字の地名を付ける例が多いその一つと思われる。
96	道具小路	どうげこうじ	児湯郡・由来については不明。
97	馬場原	ばばのはら	児湯郡・由来は、武家時代などに馬の訓練や競馬、流鏝馬などを行った場所を指す地名と思われる。
98	伊倉	いくら	児湯郡・由来は、古代語の「イク」に官倉の「倉」が付いた地名とする説が有力です。
99	今別府	いまびゅう	児湯郡・由来は、「別府」という中世の土地制度に由来し、それに「今（新しい）」が付いたものと思われる。「別府」は本来の領地とは別枠に設定された新開発地を指す語。
100	岩脇	いわなぎ	児湯郡・由来は、「脇と平岩が合併して出来た村が「岩脇村」となったという。
101	上日置	うわべき	児湯郡・由来は、一般的に「日置」は太陽の「日」と「置く」を合わせ「日が差す場所や日当たりの良い所」を表す地名と思われる。

102	江梅瀬	えばいせ	児湯郡・由来ははっきりしませんので「語源不詳の小字名。」
103	祇園原	ぎおんばる	児湯郡・由来は、近くにあった「祇園社」（現在の祇園神社）に由来するとされる説が有力です。
104	北畦原	きたうねはら	児湯郡・由来は、地域の北側にある畝（うね）のある原という地形由来の地名と思われる。
105	鬼付女	きづくめ	児湯郡・由来は、観音山（鬼付女峰）一帯に伝わる「鬼退治伝説」に由来し、内容は「源為朝が鬼の目を射抜いた伝説がある。」
106	越馬場	こえのばば	児湯郡・由来は、字義からの推測ですが「峠や川の渡し場近くにあった馬場」や「境界を超えた側に設けられた馬場」という意味合いの地名と思われる。
107	溜水	たまりみず	児湯郡・由来は、水の豊富な窪地を示す地形名が、そのまま地名になったと思われる。
108	富田	とんだ	児湯郡・由来は、「豊かな田んぼの広がる土地」を表す地名と思われる可能性が高い。
109	新田原	にゅうたばる	児湯郡・由来は、「新しく開かれた田んぼの原」を意味する地名。
110	弁指	べんざし	児湯郡・由来は、古代の役職名「弁済使（べんさいし）」が語源とされる説が有力です。
111	三納代	みなしろ	児湯郡・由来は、語源や由来等については不明ですが、「神社と神楽を中心とした集落名としては確認できる。」
112	矢床	やとこ	児湯郡・由来ははっきりしませんが、字義から推測すると「真っすぐな谷、あるいは斜面の下にある平坦地」や「矢のように細長い地形の床」といった地形イメージの地名と思われる。
113	湯風呂	ゆぶろ	児湯郡・由来は、近くに湧く冷泉を沸かして人々が風呂に入っていた事に由来する地名です。
114	上米良	かんめら	児湯郡・由来は、古くから一ツ瀬川上流域を指した地名「米良（めら）」を中心部（上流側）にあたる事から「上米良」と呼ばれるようになったという。
115	都農	つの	児湯郡・由来は、古代の日向国児湯郡の「都農郷（つのごう）」にさかのぼる古い地名で、古くは「津野」と書かれていた。
116	臼杵	うすき	東臼杵郡・由来は、古代に臼塚古墳の被者の魂を護る目的で造られた「臼」と「杵」の石甲が由来と伝えられる。
117	家代	えしろ	東臼杵郡・由来は、古くは東臼杵郡家代村と呼ばれた山間集落で、家（いえ）の代々続く土地や村を意味する地名と思われる。
118	八重の平	はえのひら	東臼杵郡・由来は、一般に山の中腹にある平らな土地（段上の平地）が重なっている地形に由来すると思われる。
119	合戦原	かせばる	東臼杵郡・由来は、多くの地域で「戦いが行われたと伝わる原（野原）」という意味で付いた地名と思われる。
120	鹿野遊	かなすび	東臼杵郡・由来については不明。
121	鬼神野	きじの	東臼杵郡・由来は、もとは「黄地野」あるいは「雉野」と呼ばれた土地が、後に「鬼神野」という漢字に書き替えられたという。

			由来は、黄色い草原の景色や雉の多い土地柄が地名の元という。
122	神門	みかど	東白杵郡・由来は、百済王族を祀る神門神社と結びついた地名で、「神の門」＝聖地への入り口を意味すると思われる。
123	大猿渡	おおそたり	西白杵郡・由来不詳の難読地名。
124	鬼切畑	おぎりはた	西白杵郡・由来は、昔、神武天の兄「三毛入野命」が「鬼八」という鬼神を退治する際に、この地で捕まえて切りつけたという伝承で付いた地名と思われる。
125	四皇子	しおじ	西白杵郡・由来は、神武天皇と兄弟4皇子にちなむ伝承に由来する。
126	後梅	おぞめ	西白杵郡・由来は、はっきりしませんが、梅に関する由来と思われる。
127	尾八重	おばえ	西白杵郡・由来は、「山の尾根筋が幾重にも重なる場所」といったイメージに由来する地名と思われる。
128	上下顔	かみしもづら	西白杵郡・由来は推測ですが、「川や谷に面した山の顔のうち、上手側と下手側の一帯」を区別して呼んだ事から「上下顔」となったという地形由来の地名と思われる。
129	葛根ヶ原	かねがはる	西白杵郡・由来は、字義から推測ですが「葛（クズ）が多く生えていた原野」というような自然環境由来の地名と思われる。
130	興地	くうち	西白杵郡・由来は、字義から推測すると「新しく開けて栄えた土地」や「開発が進んだ土地」というような意味合いの地名と思われる。
131	徳富	とくずみ	西白杵郡・由来は、「富＝住（すみ）、居住地とする説がある地名。
132	名女石	なめし	西白杵郡・由来は、近くにある大きな岩の「名女石」にちなむ地名と思われる。
133	深角	ふかすみ	西白杵郡・由来は、「深い谷（盆地状の地形）の奥まった角（すみ）」を表す地形由来の地名という。
134	神影	みかげ	西白杵郡・由来は、神話に登場する三毛入野命が鬼八退治に向かう際、大雨後に「日の影」が差した事にちなむ伝承による地名。
135	百舌鳥山	もずやま	西白杵郡・由来は、百舌鳥（モズ）という鳥の名にちなむ地名と思われるが確定ではない。
136	矢形的	やかたのまと	西白杵郡・由来は、推測ですが「矢の形をした地形の所に設けられた的場など、弓や射場に関係した古い呼び名に由来した地名と思われる。





鹿児島県

NO	地名	読み方	由来
1	赤生原	あこうばる	鹿児島市・由来は、「赤い土（火山灰）の原野」を意味する地名。
2	精木川	あべきがわ	鹿児島市・由来は、「木の名（精あべ）」と川を合わせた地名という。
3	石燈籠	いづろ	鹿児島市・由来は、南林寺（現・松原神社）の参道に立っていた石造りの燈籠（石燈籠）に由来する。鹿児島弁で石燈籠を「いっつろ」と呼んだ事が「いづろ」という地名になったという。

4	居屋	いわや	鹿児島市・由来ははっきりしませんが、九州各地では「岩屋や磐屋」など、岩場・洞窟などを「いわや」と呼称する地名が多く「居屋」も同系統の当て字と思われる。
5	宇宿	うすき	鹿児島市・由来は、アイヌ語の「湾+場所」に由来するという説が有力と思われる。
6	宇都谷	うどんたに	鹿児島市・由来は、一般に「宇都＝細長く奥まった谷状の田園地帯」や「谷＝谷あい」という意味から、小川沿いに奥深く入り込んだ袋状の谷の田んぼを指す地形由来の地名と思われる。
7	大石様河	おいしさんかあ	鹿児島市・由来は、島津歳久（しまづとしひさ）公の別称「大石様」にちなむとされている。
8	皆房	かいぼう	鹿児島市・由来は、室町時代の史料「鹿児島諏訪神社祭次第」（寛正6年（1465年）に「皆房村」と記されているが、現在は「皆与志町」となる。由来については不明。
9	上町	かんまち	鹿児島市・由来は、鹿児島城下町の発祥地とされる古い市街地で、「城下町の上手（かみて）に位置した事から「上町」と呼ばれるように」になったという。
10	喜入	きいれ	鹿児島市・由来は、もともと奈良～平安期に「給黎（きゅうれい）」と書かれた地名があり、それが変化して「キレイ」となり、さらに戦国期に「喜入」という字が当てられたという。由来は「喜びが入る」という意味を込めて字を改めたという伝承が有力。
11	花倉	けくら	鹿児島市・由来は、字義から推測ですが、花が多い谷・斜面や物資を集める場所などが連想される地名です。
12	花棚	けだな	鹿児島市・由来は、字義から推測すると「花が棚のように作地形」や「石の段石」などを連想される漢字ですが、後世の当て字と思われる
13	河頭	こがしら	鹿児島市・由来は、1950年に鹿児島市に編入された際に、新しい町名とした採用されたもので、川の位置や方言に由来すると思われるが、確定した定説はない。
14	甲突川	こうつきがわ	鹿児島市・由来は、もとは「神月川」という名に対し、「甲冑を突き破るほどの武士を多く生んだ川」という意味を込めて「甲突川」と付けられたという。
15	催馬楽	すばる	鹿児島市・由来は、古代歌謡の一種である「催馬楽」（さいばら）の隼人（はやと）族の伝承に由来すると思われる。
16	草牟田	そうむた	鹿児島市・由来は、もともと湿地や田んぼだった土地を指す「沢牟田（さわむた）」が訛った地名とされる説が有力です。湿地や田園地帯だった事に反映した名前と思われる。
17	都曇答臈	たんたど	鹿児島市・由来は、定説はありませんが、隼人の古い歌や鼓の音にちなむとする説や、水に流れる音が「たんたど」と聞こえる事から名付けられたという説など、いくつかの伝承がある。
18	鼓川	つづみがわ	鹿児島市・由来は、字義から推測ですが「鼓」の字から、地形や川の流れや音が太鼓を連想されるという民間後的な解釈とされる。

19	賦合	つもりあい	鹿児島市・由来については不明。
20	樋之口町	てのくちちょう	鹿児島市・由来は、清滝川から田んぼに水を引く「樋（とい）の出口があった場所」という水利施設に由来すると思われる。
21	野呂迫	ところざこ	鹿児島市・由来は、所沢ゆかりの一族が関わったとされる地名で、埼玉県所沢にちなむ転訛地名と思われる。
22	中別府	なかんびう	鹿児島市・由来は、荘園制の時代に生まれた「別府」という地名の一部で、広井別府領の中ほど（中心部）を指す地名と思われる。
23	茄子田	なすびだ	鹿児島市・由来は、村が茄子の名産地だったことからや、高貴な方が村で採れた茄子を食し、おいしいと感激したという話から「茄子田」という地名が付いたという説もある。
24	生見	いくみ	鹿児島市・由来は、一般に「温かい・暖かい場所」を意味する地名と思われる。
25	火の河原	ひのこら	鹿児島市・由来は、製鉄や製炭の火と、その作業を行った川原に由来する地名と思われる。
26	上鬼燈火谷	ふつつがだに	鹿児島市・由来は、「ホオズキ」を意味する方言「ふずつ（鬼燈）に由来すると思われる地名。
27	菩薩堂	ぼさど	鹿児島市・由来は、通り沿いにあった「菩薩を祀るお堂（菩薩堂）に由来すると思われる地名。
28	堀殿飯屋	ほりどんかや	鹿児島市・由来は、江戸時代の地頭（領主）の役所「地頭飯屋」に由来する地名と思われる。ただし「堀殿」の部分の細かな由来は不明。
29	紫原	むらさきばる	鹿児島市・由来は、もともとこの台地が「村々の境にある原っぱ」だったことから生まれたとされる説が有力です。「村境の原（むらさかいばる）」が訛って「むらさきばる」になったと思われる。
30	明穴堀	もがほつ	鹿児島市・由来については不明。
31	易居町	やすいちよう	鹿児島市・由来は、「住み易い新しい街（新地）」として明治7年（1874年）に設置された。
32	吾平	あいら	鹿屋市・由来は、吾平山上陵の所在地で、吾平の地名は日本書紀神代下（西暦720年）に「吾平山上陵」とあるのに由来するという。
35	辰喰	たつばみ	鹿屋市・由来については不明。
36	祓川	はらいがわ	鹿屋市・川や地名に多い「祓（はら）い＝穢れを清める行為」に由来すると思われ、「身や土地の穢れを水で祓う場所」を意味する地名と思われる。
37	名主	みょうず	鹿屋市・由来は、もともと中世の「みょうしゅ」から来た言葉で、「名」は名田という土地の区分を指し、その土地を持ち管理する主という意味で「名主」と呼ばれるようになった。
38	百引	もびき	鹿屋市・由来は、川が尾を引くように長く南へ延びる地形から付いた地名という。戦国期から残る地名。
39	鹿籠麓	かごふもと	枕崎市・由来は、「鹿籠」は古くは「鹿籠郷・鹿籠村」と呼ばれた海辺の集落名に由来し、語源は「鹿がこもる山や入江」などを表す地名とされ、志野「麓」という地名です。

40	下山	さがやま	枕崎市・由来は、山の麓にある集落や、山から下った所の集落を集落を指す地毛井と思われる。
41	莫禰	あくね	阿久根市・由来は、中世にこの地を支配した莫禰氏（莫禰郡司）とその領域「莫禰院（莫禰四十町）」に由来する地名と思われる。「莫禰」の意味よりも、古い地名の音「あくね」が先にあり、それに漢字を当てたとみる説が有力です。
42	切通	きずし	出水市・由来は、峠や崖を切り開いた通路を意味する「切り通し」に由来すると思われる。
43	紫尾山	しびさん	出水市・山の神が現れた悪夢のあとにたなびいた「紫の雲の尾」にちなむ、という伝承に由来するとされる。紫雲が尾を引く姿から「紫尾」となった説が一般的。
44	下特手	しもこって	出水市・由来は、特定な説はないが、古い村名や小字名に由来すると思われる。
45	帆木之上	はぎのうえ	出水市・由来については不明。
46	指宿	いぶすき	指宿市・由来は、古くは温泉の豊かさを表す「湯豊宿（ゆほすき）」が語源となり、それが「いぶすき」と呼ばれるようになり、後に「指宿」の字が当てられたと思われる。
47	開聞	かいもん	指宿市・由来は、開聞岳の古名とされる「枚聞（ひらきき）」「開聞」に由来し、古くは枚聞神社の神名や社名と結びついた名称が地名化したものと思われる。
48	岡見ケ水 浜見ケ水	ちよがみず	指宿市・由来は、もともと「見水」と呼ばれた清水に由来する地名よされている。その「見水」の岡側が「岡見ケ水」で、浜側が「浜見ケ水」に分けた地名となったという。
49	温湯	ぬり	指宿市・由来は、熱すぎない温かい湯を表す言葉から付いた地名。
50	物袋	もって	指宿市・由来は、はっきりしません、土地の形や古い小字から付いた可能性もあると思われる。
51	湊泊	あまどまり	西之表市・由来は、字義から推測すると「海に潜る人（海士）と関わる「海士の泊まり（港）」を表す地名と思われる。
52	鴨女	かもめ	西之表市・由来については不明。
53	軍場	ぐにわ	西之表市・由来は、その昔、身分の高い人が数人の家来と共にこの地に住むようになった直後、追手の軍勢がやってきて激しい戦いがはじまった場所から付いた地名という。
54	花里崎	かりさき	西之表市・由来は、「花里」という小字名と岬を意味する「崎」が合わさったと米と思われる。
55	宇住庵	うずあん	垂水市・由来は、もとは寺の庵（いおり）に由来する地名とされる。
56	浦谷	うらたん	垂水市・由来は、字義から推測すると「湾の奥から山側へ入り込む谷筋」や「海（湾）に注ぐ谷や川沿いの集落」といった地形に由来した可能性が高い地名と思われる。
57	柊原	くにぎばる	垂水市・由来は、一般に「クヌギ（桐・櫟）の木が多い原（はる/ばる）」という意味から生まれた地名と思われる。

58	蘭牟田	いむた	薩摩川内市・由来は、イグサ（蘭草）が多く生えていた土地に由来すると思われる。
59	上園	うえんそん	薩摩川内市・由来は、一般に「集落の上手（かみて）にある畑＝園」を表す語から来たと思われる。
60	上戸	うえんど	薩摩川内市・全国的にある地名で、由来は「川や道・村の上手側（かみて）にある戸口（家並み）」や「集落の入口・出入口」を表す「戸」に「上」を付けたものなどが由来と思われる。
61	獺越	うそごえ	薩摩川内市・由来は、参考ですが山口県岩国市に「獺越」という地名があり由来は「川上村に古いカワウソがいて」、子どもを化かしてこの村まで追い越してきたので「獺越」というようになったという民話が伝わるが、鹿児島県の「獺越」に当てはめれる根拠はない。
62	宇都川路	うとんこち	薩摩川内市・由来は、「宇都」は小さな川沿いの細長い田園地形を表す語で、「川路」は川沿いの道や土地を指す語で、合わせて「川沿いの細長い田園地帯」という地形由来の地名と思われる。
63	可愛	えの	薩摩川内市・由来は、古くは「千臺（せんだい）宮」呼ばれた宮に由来し、天孫ニニギのミコトが住んだとされる神話伝承と結びついた地名です。可愛山陵（えのさんりょう）などの古い社陵名と共に伝わる
64	網津	おうづ	薩摩川内市・由来は、古からの湊や水運の要地で、「網を張る入り江（港）」の地形にちなむ地名と思われる。
65	頭無	かしたなし	薩摩川内市・由来は、「自分の水源はがなく、他の田からもらい水をする水田地域の事です。
66	祁答院	けどういん	薩摩川内市・由来は、中世にこの地を支配した祁答院氏（けどういんし）と地元寺院「祈祷院」の名が訛ったものとされ、「祁答院」という地名は、1955年に大村・黒木村・蘭牟田村が合併して成立した町名です。
67	小川	こご	薩摩川内市・由来は、近くを流れていた小さな川「滑川」の下流部にあたる場所から、「小さな川＝小川」に由来する。
68	甑島	こしきじま	薩摩川内市・由来は、米を蒸す道具「甑（こしき）」の形をした巨岩を神として祀った事に由来するとされる。
69	木場茶屋	こばんちゃや	薩摩川内市・由来は、もともと「木場原」と呼ばれた焼畑の土地に、良質な湧き水を利用した茶屋が置かれた事に由来するという。焼畑地「木場原」の良水を使った茶屋が地名の核という。
70	砂石	さざらし	薩摩川内市・由来は、「砂利や小石の多い土地」を表す一般語から生まれた地名と思われる。
71	庄込	しょうごもり	薩摩川内市・由来は、字義から推測すると「庄（集落）が売り込んだ場所」や「荘園の端や入り組んだ一角」というイメージから付いた地名の可能性はある。
72	川内	せんだい	薩摩川内市・由来は、川内川とその流域（川内平野）に由来する地名で、古くは神話や地形にちなむ複数の説がある。
73	高城	たき	薩摩川内市・由来は、高い所に築かれた城（山城）に由来する地名

74	南瀬	のうぜ	薩摩川内市・由来は、字義から推測するに、南の方にある瀬、つまり川の浅い流れや渡りやすい場所を表した地名と思われる。
75	別府原	びゅうのはる	薩摩川内市・由来は、古代の荘園制度に由来する「別府」という語と台地や原野を指す「原」が合わさった地名と思われる。
76	平上水流	ひらかみずる	薩摩川内市・由来は、「平佐（平地・斜面地）一帯の川筋のうち、上流側の集落」という意味合いで付けられた複合地名と思われる。
77	樋脇	ひわき	薩摩川内市・由来は、江戸時代初期に、入来院氏の古城「樋脇城」の名をとって、薩摩藩の外城として「樋脇郷」が置かれ、その呼び名が地域名に定着したものと思われる。
78	古城滑石	ふるじょうなめれり	薩摩川内市・由来は、はっきりしませんが、城跡に関係する古城と、滑石という小字名が合わさった地名の可能性が高いと思われる。
79	犬之馬場	いんのばば	日置市・由来ははっきりしませんが、「犬追物に浸かった馬場」に由来すると思われる。「犬追物」は、武士が馬に乗って犬を追い、弓の訓練をした中世から近世の行事です。
80	印口	おしぐち	日置市・由来は、この地区名そのものが起源となった姓や地名で、古い部落名に由来すると思われる。そのため「印」＝しるし、「口」は入口や谷などで、「印のある入口の地」や「ある神社や境界の標識の場所」などの推測ができる。
81	笠岡	おろおか	日置市・由来は、古代にこの一帯を支配した豪族「笠臣（かさのおみ）氏」の名に由来すると思われ、笠臣氏の領域だったことから「笠岡」の地名の元という説が有力です。
82	傘口	おろんくち	日置市・由来は、字義から推測すると「傘に関わる施設や行事（傘焼きや傘踊りなど）と関係する場所の入り口」に由来すると思われる。
83	上神殿	かみこどん	日置市・由来は、近くの神社祭祀と結びついた「神の殿（みごう/との）」＝神社や社殿を意味する語から生まれた地名と思われる。
84	久保園	くぼんそん	日置市・由来は、一般に「久保」は「くぼ地や谷状の地形」や「園」は「畑や園地・集落」などを表す事が多く、「くぼそん」の地形や土地利用に由来する地名と思われる。
85	華熟里	けじゅくり	日置市・中世から続く古い地名（名田名）で「花熟里」とも書く。由来は、西行法師がこの地を「藤の花が陽に映えて美しく熟れた里」のように称えた事に由来する。
86	郷土	ごと	日置市・由来については不明。
87	出樋	だつぜ	日置市・由来は、用水路や疎水から牟図を出す樋にちなむ地名。
88	原掛	はいかけ	日置市・由来は、「原野（畑地）が山裾や傾斜に掛かる場所」といった地形由来の可能性のある地名と思われる。
89	春原	はらんばい	日置市・由来は、一般的には、「春の野」や「春に開墾された原野」を意味する地名と思われる。
90	榎園	よのっぞん	日置市・由来は、「榎（えのき）という木が生える畑（園）」を指す地名と思われる。
91	櫛	あおき	曾於市・由来は、古くは、「櫛原（あはきがはら/あおきがはら）」と

			呼ばれた一帯に由来し、古事記や日本書紀に登場する「檣原」＝イザナギの禊の地名と結びつけて理解されている。
92	大良	おおら	曾於市・由来は、「大きな平らな土地（大いなる平地）を意味する一般的な地形由来の地名と思われる。
93	曾於	そお	曾於市・由来は、曾於郡に由来するが、「曾於」という意味、由来は不明。
94	財部	たからべ	曾於市・由来は、古代の部民組織「財日奉部（たからひまつりべ）」に由来する地名とされる説が有力。太陽神や穀霊をまつる人々の集団が置かれた土地が「財部」の地名になったという説がある。
95	ハケ代	やしろ	曾於市・由来は、「多くの社（やしろ）がある土地」や「代々続く土地」などを連想される地名と思われる。
96	天降川	あもりがわ	霧島市・由来は、水源が天孫降臨の神話でニギノミコトが降り立った地とされる霧島山にある事から「天が降りる川」に由来するとされる地名。
97	宇都良	うとら	霧島市・由来は、鹿児島県に多い「宇都（ウト）系の地名で、細長く窪んだ田園地形を表す語が元になったと思われる。「宇都」は小川に浸食されて出来た、細長く袋状に入り込んだ田園地帯を指す地形語。
98	宇都口	うとぐち	霧島市・由来は、「宇都は、小川に浸食された細長く袋状につながった田園地帯」を指す地形語に「口」はその出入り口にあたる場所。
99	喜例川	かれいがわ	霧島市・由来は、古くは、「加礼河」や「佳例川」などと書かれた川名や地名が元で、読みは地元で「かれがわ」とも言われる事が由来と思われる。
100	神子落	かんこおとし	霧島市・由来は、「神子（みこ）」は一般には「神に仕える者」や「巫女」などを連想させる語で、「落」を含む地名は、谷筋や崩壊地・集落の端などを連想される語が合わさった地名です。
101	九日田	くぬぎでん	霧島市・由来は、「櫛田・櫛田（くぬぎでん）」の当て字で、クニギが生えていた田を表した地名が変化した可能性の地名と思われる。
102	祝儀園	しゅうぎぞん	霧島市・由来は、田の神を祀る水田地帯に由来する小地名とされる。姓の「祝儀園」も、この小字名唐生まれたという。
103	竹子	たかぜ	霧島市・由来については不明。
104	黒葛原	つづらばら	霧島市・由来は、黒いツル植物がからむ原野」言った自然景観を表した地名と思われる。
105	丹生附	につけ	霧島市・由来は、推測ですが「丹生」は水銀を産した土地や赤土・鉱物に関わる地名と、「附（つけ）」は「～に付属する土地」や「～に続く場所」という意味で使われる語。
106	柙田	はした	霧島市・由来は、「櫨（はぜ）の木がある田んぼ（田）」という地形や景観に由来する地名と思われる。
107	宝瀬	ほぜ	霧島市・由来は字義から推測ですが、「宝」＝貴重な物や豊の産物で「瀬」＝川の浅く流れる早い場所が連想される地名です。
108	赤生木	あこうぎ	南さつま市・由来は、推測ですが「赤い木」や「アコウ（榕樹）」な

			どに関連する地名と思われる。
109	尾下	おくだり	南さつま市・由来は、山の尾根や峰の下、ふもとを表す地名とされる
110	鴻巣	ぐるす	南さつま市・由来については不明。
111	界守	かもり	南さつま市・由来は、字義から推測すると「界」は境界や境（村境・郡境・藩境など）を指し、「守」は境界を守る人や場所を表す漢字で、「村や領地の境界を護る役目の場所」という由来の地名。
112	惣の木場	すのこば	南さつま市・由来ははっきりしませんが、「木材置き場に由来する地名と思われる。
113	舞敷野	もしきの	南さつま市・古代神話に登場するニニギノミコトの皇居「笠狭宮（笠沙宮）」があったと伝わる土地に由来すると思われ、日本神話に由来する地名。
114	猜ヶ宇都	あべがうと	志布志市・由来は、江戸時代の「門割制度」の門名に由来する地名と思われる。
115	肆部合	しぶあい	志布志市・由来については不明。
116	蓬原	ふつはら	志布志市・由来は、地名学的には「蓬（よもぎ）＋原（はら）」＝ヨモギの生える原野を意味する地名と思われる。
117	有良	ありら	奄美市・由来については不明。
118	辺留	べる	奄美市・由来は、海岸地形に由来する地名と思われる。
119	山間	やんま	奄美市・由来は、多くが地形や自然環境を直接表す言葉に由来する地名と思われる。
120	揖宿	いぐすき	南九州市・由来は、指宿温泉のある一帯を古くは「湯豊宿（ゆほすき）＝湯の豊かな宿と呼んだ事に由来するとされる。
121	顚娃	えい	南九州市・由来は、古くは「江（え）」＝入江を意味し、池田湖やその入江に由来する説が有力です。入江を表す（エ）が転じて顚娃になったと思われる。
122	桐木平	きのきでら	南九州市・由来は、一般には「桐の木がある平らな土地」を意味する地名と思われる。
123	神殿	こうでん	南九州市・由来は、多くの場合、神に関わる田や社地（神田・神殿）に由来する地名と思われる。
124	土喰	つちくれ	南九州市・由来は、「土を喰う（削るや崩す）ような崖地や浸食地形、あるいは土砂崩れが起き易い場所を指した可能性のある地名。
125	蓮子	はずし	南九州市・由来は、「ハス（蓮）の多い湿地や水田地帯に由来する」と思われる。
126	馬鍬水流	まかんずる	伊佐市・由来は、「馬や鍬で耕す畑のような場所にある水の流れ」という意味合いから付いた地名と思われる。
127	馬渡	もたい	伊佐市・由来は、「馬で川や湿地を渡った場所」意味する説が有力な説と思われる地名です。
128	始良	あいら	始良市・由来は、古代の郡名「始羅（あいら）」に由来し、火山地帯や入り組んだ地形を表す古語に関係する地名と思われる。
129	蒲生	かもう	始良市・由来は、この地にガマ（蒲）が多く生えていた事に由来する

			とされ、畳表の原料となるガマの群生地が地名の語源という。
130	臥蛇	がじゃ	鹿児島郡・由来は、島（臥蛇島）の姿が「伏せた蛇」に似ている事に由来する地名とされ、「蛇が地面に横たわるような島影」から名付けられたと思われる。
131	大薄	おおすき	薩摩郡・由来は、江戸時代に「大薄門」という門割りがあり、そこから「大薄（おおすき）」という地名が生まれたと思われる。
132	搦	からげ	薩摩郡・由来は、「搦」は一般には「からめる・からげる（巻きつける・縛る）などの意味があり、「搦手（からめて）」など城郭用語や地形に由来と思われる地名。
133	柊野	くきの	薩摩郡・由来は、字義から推測するに「柊（ひいらぎ）」の字を当てた後世の表記とみられ、櫛（くのき/くぬぎ）に合う漢字が当てられた可能性が高いと思われる。
134	求名	ぐみょう	薩摩郡・由来は、殿様に村名を「求めた」事にちなむという伝承により付いた地名と思われる。
135	神子	こうし	薩摩郡・由来は、古くは「神子村」と呼ばれ、川内川沿いの集落名として中世から見える地名で、「神子」は神に仕える者や巫女などの語から転じた地名です。
136	山門野	やまどの	出水郡・由来は、字義から「山」と「野」が広がる地形を表した山地が入り混じる土地に由来すると思われる。
137	興辺	くべ	始良郡・由来は、字義から推測すると「開けて栄えた地」や「新しく興した集落」という意味の地名と思われる。
138	三堂	みどう	始良郡・由来は、室町時代後期江戸時代にかけてこの一帯に三つの寺院があった事に由来する地名とされる。
139	湧水	ゆうすい	始良郡・由来は、町内の湧き水（竹中池や丸池）にちなみ、豊かな湧水に恵まれた土地がある事から名付けられたという。
140	後迫	うしとざこ	曾於郡・由来は、谷や山の「後ろ側や奥まった所」を表す語から生じた地名と思われる。背後が谷になって狭まった地形を指す語源説が有力な地名と思われる。
141	仮屋ヶ谷	かいはがたん	曾於郡・由来は、仮屋があった谷という意味の地名。
142	梶谷	かくだに	曾於郡・由来は、戦国期の防御施設「梶（かこい）」と、谷地形を表す「谷（たに）」が合わさった地名と思われる。柵や垣で囲った防御的な谷間を指す名称と思われる。
143	梶段	かこいだん	曾於郡・由来は、「梶」は「かこい（囲い）」などの意味を持ち漢字で「囲いのある段丘や段々畑」などに由来する可能性の地名と思われる
144	千草	ひっさ	曾於郡・由来は、「多くの草木が生い茂る土地」を表す一般名詞形生じた地名と思われる。
145	穂園	ほぞん	曾於郡・由来は、林業用語の「採種穂園」や「採穂園」があり、挿し木用の穂木を採るために木をまとめて植えた園地を指す地名です。
146	档ヶ山	まてがやま	曾於郡・由来については不明。
147	肝属	きもつき	肝属郡・由来は、古代の郡名「肝坏（きもつき）」にさかのぼり、奈

			良時代に日向国から分立して大隅国が置かれた際の郡名として登場。語源ははっきりしませんが、古い豪族名や地形や川名などに由来する説がある。平安期の「和名抄」に「支毛豆支（きもつき）」という訓が付された表記がある。
148	崩尾	くえお	肝属郡・由来は、崩れやすい斜面の先や崩れ地の端のような土地に関係して生まれた地名と思われる。
149	柅元	たぶもと	肝属郡・由来は、柅（たぶ）の木が群生していた場所や根元。起点となる場所といった意味合いの地名と思われる。「柅（たぶ）」はクスノキ科の常緑樹で、暖地の海岸部などに多く生える木。
150	鞍田	つつしだ	肝属郡・由来は、一般的解釈で、「馬の鞍のような形の田」や「鞍を置くような窪地の田」のなどの連想できる地名ですが、確定できない
151	別府ヶ城	びゅうがじょう	肝属郡・由来は、荘園としての「別府（ばっふ）」という呼び名と別府氏の居城名に由来する。
152	大根占	おおねじめ	肝属郡・由来は、中世にこの地を本拠とした在地武士「禰寝（ねじめ）氏」の名に由来すると思われる。
153	落河	おてご	肝属郡・由来は、字義から推測すると「川や河川の地形に関わる地名の由来と思われる。
154	命苦	めとま	肝属郡・由来は、平家の落人がこの地で命運を占った事にちなむ地名と思われる。
155	笠	おろ	肝属郡・由来は、古代の地名「笠狭（かささ）/笠沙」に由来すると思われる。
156	根占	ねじめ	肝属郡・由来は、有力説として「肝属山地の根にあたる入り江を占める土地」を意味する語から生まれた地名と思われる。中世には、同地を本拠とした武家の禰寝（ねじめ）氏の拠点でもあり、氏名との関係も指摘されている。
157	禰寝	ねじめ	肝属郡・由来は、古代の大隅国の郷名「禰寝郷（ねじめごう）」に由来し、のちに荘園名「禰寝院（ねじめいん）」として受け継がれたと思われる。
158	肝付	きもつき	肝属郡・由来は、中世に大隅を支配した武家「肝付氏」に由来する。
159	谷山迫	たんにやまごこ	肝属郡・由来は、谷や山に囲まれた迫地形の場所を指した地名。
160	平後園	へごぞん	肝属郡・由来は、「平らな場所の後ろ側にある畑（園）」という意味合いを持つ地名と思われる。
161	宮下南	みやげみなみ	肝属郡・由来は、神武天皇の両親の宮跡とされる「神代聖蹟西洲宮跡」や、これを祀る桜迫神社があり、建国神話の伝承地とされる「宮（社殿や宮跡）の南側に位置する区域」を示す方向地名に由来する。
162	思勝	おんがち	大島郡・由来については不明。
163	生間	いけめま	大島郡・由来は、推測ですが「港や入江に関わる古い言葉が転訛した地名とみられ、古くから舟運と結びついた場所です。
164	勝能	かちゆき	大島郡・由来は、「戦いに勝つ」や「能力に優れる」といった意味合いから名付けられた可能背が高い地名です。

167	花天	けてん	大島郡・由来は、字義から「景観の美しさや信仰（天や神）を連想する説がありますが確定的ではありません。
168	花富	けどみ	大島郡・由来は、「花」や「富」から推測すると、豊かな景観や資源を連想させる当て字の地名と思われる。
168	安木屋場	あんきやば	大島郡・由来は、「網小屋場（あみこやば）」が訛った地名と思われる。「網小屋場」は漁師たちが網を干し、休むための小屋。
169	城久	ぐすく	大島郡・由来は、グスク（城や祭祀の場）に由来する地名と思われる
170	花良治	けらじ	大島郡・由来は、古くからの村名「花良治村」に由来し、もともとは「ヒイラジィ」という呼び名の集落が、当て字で「花良治」という漢字が当てられたという。
171	花徳	けどく	大島郡・由来は、古い呼び名が「キイドゥ」で「植物（農作物）がよく出来る所」という意味とされる地名です。
172	兼久	かねく	大島郡・由来は、奄美群島の徳之島に旧行政区画名「兼久」（かねく）にする可能性が高いが、語源の定説は「浜の砂地または低地」という意味する沖縄語に由来する。
173	木之香	きのこ	大島郡・由来は、字義から「木の香り」や「木の多い場所」といったイメージが連想される地名です。
174	出花	でき	大島郡・由来は、本来「出たばかりの花」や「咲き始めの花」という意味があり、一般語義からは「新しく開けた土地」や「川や海に面した出端の場所」などを連想される地名である可能性がある。
175	芦清良	あしきようら	大島郡・由来は、「葦（あし）が美しい場所」という意味から付いた地名と思われる。奄美方言で「アシ（葦）＋キュラ（美しい）を合わせた地名です。



沖縄県



NO	地名	読み方	由来
1	安次嶺	あしみね	那覇市・由来は、琉球王国時代の村名「安次嶺村（あしんみむら）」に由来し、更に古い形は人名の「亜斯美（あしみ）」にさかのぼると思われる。
2	安謝	あじゃ	那覇市・由来は、古くは「安謝村（あじゃむら）」と呼ばれ、安謝川河口付近の農村集落に由来する名称で、川と湊を中心に形成された村名と思われる。
3	天久	あめく	那覇市・由来は、古くは「あみく」とも発音された集落名で、真和志間切天久村に由来し、天久城（グスク）や天久宮などの聖地を中心に形成された地名と思われる。
4	奥武山町	おおのやまちょう	那覇市・由来は、もともと那覇湊内にあった小島「奥武山（奥之山）」の名に由来する地名です。
5	小禄	おろく	那覇市・由来は、古くは「うるく」と記される集落名に由来し、その

			読みが変化して現在の「小禄」という漢字表記になったと思われる。
6	金城	かなぐすく	那覇市・由来は、もともと首里と小禄一帯にあった村名や字名に由来し、隣村「儀間」と合わせた「儀間金城」という呼び名から現在の那覇市金城などに受け継がれたと思われる。
7	垣花町	かきのはなちょう	那覇市・由来は、古くは「カツヌハナ」「垣之花」「垣花地（かきのはなち）」などと記され、港を見下ろす丘や岬状の地形を指す古い地名
8	十貫瀬	じっかんじ	那覇市・由来は、岩の上に置き忘れた十貫文の銭が数年後もそのままだったという伝説に由来する地名です。那覇市牧志や美栄橋周辺の古い地名として知られる。
9	通堂町	とんどうちょう	那覇市・由来は、那覇港の突堤にあった迎恩亭（げいおんてい）という建物の別名「通堂（とんどう）」に由来すると思われる。冊封使を迎える施設名「通堂」から町名になったという通説がある。
10	西武門	にしんじょう	那覇市・由来は、那覇の城下町の北側の大通りの入口（門）を指す言葉が当て字化したものと思われる。方向語の「ニシ」の意味が本土と異なる事がポイントです。
11	樋川	ひかわ	那覇市・由来は、「樋を使って水を導いた湧き水（井戸）」に由来するとされる。那覇市の樋川も、この湧き水地名から行政区名になった。
12	真地	まあじ	那覇市・由来は、赤色の土壌（赤土）を指す言葉に由来する。
13	宮城	みやぐすく	那覇市・由来は、基本的に「城（ぐすく）」に由来し、「御城や先生奈城（みや＋ぐすく）」が語源という。
14	銘苅	めかる	那覇市・由来は、かつては村名「銘苅村（めかるむら）」に由来し、一族名「銘苅氏」に深く結びついた地名。
15	首里汀良町	しゅりてらちょう	那覇市・由来は、「汀志良次（ティシラジ）」に由来し、その字や簡略化として現在の「汀良」が使われるようになったと思われる。
16	安仁屋	あにや	宜野湾市・由来は、宜野湾市北部の旧集落名で、現在の「宜野湾市安仁屋」という地名に受け継がれた沖縄固有の地名から地名・姓です。語源については不明です。
17	新城	あらぐすく	宜野湾市・由来は、新しい城（ぐすく）」＝新城という意味に由来。
18	我如古	がねこ	宜野湾市・由来は、古くは「我仁横」「かよく」「がよく」などと記され、浦添間切から分かれた古い村名が現在の字名として残ったものと思われる。
19	喜友名	きゆな	宜野湾市・由来は、古い集落名「喜友名村（ちゆんなーむら）」に由来し、周辺のグスク（城跡）や聖地と結びついた地名です。
20	野嵩	のだけ	宜野湾市・由来は、もともと「野嵩村（ぬだきむら）」と呼ばれた集落名で、台地の崖下の低地に立地した地形に由来する地名と思われる
21	伊原間	いばるま	石垣市・由来は、「伊原間」は日本語ではなく、八重山の在来語である琉球語系に由来するものと思われる。
22	南ぬ浜町	ばいぬはまちょう	石垣市・由来は、「南ぬ」は、八重山方言で「南（みなみ）」を意味する言葉に由来し、石垣島の南側の海に面した埋め立て地であることから、この方言を生かして名付けられた地名と思われる。

23	桴海	ふかい	石垣市・由来は、石垣島北東部の低湿地や入江周辺にあった集落に由来し、地形（深い入り江やくぼ地）を表す言葉から名付けられたと思われる。
24	伊奈武瀬	いなんせ	浦添市・由来ははっきりしませんが、「いなんせ」という琉球語の音に漢字を当てたものと思われる。
25	西洲	いりじま	浦添市・由来は、「西＝いり」という沖縄方面と、海辺の州を表す漢字を組み合わせた地名であり、「西に位置する洲（島状の土地）」という意味合いの地名と思われる。
26	城間	ぐすくま	浦添市・由来は、もともと「城（ぐすく）」に由来し、「城のそばや城のある場所のあいだ」を意味する地名と思われる。
27	勢理客	じっちゃく	浦添市・由来は、古い人名や氏族名や祭祀を担ったノロ（神女）の名に由来すると思われる。
28	沢岬	たくし	浦添市・由来は、はっきりした語源説は残っておらず、古くからの村名や人名として現れる中世以来の固有地名と思われる。
29	東江	あがりえ	名護市・由来は、名護の東側（あがり＝東）に位置する集落であることに由来するとされる。
30	宇茂佐	うむさ	名護市・由来は、語源説では確認されていないが、古くからの集落名として「うむさ村」「宇茂佐村」として記録されている地名。
31	我部祖河	がぶそか	名護市・由来は、古くは「かぶそか」や「がぶそか」と表記された村名が後に「我部祖河」という漢字を当てたものと思われる。
32	瀬嵩	せだけ	名護市・由来は、方言名「シダキ」が示す通り、「海の瀬や浅瀬・岩礁のある所」に由来する地名と思われる。
33	田井等	たいら	名護市・由来は、語源として「平坦な土地」または「高い坂」を意味する地形語に由来する地名とおもわれる。
34	汀間	ていま	名護市・由来は、汀間川とティマダ川に挟まれた、大浦湾の水際（汀）に位置する事から「水際の場所」という意味で付けられた地名と思われる。「川と海が接する水際の地形」が由来。
35	天仁屋	てにや	名護市・由来は、はっきりとした語源は不明ですが、17世紀中ごろの「絵図郷村帳」には「てぎな村」と記録されており、後に「天仁屋」の漢字を当てたと思われる。
36	偽又	びいまた	名護市・由来は、湿地に生えていたイグサ（ビー）に由来される。低湿地に自生していた植物名と、地形（また＝股や又のような低地）を合わせた地名と思われる。
37	振慶名	ぶりけな	名護市・由来は、石灰岩が群立つ場所を開墾した土地を意味する語から来たとと思われる。
38	辺野古	へのこ	名護市・由来は、琉球語の「ヘヌク（ヒヌク）」という土地神の名に由来する説が有力です。現在の「へのこ/辺野古」は、その音が変化した形と思われる。
39	山入端	やまのは	名護市・由来は、古くは「山饒波」と書き、「山中の広い原」を意味する言葉に由来するとされる。

40	世富慶	よふけ	名護市・由来は、那覇から北へ向かう道中で「夕暮れ（ユックイ）の頃に着く場所」であった事に由来するとされる。那覇を朝出て夕方に着く目安の宿場的な地点という意味合いと思われる。
41	饒平名	よへな	名護市・由来は、方言名（ユピナ）に由来し、その意味を「広い原」とする説が有力ですが、定説とはなっていない。
42	阿波根	あはごん	糸満市・由来は、古くからある村名や地名ですが、固有の古地名がそのまま残ったものと思われる。
43	宇江城	うえぐすく	糸満市・由来は、琉球方言で「城（グスク）」を意味する語に「上・北側」を表す語が結びついたものと思われ、「上手（かみて）の城（グスク）」を指す名称と解釈できる。
44	喜屋武	きやん	糸満市・由来は、古い琉球語で「島の最南端」を意味する語に由来するとされる地名です。特に糸満市喜屋武や喜屋武岬など、本島南端部の地名と結びついている。
45	安慶田	あげた	沖縄市・由来は、不明ですが近世以来の「安慶田村」という歴史的な村名を継承したものと云う。
46	池武当	いけんとう	沖縄市・由来は、「池のような湿地や土壌の土地」を意味する事に由来するとされている。
47	御殿敷	おどんじき	沖縄市・由来は、もともと沖縄市大工廻の一部で、現在は嘉手納弾薬庫地区となっている。「御殿」は元々身分の高い人の住まいや公的な御殿建築を指す言葉です。
48	越来	ごえく	沖縄市・由来は、按司（王子）が「村を超えて来た道」に由来すると伝えられ、王子一行が村々を超えて通った道筋が語源という。
49	古謝	こじや	沖縄市・由来は、古からの集落名で、「越来（ごえく）一帯の古い村・聖地に由来する地名」と思われる。
50	胡屋	ごや	沖縄市・由来は、琉球王国時代からある村名「胡屋村（ごやむら）」に由来し、表記は「胡屋」「呉屋」「ご屋」などと書かれていた。語源の由来については不明。
51	園田	そんだ	沖縄市・由来は、戦後できた町名で、由来については不詳です。
52	大工廻	だくじゃく	沖縄市・由来は、大工の職人が集住した村（町）に由来する。
53	比屋根	ひやごん	沖縄市・由来は、古くは「比屋根村」と呼ばれた集落名に由来し、周辺の小字を含む村落名がそのまま現在の地名になった。語源は不明。
54	豊見城	とみぐすく	豊見城市・由来は、「豊かな眺めの城（グスク）」を意味する城名に由来すると思われる。中世の城（豊見城グスク）の名が周辺一帯の地名となり、現在も受け継がれたもの。
55	保栄茂	びん	豊見城市・由来は、もともとの呼び名は「ほえむ/ぼえむ」などが訛って現在の「びん」になり、漢字「保栄茂」はその音に当てられた字とされたのが有力な説。
56	真玉橋	まだんばし	豊見城市・由来は、首里へ通じる軍事道路「真珠道（まだまみち）」と、その語「真珠（まだま）」に由来すると思われる。「真珠（まだま）」が訛って「まだん」となり、橋名や地名として残ったという。

57	東山	あがりやま	うるま市・由来は、「東＝あがり」という方言と、東側の山や高台という地形に由来すると思われる。
58	安慶名	あげな	うるま市・由来は、安慶名城を拠点とした按司（あんし）（地方首長）一族の名に由来すると思われる。
59	安勢理	あせり	うるま市・由来は、沖縄本島中部・旧与那城村（現うるま市与那城）の集落名で、近世には「安勢理村」と呼ばれた村落に由来する。語源については不明。
60	西原	いりばる	うるま市・由来は、首里の北（方言で「ニシ」）にある地域という意味からついた地名。
61	兼箇段	かねかだん	うるま市・由来は、壇状の高台地形を表す地名とみられる。地形と城（グスク）名に由来する地名と思われる。
62	饒辺	のへん	うるま市・由来は、古くは「饒辺村（ぬひんむら）」とよばれ、与那城間切りの夫地頭の拝領地（オエカ地）であった事に由来する。
63	南風屋	へしきや	うるま市・由来は、方向を表す沖縄語の「南＝はえ」と集落や家並みを表す「屋（や）」が合わさり「南風の吹く場所や南側の集落」という意味から生まれた地名と思われる。
64	平安座	へんざ	うるま市・由来は、古くは「ヒヤムザ」や「ヒヤンザ」などと表記され、「干潟や浅瀬の多い入り江（干瀬）を意味する古語に由来する地名と思われる。
65	平安名	へんな	うるま市・由来は、古い方言で「ヘビのいる場所」を意味する語に由来する地名と思われる。
66	屋慶名	やけな	うるま市・由来は、焼畑を意味する語「キナ（チナ）」に由来するという説が有力。焼畑地を示す要素「キナ」が変化したものと思われる
67	城辺保良	ぐすくべぼら	宮古島市・由来は、確定した説はないが、湧水「保良ガー」とその周辺集落に由来する地名と思われる。
68	城辺砂川	ぐすくべうるか	宮古島市・由来は、確定した説はないが、「洲などの多い川や水流にちなむ地名」とみる説がある。
69	来間	くりま	宮古島市・由来は、中国側史料に見える表記「姑李麻」や「屈伊麻島」などが転訛し、現在の「くりま（来間）」になったと思われる。
70	板馬	いたんま	南城市・由来については不明。
71	奥武	おう	南城市・由来は、古くは、「葬所や祖霊の島」や「祓いの島」を意味したと思われる説が有力です。「祖霊を祀る聖なる島」を「示す語とみる説が代表的。
72	親慶原	おやけばる	南城市・由来は、18世紀末頃、首里から移住してきた士族が開いた屋取（ヤードゥイ）集落に由来する地名。
73	垣花	かきのはな	南城市・由来は、古くは「かちぬはな/かきのはな」と読まれた歴史のある地名で、語源ははっきりしませんが諸説ある。城（グスク）や集落周辺の「垣（かき）」と結びついた地名と思われるのが有力です
74	喜良原	きらばる	南城市・由来は、沖縄方言で「吉良（きら）」＋「原（ばる＝原野や畑地）」が合わさった地名で、原野や畑地の広がる集名と思われる。

75	玉城	たまぐすく	南城市・由来は、「玉のように美しい城」や「靈威のある城」というイメージを込めた名称と思われる。
76	手登根	てどこん	南城市・由来は、南城市佐敷の旧村名や地名に由来し、古くから人名や地名として用いられた名称と思われる。
77	仲村渠	なかんだかり	南城市・由来は、「渠（だかり）」は琉球方言で「集落」を意味し、仲村渠は「仲村集落」という意味の地名とされる。
78	富里	ふさと	南城市・由来は、明治17年に七栄村外12カ村連合戸町役場制が実施され、この十三の村（里）が富里の全域を締める事から、十三の里を美称して「富里」と称し、明治22年に「富里村」として誕生した
79	富祖崎	ふそざき	南城市・由来は、サンゴ礁の干瀬（千瀬）の先端部を指す言葉に由来すると思われる。
80	眞境名	まじきな	南城市・由来については不明。
81	新原	みいばる	南城市・由来は、古い方言が変化したもので、「ミバル（ミーバル）」という呼び名が漢字で「新原」と表記されるようになったという。
82	目取真	めどるま	南城市・由来は、もともと南城市大里稲嶺付近にあった集落で、そこから生まれた地名由来の姓や地名という。語源については琉球語で「ミドマル」で、首里系統、泊系統雍氏目取真家という。
83	湧稲国	わきなぐに	南城市・由来は、古くから、稲作と湧水に結びついた農村集落で、「湧き出る水」や「稲の国（土地）」を意味する地名と思われる。
84	座津武	ざつん	国頭郡・由来は、琉球語に当て字の漢字を当てたもので、由来は不明
85	美作	ちゅらさく	国頭郡・由来については不明。琉球語で方言に漢字を当てた地名。
86	桃原	とうばる	国頭郡・由来は、「平坦な土地（平地や傾斜の緩い台地）」を表す琉球語に由来すると思われる。桃の木とは無関係とされる。
87	辺野喜	べのき	国頭郡・由来は、谷沿いの肥えた土地に開けた集落で、「谷川の肥地」の意味と思われる地名。
88	喜如嘉	きじょか	国頭郡・由来は、「きじょか/きじゅーか」といった地元の呼び名に、意味よりも音を優先に漢字を当てたものと思われる。
89	謝名城	じゃなぐすく	国頭郡・由来は、もともとの村名「根謝銘（ねざみ）」と、城（グスク）を合わせたもので、「謝」は根謝銘、「城」はグスクに由来する。
90	一名代	てんなす	国頭郡・由来については不明。
91	饒波	ぬうは	国頭郡・由来は複数あり、「良い波や穏やかな波」にちなむ説と、氏族名に由来する説がある。
92	慶佐次	がさし	国頭郡・由来は、古くは「かさす」や「げさす」などと表記され、慶佐次川の河口周辺に成立した集落名として中世～近世の史料に現れる事が分かっている。語源は不明ですが、方言に漢字を後から当てられた表記と思われる。
93	天底	あめそこ	国頭郡・由来については不明。
94	平敷	へしき	国頭郡・由来は、琉球語の方言に、音に合わせた漢字を当てたものと思われる。
95	今帰仁	なきじん	国頭郡・由来は複数あり、主に「新来者（渡来人）由來說」と「魚来

			住（なきずみ）説」の2つが知られているが定説はない。
96	大堂	うふどう	国頭郡・由来は、「大道（おおみち）・大きな道」に関わる人名と開拓地名に由来すると思われる。
97	伊武部	いんぶ	国頭郡・由来は、川沿いの境界標識を意味する「印部（いんぶ）」に由来し、「伊武部」はその当て字とされている。
98	喜瀬武原	きせんばる	国頭郡・由来は、喜瀬は方言で「キシ」と呼ばれ、古くは「おもしろさうし」で、「きせのうら（喜瀬の裏）」や、「きせのし（喜瀬の子）」と呼ばれた。
99	谷茶	たんちゃ	国頭郡・由来ははっきりしませんが、確認できる範囲では、谷茶は古くからある地名で、「琉球国由来記」にも名前が出る歴史ある集落です。富着東方台地にあった古代村から分かれた集落とされている。
100	金武	きん	国頭郡・由来は、古くからあった「金武間切（きんまぎり）」に由来しその語源は「大きな山や山脈」を意味する言葉から来たと思われる。
101	大当	うふどう	中頭郡・由来ははっきりしませんが、沖縄語の「うふ」は大きいという意味で使われるという。
102	渡慶次	とけし	中頭郡・由来は、古くは「トゥキシ/トウクシ」と呼ばれた岩「トゥクシ岩（ジー）」にちなむ名称が時代とともに変化したものと思われる。トウクシ岩の名が転じて現在の「渡慶次」になったという伝承が地元で語られている。
103	比謝砦	ひじゃばし	中頭郡・由来は、比謝川河口に架かる橋（比謝橋）と、その周辺集落に由来すると思われる。比謝は古くからの地名で、そこに架かる橋を意味する語が付いた形です。
104	読谷	よみたん	中頭郡・由来は、もともとの沖縄語地名「ゆんたんざ（読谷山）」が由来で、戦後に現在の「読谷村」という表記に改められたもの。古い行政区画名「読谷山間切（ゆみたんざまぎり）」にさかのぼる地名
105	久得	くどく	中頭郡・由来は、もともと「クドゥク」と呼ばれた屋取集落名に由来し、尚家の久得杣山（くどうくせんやま）の開墾地として成立した事から付いた地名と思われる。
106	宇地原	うじばる	中頭郡・由来は、「旧琉球（沖縄）」に由来し、「原＝平らな広い所」を表す地名や名字」とされる。
107	栄口	えぐち	中頭郡・由来は、民間主導で宅地造成が進み、開発時に縁起の良い字を当てて作られた地名と思われる。
108	上勢頭	かみせと	中頭郡・由来は、推測ですが「勢瀬（せせ）部分は、「瀬（せ）」＝浅瀬や流れの速い所など、水辺を表す地名と思われる。
109	謝苺	じゃあがる	中頭郡・由来は、「ジャーガル」と呼ばれる土壌の名前に由来する。
110	北谷	ちゃたん	中頭郡・由来は、古い地名「きたたん（キタタン）」が音変化し、そこに「北谷」の漢字が当てられたものと思われる。
111	熱田	あった	中頭郡・由来は、勝連間切から移住してきた一族が開いた集落名と思われるが、漢字の「熱田」自体の由来は文献上不明です。
112	安谷屋	あだにや	中頭郡・由来は、古い民話では「アダン（タコニキ）」が群生した場

			所」を意味する呼び名「アダンナ」が変化したものと云う説がある。
113	石平	いしんだ	中頭郡・由来は、石が多い場所や平らな場所に関係する地名。
114	島袋	しまぶく	中頭郡・由来は、「小高い島状の地形と、その周囲の窪地が一体となった場所を指す地名として「島袋」という地名が生まれたと思われる
115	瑞慶覧	ずけらん	中頭郡・由来は、吉本系の門中（一族）の先祖たちが開いた集落とされ、特定の一族の居住地として成立した地名。「端」「慶」「覧」という漢字字体の意味は「めでたい・慶び・見る」から、後世に当て字的に整えられたと思われる。
116	仲順	ちゅんじゅん	中頭郡・由来は、もともと「喜舎場」のイラブーガー周辺にあった「仲順セキブイ」と呼ばれる七世帯から始まったという。その後、ナス御嶽付近を経て現在の地に移動したという。
117	武宇留原	ぶうるばる	中頭郡・由来については不明。
118	伊集	いじゅう	中頭郡・由来は、イジュ（ヒサカキに似た常緑樹）の木に由来する説が有力です。ほかに、魚が多く集まった事にちなむ説もある。
119	中城	なかぐすく	中頭郡・由来は、「中グスク（中城）」というグスク（城）の名に由来すると思われる。
120	和宇慶	わうけ	中頭郡・由来は、かつての「和宇慶村」は、琉球王国時代の中城間切の属した村で、「わうけ村」と記されており、それに縁起の良い漢字を当てはめたものと思われる。
121	東崎	あがりざき	中頭郡・由来は、「東＝日の出の方向」＋「岬」という意味で、東側に突き出た岬を指す地名と思われる。
122	翁長	おなが	中頭郡・由来は、琉球王国時代から続く古い村名（翁長村＝うながむら）に由来する。字義からの命名理由は不明。
123	掛保久	かけぼく	中頭郡・由来は、一般には「掛（かけ）＋久保（くぼ）」という地形由来の複合地名と思われ、低い窪地にある集落や耕地を指す地名。
124	津花波	つはなは	中頭郡・由来は、「津」「花」「波」という漢字は、琉球の地名でよくある当て字で、本来の音「チファヌファ」に合わせて選ばれた表記と思われる。字義から推測すると「港の花のような波」と理解できる。
125	兼城	かねぐすく	島尻郡・由来は、一般に「城（グスク）」に由来し、「兼（かね/かに）」という人名・と結びついた「城に関する地名」とと思われる。
126	南風原	はえばる	島尻郡・由来は、首里城などの南側に広がる原野を指す呼び名が由来とされる。元々の読みは「フェーバル」で、首里の南（フェー）にある原（バル）という意味。
127	伊釈加釈	いじゃかじゃ	島尻郡・由来ははっきりしませんが、阿嘉島北西にある無人島で、沖縄方言読み「いじゃかじゃ」に当て字の漢字で表記したものです。
128	粟国	あぐに	島尻郡・由来は、かつてこの島で主に栽培されていた「粟（あわ）」に由来し、「アワグニ」が転じて現在の「あぐに」になったという。
129	大頓	おおとん	島尻郡・由来は、首里系の旧士族が移り住んで出来た集落に由来する「大頓」（旧表記は大屯）は、もともと「大屯原屋取」と呼ばれた屋取集落が前身と思われる。

130	具志頭	ぐしちゃん	島尻郡・由来は、古い歌謡「おもろさうし」に詠まれた聖地名と、集落名「よりたち（ゆったちじょう）」の伝承に由来すると思われる。
131	後原	くしばる	島尻郡・由来は、現状では「原（はる/ばる）＝原野に、位置関係を示す「後（うしろ・あと）」が付いた地形由来の地名と思われる。
132	小城	こぐすく	島尻郡・由来は、「小さなグスク（城や城跡）」を意味する地名。
133	東風平	こちんだ	島尻郡・由来は、「東から吹く春の風（こち）」に由来する地名。語源は、沖縄方言の「んだ（んた）」が付いて「こちんだ」となった
134	富盛	ともり	島尻郡・由来は、古くは「富盛村」や「友利村」などと記される伝統的な集落。語源は字義から「富が盛ん」や「友が利する」などの位置付け）ですが、あくまでも推測です。
135	玻名城	はなしろ	島尻郡・由来は、古くは「玻名城村」と呼ばれ、昔は「花城」と書かれグスク時代には「多々名按司の居城の城下町だったという。
136	世名城	よなぐすく	島尻郡・由来は、琉球国由来記」には「世名城村（せなぎしくむら）」と記されたという。
137	西表	いりおもて	八重山郡・由来は、「八重山の中心から見て西にある「表の島」という意味から付いたという説が有力です。合わせて、石垣島の名峰：於茂登岳との関係から説明される事も多い。
138	鹿川	かのかわ	八重山郡・由来は、鹿に関する伝承や、別の語から転訛した可能性があります、裏付けはない。
139	細崎	くばさき	八重山郡・由来は、「古浜島の最西端に細く伸びた岬の先にある集落という地形的特徴から、「細い岬（崎）」にちなむ地名と思われる。
140	仲御神	なかのうがん	八重山郡・由来は、「神の居る中央（仲）の場所」という意味合いをもつ地名と思われる。
141	南風見	はいみ	八重山郡・由来は、一般に「南からの風をよく受ける場所」を表す語に由来すると思われる。南風を意味する琉球方言の語と「見」を当てた地名とする説が有力です。

首里城の正面



制作、編集に当たり、インターネットの「ウィキペディア」及びAI データーを活用して作成しています。

制作・編集 上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原をつなぐ連絡会 会員)

連絡先 090-3545-1113

この資料は「市原ふるれんネット」のいちまる館及び資料室よりダウンロードできます。